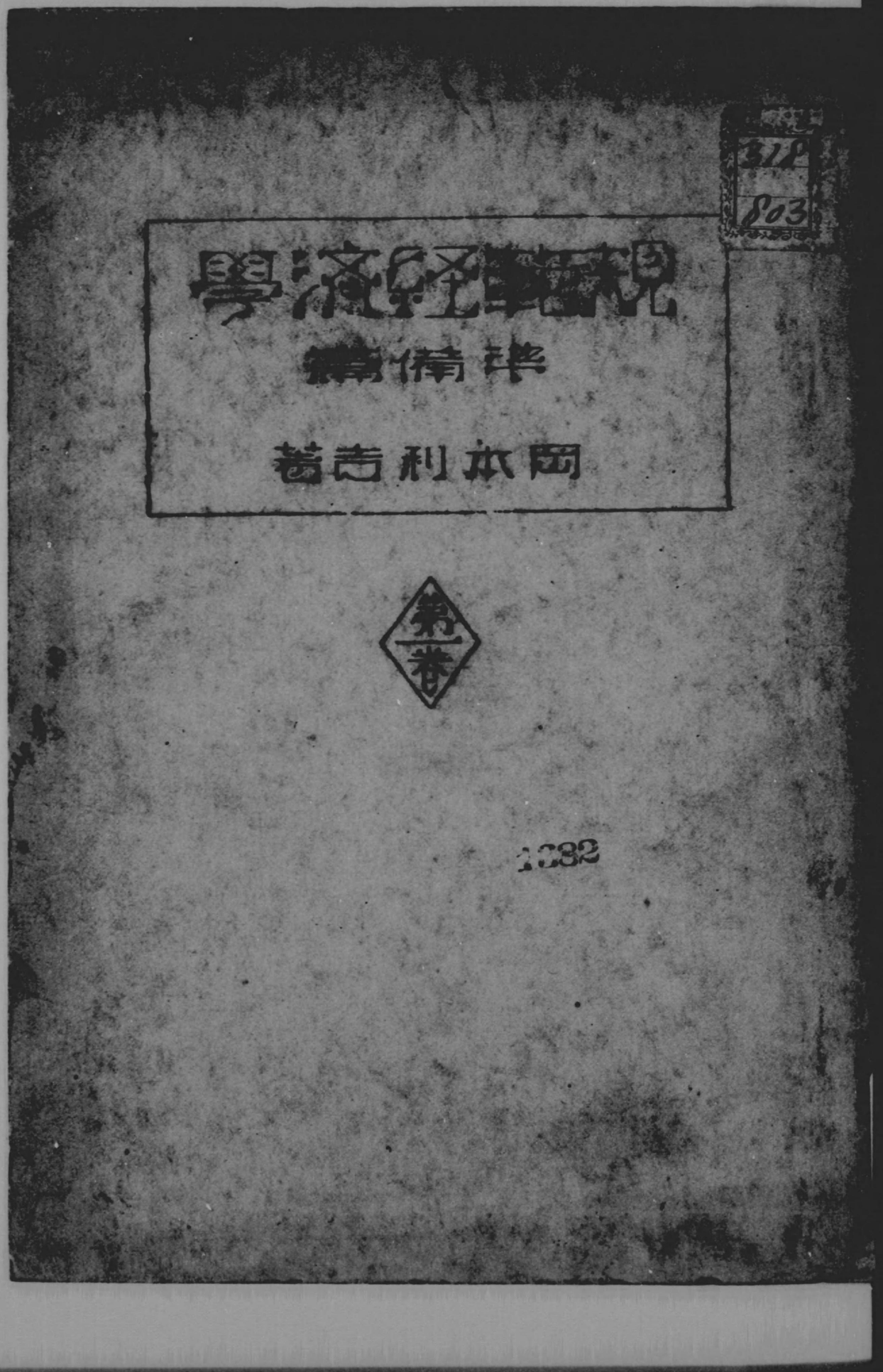


318
803

學濟經範規
備準

著吉利本岡

第一巻

1382

②

0019498000

0019498-000

特２７５－６８３

規範経済学

岡本利吉・著

農村青年共働学校

第１巻

昭和３

ADB

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２３日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

特275
683

範疇學

第一卷

準備篇

うつ高い在来の経済学によつて経済学上の種々な観念を得たが、果して其によつて経済生活の内容が判つたであろうか。読めば読むほど、ますく疑問が深くなるのが経済学も云うものなのである。例へば物價にしても資本の性質にしても、また社会に於ける経済組織の理想にしても、我等が経済学も云うが幾多の著書に依つて、疑問を与へられるばかりである。

経済に道徳わなかろうか。もしあるとしたら、経済道徳わ如何な学問が扱うであろうか。経済社会に道徳があれば、こんなにも社会生活と思想界が混乱しわしなかつたであろうに。

此頃のくわ口を開けば文化も云うが、果して文化の意義を知つてゐるであろうか。文化わしつして生れるかを知つてゐるであろうか。また文化問題を学問的に取扱うと学問わ何であろうか。文化わ経済生活以外にわない。とすれば、文化問題も、やはり経済学が取扱わねばならぬ。けれども在来の経済学わ、文化問題を他人事にしてゐる。人口長種問題、今それに我国が当面してゐる。広い世界も何時か此問題に満まなければならぬであろうを。マルサスわ問題を出し放しにして、また経済学でわ其を解決してゐない。だから、うつ高い経済学書

[illegible]に置いて、今頃我国でわ人口食糧問題に関する官設の調査機関なども設けてゐる。マルサスや道徳的に其を解決せねばならぬと結ぶがしからば経済学わ道徳を持つてゐるであろうか。困つた時だけ道徳の中へ逃げ込むけど経済学者わ学生でわいけない。人口食糧問題などわ道徳的でなく、経済的に解決せねばならぬものである。

部会と農村との関係、文明強国と弱劣民族との関係、さてわ結局の経済組織わ如何にあらねばならぬと云う重要な凡ての問題を、近世科学の方法を以つて、悉く解決しもものがこの規範経済学である。

第一巻わ其準備篇であり、第二巻だけ読めば、これが経済学かと不審に思ふけど、在来の経済学とも行き方を相違してゐる。僅に声を揚げて此規範経済学是が、うづ高い在来の経済学是が、第二巻の中頃を読むに及んで始めて読者わ成程と思われるであろう。

第三巻わ[illegible]生産を[illegible]生産わ必要な其手段である。従て経済学わ、まづ消費と使用の二生活を研究せねばならぬ筈であるのに在来の経済学わ無頓着であつて、直に生産論の講義へと這入る。それわいけない。確に問違つてゐる。辛棒して此等の生活論を研究し終わつてから、その後に生産論にいれば、物價や資本や分配等の諸難問題わ、詰つた鼻筋の通るが如く、明快に

解決されるであろう。

第三巻わ第二巻の続きとして、規範経済学最後の結論となる。経済生活の組織を研究する。えも在来の経済学がしなかつた新しい学域である。此学域に思想問題や、経済組織の重大事項が伏在してゐるのである。

以上の内容を有する規範経済学わ、経済学であり、倫理学であり、社会学でもある。しかも現実と理想の両方面を徹底的に取扱わんとする。

本書わ農村振興の中空人物を養成せんとする農村青年共働学校に於て具骨子を講義したのを、次き次きに纏めたものである。農村振興の中空人物を養成するにわ、自ら耕作して衣食しなければならぬと、深く具責任を感じた著者わ、地獄竹(岐阜県の言葉)が密生して草さへも生へぬ山中に新開墾地を開き、馴れない農を始めた。農によつて衣食するにわ、骨の折れる終日の労働を続けなければならぬ。新開墾地のことであるから、普通の田畑の数倍の労力がいる。雨の日も雪の日も私共わ決して獣と鎌を放さない。其間に本書を草稿し脱稿したのである。

岳朝未明の数時間を日課に、十枚足らずの原稿を次へ次へと書きたすのであるから用語の統一せぬ点や、技巣の学句にわ種々な欲点も

あらと、本書三巻を書き終わつて、また私の身体に余暇ができ、出版者と交渉などできるようになつてあらと、私の希望としてわ、原稿のまゝえを諸君に提出し、諸君から遠慮のない批評や訂正をして頂き、大衆的に立派な規範経済学を完成してから、出版者の手に渡したいと思ふ、批評や訂正をして下される諸君の厚意わ、将来本書を出版するとき、記録して感謝するであらと。

最后に用語文体につき詫をする。本書の文体わ眞の言文一致に努めたが、また言文一致が貫徹せぬ点がある。難渋な我国の言語わ、言文一致によつて少しでも学習に伴ふ苦労を省くことにせねばならぬ。我国の言語わ、文法などないほどに滑かになつてゐる。音便、それであるその音便を書くとき無視して、文法的の不熟な假名使をしてゐるのわ、まづ改めねばならぬことと思う。音便わ文法で教へるがよい。仮に此も語格を書く時に現わす必要が何処にあろとか。古い語格なとわ、文法を学びたい者にのみ教へ、そこで音便のことも説いて、口語との調和を取るべきである。口語に語格わ不用である。口語わ母の舌に、によつて、口から口へ教へられる。英語の会話なども、文法に拘泥せず、口から口へも暗記せねばならぬと思ふとき、大膽に眞の言

文一致を断行せねばならぬと思う。思うだけでなく本書わえを断行する。

本書を農村青年共働学校の創立に物質的或わ精神的の助力をして下された平生松三郎氏、下中弥三郎氏、新居格氏、并に全校の為に深く配意されてゐる福祉成郷翁と石井重美氏へ贈呈する。

本書三巻の賣上高わ五百円と予定して、学校附属の共働農園創立費に提供する。もし賣上高が五百円を超過するときわ、えと人間会財團へ繰入れるであらと、人間会わ其費用として有志者任意の寄附を受けてゐる。

一、唯物観によつて失われた人間性を人々の心に復活させる。

一、眞の人間性わ大自然を対立して無限の美観に生きて精神体の我にある。

一、精神体の我わ努力を修養により完成し、言行が理想に一致するところ永久不死となろう。

一、我等の理想わ物質生活の安定と幸福に開始される。

一、物質生活わ利欲の競争経済から共働一致する温い組合経済に進むとき安定と幸福が得られよう。

一、我国を育て人口と食糧問題わ山まで利用する共働経済が普及す

るとき解決されよう。

一 自己を完成し又も共働経済の建設に光駆する中堅人物を養成しよう。そして我等の万人労働を準備しよう。

最後に本書の謄写をして下された共働農園の中堅 安達五郎氏の労を感謝する。

昭和三年九月十四日

関西講演旅行出発の朝

愛鷹山中 共働農園にて

岡本利吉

規範経済學第一巻

準備篇目次

第一章 経済学の概念 1
一 知識 2
二 学問 3
三 学問の種類 6
四 規範理学 11
五 経済学 13
六 規範経済学 16
七 経済学の現位 22
第二章 経済大勢史 26
一 孫等経済時代 29
二 詐欺経済時代 33
三 資本経済時代 36
四 組織経済時代 39
(1) 中央集権的経済組織 41
(2) 自治組合的経済組織 45
第三章 規範経済学研究法 48

258 241 239 218 204

193 199 158 193 187 180 175 145 139 137 132 126 125 88 75 73 67 66

規範経済學 第一巻

準備篇

第一章 経済学の概念

学問に系統を立てゝえを分類することに付き、古来幾多の計画わ行われたが、まだ確定のものとして一般に承認されるほどのものわない。私わ斯した試みをしようと思わないが経済学の地位を知るに必要な程度に、学問に、どんな種類があるかを一おう考慮せねばならぬ。其よりも前に、学問とわ何ぞ。知識とわ、どんなものであるか、えを考へることが、学問の種類を分ける自然の順序となるであろう。

古来の学説を陳列することわ、私の取らない方針である。そうしたことわ夫々の専門の史学に譲らないと、学問が冗長となりすぎ、却て肝要の点を忘却さす誘ひともならう。もちろん学問を組立てるにわ、それ〴〵の命題に付き古来どういふ説があつたかを参考にせねばならぬが、学問を組立てゝえを説明するに、そんな点まで、だら〴〵も書き立てゝわ、理学と史学の混合となり、著者がそうした博学を誇りにしようとしない限り避けなければならぬ。理学を知らうとする読者も、史学を知らうとする読者も、違つた気構へでゐるを、著者わ了解してやらねばならない。こうした主張を持つ私わ、出来るだけ過去学説の陳列を避けるであろう。私の此態度を疑ふ者わ、物理化学や数学の教科書に過去学説の陳列があるかを考へるがよい。

学問が充実するに従ふて、理学も史学の区別わ、厳正となることを、誰もが気付くであろう。

学問わ精密となればなるほど、過去学説の陳列を廃止する。しかし学問が不精密である間わ、過去の学説を陳列し、その是非を論じた最后に、著者わ自説を古いものゝ上に乗せようとする。又もし著者が事実の研究を怠るならば、彼わ机上に学説の切張りをせねばならぬから、彼の重要な仕事わ過去学説の品評となる。が、事実を研究して精密に其を指示する理学者の態度を取るとき、机上に於ける学説の切張りわ、果して何の必要を持とうそ、であるから知識と学問に付いても、私わ端的に事実を指示しよう。

一 知識

知識とわ事物に対し我等の持つ概念と、事物相互の間に存在する関係の認識とである。

我等の周囲に弥漫する宇宙わ、全一体と映らう。しかし宇宙が単純に全一体として我等に映るとき、我等わ何等の知識をも持ち得ない。全一体の宇宙が区分されるとき、事物の概念が現われ、事物相互の間に関係が認識される。

全一体の宇宙わ、どうして区分されるであろうか。区分に関する我等自身の処理作用を調査すれば、区分の起因わ変化である。しかし変化も乱雑であれば、また何等の区分をもなし得ない。変化の中に共通がある。むしろ変化わ一定して精密に観察すれば、自然にわ一の例外さへもなく変化が確定してゐる。確定した変化、それわ、やがて理法の根源であり、全一体の宇宙を実数の部分に区劃さすべき理作用の出発点でもある。

理由わ判らない。が、我等の周囲の宇宙わ一定した例外のない変化をしてゐる。一定した変化でわ、変化が変化と交錯し、其焦点に於て、我等に事物を意識させる。例へば山とか川とかと云ふものわ、如何に我等の識域が変化しても、常に変化の焦点となつて、山わ高く川わ流れてゐる。であるから我等わ山とか川とかと、宇宙の全体から区別し、山わ大地の高く聳えるもの、川わ大地の長く窪んで水が流れるものと、一定の意義さへも持ち得るのである。かく宇宙を区劃して、其に一定の意義を附与する我等の意識を、概念とも観念とも名ける。そしてこゝに命名する一定の言語が附与される。此区劃と命名をする概念の作用わ、実に知識の第一歩であり、知識わ宇宙を変化に応じて分類することに開始されるのである。

区劃して意識された概念の指示する事物と事物との間にわ、一定の関係が存在する。理由わ不明であるが、事物相互の間にわ一定の関係が存在してゐる。我等わ亦た其をも認識するのである。例へば山を分ち川を区別すると共に、川わ山より流れ下ると、山と川との間に存在する一定の関係をも、我等わ認識するのである。此関係の認識わ、知識の重要な部分であり、事物相互の関係が一定する側より、此種の知識を理論とも法則とも名けるのである。

二 学問

知識わ分類に始まり、理論の認識に発達する。極端に云へば、小児であろうと大人であろうと、野蛮人であろうと、学者であろうと、また動物であろうと人間であろうと、持つ知識に二種類わないのである。でも我等わ学問と常識を区別する。

学問わ観察し実験し推論し、精確にされた知識である。観察わまづ宇宙の区分に始まる。区分わ定変化の事実に出発するので、漠然とした変化の類同から、各人任意の宇宙区分をするのでわなくて、変化の定事実を広く観察実験し、少しの例外さへない分類に到着したとき、我等の観念わ正確となるのである。でないと我等の分類にわ余に多くの例外がありすぎ、自然の理法の存在さえ疑わねばならなくなるが、これ自然に例外がある結果でなく、我等の認識範囲が狭く分類が出鱈目であるからである。昔わ哲学者と自称する人々さへ狭い出鱈目の偏見に立籠り、其中の極端な者等わ言語を神聖として、言語に相当する実物があるなどゝ考へた。中古となつて哲学者わ、こうしたことの誤謬に気付き、ライプニッツの前后、真理の標準を観念明瞭の程度による と考へだした。

けれども哲蒙期に前后した此等の哲学者さへ尚ほ誤解の上に立つてゐた明確な観念わ彼等の考へたやうに思惟や理性の所産でわなくて、観察の所産であつた。事物を広く観察して例外のない分類を成立さすとき、明瞭な観念が生れるのである。学問の理想とする正確な知識わ、かく例外のない分類に始り、例外のない分類から確実な理論も認識されだすのである。理論といふわ区分された事物相互間の定関係である。であるから事物の

区分が精確でないと、例外のない理論を発見することわ出来ない。過去の学説が往々例外を持つてゐたのわ、根本となる事物の分類が不精確であり、従つて認識された理論が数学的に確実な線によつて結合されなかつたからである。

分類とわ説明の方法を変へて云へば、宇宙構成の単位があるとき、其単位を種類に応じて綜合することである。宇宙構成の単位にわ多数の種類があろう。其中の異種の単位が互に一定の割合で結合するとき、種々な原子や分子や個体が現われ、しかも相互の間にわ一定の関係が成立する。学問とわ宇宙を構成の単位に区劃して置いて、この構成単位を個体に綜合し、個体を組織に従ひ再び綜合して彙集し、其彙集された同種のものに付き、共通性を発見して、更に大なる種類へと繰返し繰返し綜合し行き、其間に事物に共通する普遍の理法を発見するものである。古間でわえを真理と称するが、真理といふ言葉わ誤解され易いから私わ使わぬ。私わ知識も学問も宇宙の真理を目標とするが、知識と学問わ、真理自体でわなく、真理だと思われる認識であると考へる。

えを要するに学問わ広く観察し、出来れば実験し、観察も実験も出来ない点わ推論し、例外なく組立てられた宇宙の区劃であり、見方を変へれば区劃された宇宙部分の綜合であり、而して区劃し綜合する間に、部分相互間に発見された定関係、即ち理論或わ法則といわれるものゝ認識であるのである。えに反し常識といふわ、不質に於て学問と相違せぬが、観察の範囲が狭い為に不精確を免かれない概念と理論なのである。

三　学問の種類

知識わ宇宙の区分に始まる。宇宙の区分わ形態を目安にすることもあろう、組織を調査して実質の異同を目安にすることもあろう。組織の調査わ宇宙の区分以上の作業であるかにも見へるが、実わ形態の奥に分け入って宇宙の区分を進めるものである。組織が調査されたとき、部分と一体との関係が成立する。であるから事物相互間の関係といふわ、少なくとも二つの事項を含んでゐる。其オ一わ部分と一体との間に於ける縦の関係。オ二わ部分と部分との間、又わ一体と一体との間に於ける横の関係である。此等の関係を明確にすることわ学問の使命であり、それにわ形態と組織の両方面から、まづ宇宙の区分を精密にし、しかして后に区分された事物相互間に一定の関係を発見せねばならぬ。こうした使命の為に存在する学問を自然科学と総称する。

自然科学わ対象に従ひ幾多の専門に分れる。対象といふわ結局宇宙の区分であり、其区分わ平面的に区劃されて、地質を調査する地質学とか、動物を調査する動物学とか、植物を調査する植物学とか、人体を調査する解剖学とかに分科され、また立体的に区劃されて、宇宙全体の形態的調査をする天文学とか、宇宙を組織する物質を調査する物理学とか、物質の組織を調査する化学とかに分科される。

自然科学わ対象に従ふて専門に分科される。各専門の自然科学わ其対象を更に精細に区分して種々な事物の概念を作り、其事物相互間に確定の関係を発見しようとする。如上に見ての自然科学わ分類と理論の調査を併せ行ふものであるが、自然科学の中にわ特に分類を主要の使命とするものと、殊に理論の調査を主要の使命とするものがあり、其他に理論を応用して人類生活に寄与する何等かの必要に応じようとするものがある。故に自然科学を分類理学と理論理学と応用理学に大別することが出来よう。しかし此区別わ決して正確なものでなく、極めて大まかに特長を指示しての類別であることに留意せねばならぬ。自然科学中、単に宇宙区分の分類を使命とするものわ地理学、鉱物学、植物学、動物学、人体解剖学及び組織学の類であり、宇宙区分に基いての理論関係の調査を使命とするものわ、物理学、化学、生理学、病理学、心理学の類である。また此等理学を実際に応用して人類の生活に寄与しようとする応用理学に属するものわ、農業学、飼育学、工業学等であり、此等の応用理学わ人類の需用に向ひ自然の事物を活動さす事物固有の自然関係を調査するが任務なのである。この応用理学に対し、しかもこれを区別せねばならぬものを規範科学とする。

自然科学わ宇宙区分に開始されて其理論と応用に及び、一切の学問と知識を網羅してゐるかに見へるが、実わ自然科学の外に規範科学と人文科学の二大学問系統があるのである。学問の種類わ自然科学と規範科学と人文科学との三大系統に分割されねばならぬ。

規範科学といふわ人間に関係する科学である。人間も存在物として観察するとき、一種の自然事物であり、宇宙区分の一隅にあるものであるから、其を対象とする科学わ自然科学の分科として、解剖学や、組織学や生理学や

…理学や心理学等を成立せしめる。…家するとし、…規範科学が…るのである。

規範科学わ人間も意識活動の主体と見て、其意識が活動する標準方式を調査することも仕事としてある。意識活動も之を自然の事物として観察することが…できる。心理学わ如何なる条件のもとき如何なる方式の意識が活動するかを調査する。…科学の観察や実験や推論に従ひ、…しかし心理学でわ意識が活動する標準方式を決定することわ出来ない。標準わ何か。これやがて規範科学を特色づける要点である。

意識活動が唯一の方式に依つて現われるものならば標準の問題は起らない。一定の刺戟に対し一定の反応しか現はれなければ。意識活動わ一般の自然現象と全く同一であり。学問として自然科学以外の規範科学わないことになる。…ホルと意識活動わ一定の刺戟に対し多様な反応を呈する。如何なる刺戟に対し如何ほどの反応があるか。その調査わ心理学が調査する。…よし反応が複数であるとせよ。ある丈けの反応を事実として調査することわ、自然科学の方法によつて…ことわ。…のである。そして其調査でわ、或る刺戟に対し唯一の反応しか現はれないで明白にするだけであり、其以上の…以上の快楽を持つて、或る刺戟に対し現われる多数の反応中の或るものを標準とし、…兎余のものを標準外として排斥すれば、彼わ自然科学者でなく、人間を意識的活動の主体として観察する…が、人間を意識的活動の主体として見て、其意識が活動する標準方式を調査することも仕事としてある。心理学わ如何なる条件のもとき如何なる方式の意識が活動するかを調査する。…科学の観察や実験や推論に従ひ、…しかし心理学でわ意識が活動する標準方式を決定することわ出来ない。標準わ何か。これやがて規範科学を特色づける要点である。

意識活動が唯一の方式に依つて現われるものならば標準の問題は起らない。一定の刺戟に対し一定の反応しか現はれなければ。意識活動わ一般の自然現象と全く同一であり。学問として自然科学以外の規範科学わないことになる。…ホルと意識活動わ一定の刺戟に対し多様な反応を呈する。如何なる刺戟に対し如何ほどの反応があるか。その調査わ心理学が調査する。…よし反応が複数であるとせよ。ある丈けの反応を事実として調査することわ、自然科学の方法によつて…ことわ。…のである。そして其調査でわ、或る刺戟に対し唯一の反応しか現はれないで明白にするだけであり、其以上の…以上の快楽を持つて、或る刺戟に対し現われる多数の反応中の或るものを標準とし、…兎余のものを標準外として排斥すれば、彼わ自然科学者でなく

…徴わ理想論者となり、主義者となつたのである。道徳こそ主義こそ理想こそ規範科学の領域に属するものなのである。

標準わ一定刺戟に対し多数の反応が現われるとき始めて問題となる。一定刺戟といふわ条件の見て分同一件の刺戟に対し唯一の反応しか現われないことを意味する。自然現象でわ同一条件の刺戟に対し唯一の反応が、しかも条件の備はる際に現われることになつてゐる。勿論物理学にも潜熱などあつて若干の時間が経過して反応わ現わ…街上反応を見しているのであるから。単に物理学といふ如く、一分科の立場に…限界せず、広く自然界を観察するとき、自然現象の反応わ定関係にあるとし得るのである。けれども意識活動でわ同一条件に対する反応が多様であり、また反応の現われる時間にも遅速がある。

しかし此意識活動も自由でわなく、一定条件の下に一定数の反応しかなはれないのであろう。たゞ一定数の反応の中の或が現われるかは、また我等わ孰の反応を標準として活動に現るさゞばならぬかを、心理学でわ決定できない向題である。

ありき義であり、また道徳なのである。

心理学者わ一定の刺戟に対し一定に反応することも…次、自分自身の意思でさへ、昨日右耳の散歩さへ東西南北、何處に向ふか予測し難いものである。況して人類全体のことわ決して一定さ…てをらぬのである。事実に於ても日曜の散

歩わ山へ行く者、海へ行く者、千差万別である。散歩以上に複雑な人美の話題の現象や主義や道徳わ、決して自然科学の方法によって決定し得るものではない。

理想や主義や道徳しそへば、意識活動の標準方式に判断にそへば、意識活動の標準方式のことである。其取捨選択に関する問題が起る。である中の、これを標準方式とする学向が規範科学なのである。かく規範科学の決定する所わ、こと決定する学向が規範科学なのである。かく規範科学の決定する所わ、意識活動の標準方式であり、えと理想と名づけ、理想を主張する所から主義とも呼び、また道徳的にえと善とも利益とも幸福とも称するのである。

規範科学に属するものわ、数学、論理学、言語学、藝術に関する文化学育であり、衛生学、看護学、内科及び外科の医学も、応用理学の知識が混合さればある。大体に於て規範科学に属すを見られる。けれども規範科学の中でも、この人美の日常生活に直接重要な交渉を持つものわ、精神生活の領域に倫理学があり、物質生活の領域に経済学があるのである。

規範科学わ時として応用理学と混同される。一つの着言の中に両者を併也論ずることもあるが、しかし応用理学わ人生の必要に応ずる如く自然の事物を活動せしめる方法の研究であり、規範科学わ人向自身が活動する標準の研究であるので、本質的に両者わ区別されるのである。

学向わ以上に述べる如く自然科学も規範科学も重要もするが、其外に自然科学に人美活動の過程も調査する厚史科学があり、えに属する重要なもわ政治史や思想史や科学史や文化史等である。進化学わ厚史科学に属する

特色ある理学である。それやへ学向わ自然科学も規範科学も厚史科学も三大系統に種美も分け、また対象によって種々な専門の学向に分科されるのである。経済学わ其中規範科学に属するものである

四 規範科学

規範科学に関する学者の見解わ分れてある。ウントの如く主意説に立てえを是認する者等も、テーロアの如く主知説の立場からえを否認する者等も、ウィンデルバンドの如く科学を自然科学と規範科学わ尺て規範も論するものであるとして、自然科学も規範科学の区別を試ひ去らうとする者などがある。又た規範学を否認する理由に、規範理論わ自然理論の一部であるといふ主張もあり、急志の結果であるか、或わ知急の結果であるか、もにか努力も理想存たも否認する者わないであろう。唯物論者さへ、何等かの理想を掲げてあるから、少ように人美に理方してある。

わらない。この理想と努力の方式に関する調査が、必然と規範科学成立せしめるのである

自然科学も規範科学も厚史科学もわ、各々特殊な研究方法を持ってゐるが、これ丈わ科学も三大系統に区別でわならわ実際上の理由となるものである。けれども此研究方法の相違も細論することわ、経済学の緒言としての任務を超へるから、簡単に規範科学に付いて特殊な点を指摘するならば、宇宙を区分し、区分相互向の関係を発見する自然科学的の方法だけでわ、規範理論を決定することわ出来ず、規範理論を決定するにわ、規範科学の

対象とする意識活動に付き目的を調査し、其実現に最も適当する方法を考案せなければならぬ。例へば我等が類同物の数を計算するに、一個づゝ数へるもよかろうけれども、類同物の数が多いとき、一個づゝ数へるわ時間の空費である。こゝに理想が内いて、数へる努力を簡単にしながらも、且つ確実にする方法わなかろうかと考案されたものが数学である。数学わ面積や体積や距離や時間や度数の計算にまで拡張され、実に立派な規範科学である。今迄の学者わ数学を普通自然科学と見てゐるけれども、自然界を観察して数学の公式が発見されたものでなく、数学わ宇宙区分を数学的に計算する方式に付いての天才的な人類の創造であり、何人でもこれを学ぶ努力をしなければ、野蛮人と同じ状態に置かれて、数の計算能力を獲得することが出来ない。

論理学に付いても略々同様である。観察や分類や綜合や推論を正確にする努力の方式わ論理学によつて研究されるのであり、此等の方式も天才的人類の考案であつて、決して自然界の自然科学的観察から、数学や論理学の方式が発見されたのでなく、逆に此等の方式を利用して、自然界の観察が数量的にも又た論理的にも便宜となるのである。

又た今迄の人わ看過してゐたにせよ、衛生学や内科外科の医学も、健康に関する人類的努力の方式を研究し考案するものであるから、規範科学に属すべきものである。最后に経済学わ物質生活に関し重大な人類の努力方式を考究する規範科学である

五 経済学

経済学が規範科学であることわ気付かれずにゐた。いな、むしろ経済学わ自然科学とされてゐた。経済学わ果して自然科学であろうか。

経済学を自然科学とするときわ、所謂経済現象を観察して、現実のまゝにこれを記述することを任務としなければならなくなる。経済現象わ吾人を繞る宇宙識域の区分された一系統であり、しかもそれわ多数の事物を総称するものであるから、経済現象わ更に細く分類され、又た其に属する事物相互間に種々な関係が発見される。其関係わ経済上の法則ともなるもので経済学を自然科学とすれば、其任務わ経済現象の分類と、経済現象間に於ける現実の法則を発見するに止まるものとなるのである。

私が此に現実の法則といふに付いてわ少しく説明を必要とするであろう。法則わ凡て現実である。と同時に未来にも適用されるものである。であるのにこれを現実の法則といふわ、如何なる理由であろうか。

法則わ必ず未来に適用される。しかし未来に適用される法則わ同時に現在のものである。勿論それわ過去にも共通する。でなければ法則といふに足らぬ。法則の目より見れば、過去と現在と未来わ同一である。過去と現在と未来を分つわ人間であつて、自然でわない。自然わ永久に一様である。自然わ時間を超越する。時間わ人間が自然に対し附与した添加の考察方式である。

自然わ一律である。過去も現在も未来も、自然の変化わ必ず一定してゐ

る。此一定した変化を理論と名け、また法則と呼ぶ。過去にのみ存在した法則わない。現在にのみ適用される理論もない。理論と法則わ常に、過去より未来に共通し一貫するものでなければならぬ。しかし斯した観察わ自然現象に付いてのことで、人事の法則、人間社会に作為された理論に付いてわ全然別であらねばならぬ。

経済学を自然科学とするときわ、恰も物理学の如く固定した事物相互の自然関係を取扱わねばならぬ。水を熱して西度とすれば沸騰し、反対に冷却して零度とすれば氷結するといふ類の、固定した理論を取扱ふものが、また経済学でなければならぬ。進化理学の如く経済現象を歴史的過程に於て論ずとすれば、歴史的過程が経済現象其物の内容となり、経済理論は歴史的過程に於ける経済現象進化の法則を研究するものとなるであろう。此場合にも経済現象進化の法則わ過去より未来に一貫して共通するであろう。

経済学を自然科学とせず、規範科学とするとき、全く別の観察が下され、新しい任務が発生する。規範科学の取扱ふものわ、人類の理想と努力の方式であるが故に、人類の理想が向上し、努力に付き新しい方式を発見するに従ひ、経済学わ進歩することゝなるのである。自然理論わ一定不変であるが、人間社会の理論わ、或わ堕落し或わ向上し、途中に波線を描くが、大勢に於て進歩発達するものである。従つて人類努力の跡を記述する歴史科学も発達の道程を辿る。

経済学わ自然科学であろうか。又わ規範科学であろうか。アダム・スミス以来、所謂正統派の所説わ経済学を自然科学として取扱つてゐる。彼等わ

現実な経済現象を観察して、不易の法則を発見することを任務とした。市場價格に関する需要供給の方法や、賃金の鉄則、或わ地代の原則と称せらるるものわ元より、マルサスの人口論に至るまで悉く自然科学の立場より観察されたものである。然らば経済学わ自然科学であろうか。

市場價格に関する需要供給の法則わ、恐慌を含み又好景気による物價の暴騰を包擁し、千古より万代の未来まで不易の天則であるかに見へるが、最近に於ける経済思想の傾向わ、其を否認してゐる。賃金の鉄則や地代の原則わ最も強硬に抗議されてゐる。其他人口論にしろ、資本論にしろ、生産交換、分配の諸関係に於て、正統派経済学の説く所わ、マルクスやクロポトキン等の思想によつて、悉く非難攻撃されてゐるのである。果して経済学わ自然科学であろうか。

経済学が自然科学であるならば、アダム・スミス等正統派の学説と、マルクス等社会主義者其他の新説と、孰れか誤謬でなければならぬ。そして孰れを誤謬とするかの判断の標準わ、現実な経済現象の観察に依らねばならぬ。

現実な経済現象を観察するとき、正統派の経済説わ正当とされねばならぬ。然らばマルクスやクロポトキン等の新説わ悉く誤謬として捨てられねばならぬであろうか。否、否経済学わ人類の経済生活に於ける理想と努力の最良な方式を研究するものである。正統派の所論が是か、社会主義者等の所説が是か、又最良の生活方式わ此等の主張の外に在るかわ、単に現実の経済現象より判断し去るべきものでなく、人類の経済生活に於ける理想

と最良の工夫により、批判し選擇されねばならぬものである。此に於て経済学わ規範科学であると判然と知り得るのである。但し経済現象に関する分類科学が別に存在しないから、経済学わ規範科学であると同時に経済現象の分類に関する自然科学的の研究とも、同時に取扱わねばならぬのである。

六　規範経済学

経済学わ規範科学に属し、物質生活に於ける人類の理想と努力の方式を研究するものである。詳しく云へば、人類の物質生活に於ける理想を目標とし、人類の物質的努力に関する最良の方式を研究しようとするものが経済学なのである。簡明に定義すれば、経済学わ人類社会の物質生活に関する規範法則（又わ理論）を調査するものと云ひ得るのである。

規範法則を調査すると云ふわ、人間性を検査し其に適合する状態わ何ぞと尋ね、其状態の確実な作出方法を研究することであると、規範科学を区別する当初に指摘して置いた。簡約して理想といふわ、人間性を検査し其に適合する状態を発見することであり、努力といふわ、そうした理想の状態を作出しようとする緊張である。それ故に理想と努力を論ずる規範科学としての経済学わ、密接に自然科学と関聯するのである。

理想を任意としてわならぬ。努力を自由としてもならぬ。理想わ制約され、努力わ方式を規定されてゐる。理想を制約し、努力の方式を規定するものわ、自然の理論でなければならぬ。であるから規範科学と自然科学の

区別わ否認され得ないでもない。私わ講学の便宜と、又単純な自然現象の外に、人類の活動に関する学問範囲があることを意識して、一般自然科学から特別に規範科学を区別せねばならぬを提言した。しかし自然科学も規範科学も、科学と云ふ広い範囲へ同時に包括されるものであるわ勿論である。

規範科学に於てわ、まづ人間性を検査せねばならぬ。人間性検査の方法わ、自然科学が自然事物の性質を調査する場合と同様であり、人間も自然の一事物であるから、此点に於て規範科学を特色づけることわ出来ない。規範科学わ自然科学と同じ方法を取り、人間性の検査から初まるのである。

人間性が検査によつて確定されたとき、次に起る規範科学の任務わ、人間性に適合する状態の発見である。一方にわ人間性を一定の事実として捕へ、他方にわえと交渉ある幾多の事物を観察し、其相互の間に於ける適否の関係を調査するのが規範科学である。しかも此調査わ亦、自然科学と同じ方針の下に出発し、調査される処の結果、即ち人間性に適合する理想の状態それ自体も自然の事物であり、又自然理論の埒内にあるものでなければならぬ。こうした状態を作出する努力の方法に付いても同様であつて、人間の努力を一個の事物と見て、努力と理想の間に於ける自然理論の観察から開始されねばならぬ。であるから規範科学わ徹頭徹尾自然科学に関聯し規範理論わ悉く自然理論の中に於て発見されねばならぬ。然らば自然科学のみあつて規範科学わ存在する余地がないのであろうか。自然理論のみあつて、規範理論の存在する区域わないでなかろうか。

規範理論わ自然理論の中に発見されるが、人間性わ一種でなく多種である。又た一種の人間性に適合する状態も一様でなく多様である。なほ又一定の状態を作出する方式も一個でなく数個である。自然理論のみあつて規範理論がなければ、多様の中の何を理想とし、又努力の確定方式とすべきかを決定することが出来ない。自然わ一律に変化するが、森羅万象、自然の現われる事象わ実に多岐多端である。自然理論わ多岐多端を有りのまゝに認識し、多岐多端な現実の関係を記述するのである。それ故自然理学のみあれば理想わ確定せず、努力わ方式を選択し得ないのである。こうした必要から規範理論わ生れ、其を研究する規範科学も必要となるのである。しかしながら規範理論わ必ず自然理論の中にあることを忘れてわならぬ。自然理論と全く別の古界に理想が飛び出し、或わ奇想天外な努力の方法があろうなど夢想してわならぬ。人間の力わ大自然の前にわ微弱であり、人間わ唯だ大自然に従ふて、大自然の中に生存し活動し得るのみである。でも大自然わ多岐多端であるから、それを選択する所に人間の理想が発生へ、努力が偉大な結果をさへ挙げるのである。自然理論と規範理論の相関と区別わ、よく了解せなければならぬ。

理想と努力を論ずるものわ、経済学のみでわない。人類生活の全般に亘り理想と努力を論ずる最根本のものでなければならぬ。之を人間学と名けるであろう。古来宗教とも哲学ともえふたものがえである。此根本的な知識と学問の範囲に於て、主として取扱われる所わ絶対認識の古界である。絶対認識といふわ、他の事象に関係する相対的の認識でわなくて、人間自身に

就いての絶対的省察を指し、謂ふ所の内観或わ古い言葉で大恰徹底といふものに該当する。それゆへ人間学の取扱ふ所わ、結局人間自体。もしそれが肉体以外の精神体を結論するとき、精神体と其傾向に関するものが人間学の対象であり、精神体の固有傾向わ大自然と対立して、一切の感覚を綜合的に直観する美観に帰着するであろう。此場合に人間学わ、こうした美観の固有人間性を完成して、精神体の組織を充実し、永久生命さへも獲得することを任務とする。之わ美教と題して此の人間学を別論することにしてゐる。

美教の根本的な絶対認識の人生観に出発すれば実際生活に付き必要な種々の規範理論が、終局の基礎を確立されることになる。けれども規範科学わ相対認識の古界を取扱ふが故に、美教或わ人間学と無関係に研究し得るのである。が、人間といふ広い立場を離れることわ、我等が人間である限り不可能であるから、規範科学の確定する所のものを、絶対認識の人間学からも再認することわ要害であつて且つ有効なことである。

目的わ喜びであつて必要でわない。必要わ目的を達する手段に存在し、其以外に必要の意味を捉へることわ不可能である。喜びわ絶対認識の古界に存在し、必要わ相対認識の古界に存在する。従て人生の目的わ絶対認識に発見され、二次的の理想や努力の方式わ相対認識の規範となつて現われる。理想の根柢わ人生の目的であるを思ふとき、絶対認識の古界わ相対認識の世界と密に関聯してゐるのであるが、経済学を規範科学として取扱ふとき、我等わ相対認識の古界に於ける研究に満足せねばならぬ。規範経済

学の結論を絶対認識の人間に於て再認する論究わ美教の所論に譲るであろう。

人生の終局目的が絶対認識の世界にあれば、理想を論ずる規範科学わ其に密着し、或わ其一部分でさへなければならぬとも、概念的に考へ得るであろう。けれども人生の終局目的わ絶対認識であるが、規範科学の説く所わ其終局目的に到着する手段としての規範理論の研究に局限されて差支がない。従って絶対認識の人間学と規範科学とわ対象を異にする。勿論、自然又わ人生わ凡ての方面に密な関係を持ってわゐるが、調査講述の際に彼此と混同する必要わないのである。自然界わ互に隣接し関係してゐても、動物を論ずるに植物の領分に侵入する必要がないやうに、各種の学問わ自己の研究対象に忠実であって十分である。経済理学わ特殊の研究対象を有ってゐるから、其対象にのみ専念するが学問分科の当然である。が、講究者わ学問わ互に関係し、みな人類生活の一部方面を分担して取扱ふものであることを了解し、分科の為に綜合を忘れ、人間としての全体と、宇宙としての総体を領得することを失念してわならぬ。しかし科学者が研究し講述するにわ、分科に立脚する外わないので、綜合わ各人の任務である。人間学即ち美教わ、こうした綜合に付き、各人を助けることが多いであろう。

経済学わ経済生活に於ける理想と努力の方式を研究するものである。経済生活といふわ、物質生活といふほどのものである。しかし物質生活といふわ漠然としてゐて、其全部を経済生活といふことわできぬ。物質生活の文字わ精神生活に対立し、かなり広義に使用される。之を制限して人類社

会に於ける物質生活といふとき、経済生活が指示する所のものに近付くであろう。特に経済学わ規範科学であるから、人類社会に於ける物質生活に関する理想と努力の方式を研究するものが経済学であると云へば、意味を了解して経済学の範囲を知ることが容易であろう。定義とわ一言一句を以て全般を指示せんとするものであるから、まづ大まかに、こうした程度に満足せねばならぬ。数学でわ或符号など定め、其符号が表わす意味を定めることを定義といふてゐるが、之を自然界に於ける事物の綜合指示に関する名辞の定義と混同してわならぬ。

経済学わ人類社会に於ける物質生活に関する理想と努力の方式を研究する規範科学である。其意味わ了解されたと思ふが、尚ほ理想と努力の関係を一言しよう。

物質生活の範囲に於ての理想わ、物質生活の方式が人間性に適合したものでなければならぬ。人間性に最もよく適合する物質生活の方式が理想であるが、人間性も多様であり、生活方式も多様であるから、現実の生活形式が理想に一致してゐることわ稀である。特に原始人から離れば、なれの物質生活をし、漸く家族的の物質生活を経て、習慣し伝統が長期間に過去を支配してゐる人類社会に於てわしかも人類が正当に社会としてこの物質生活を始めたのわ最近のことであるから、今日わ未だ理想の社会的物質生活が実現してをらず、又如何なるものが其理想であるかさへも確定してゐない。規範経済学わ其理想を発見せんとする。之によって理想が発見されたとき、理想を現実に一致さゝねばならぬ。こうしたことを経済社会に於け

る人类的の努力といふのである。

理想から見れば現実わ偏傾してゐる。傾斜してゐる。脆線さへしてゐる。偏傾を直し、傾斜を起し、脆線を規範のレールに飯めることを、経済社会に於ける努力とする。こうしを努力わ絶へず続けないと、現実わ脆線せぬまでも、偏傾し傾斜しがちである。そうしを努力わ一人の力でわ不可能である。大河の流水わ一人の力で堰き得ない。大河の流よりも深い根底を持つ経済社会の潜勢力を、偏傾させずに理想に終始せしめるにわ、多数者の社会的努力が必要である。大まかに云へば、組織の力に依らねばならぬ。この組織こそ、経済学に於て最も主要な講究の部分となる人类の物質生活に於ける社会的方式の問題であり、えを確定して、しかも最も有効な努力を続け、理想の社会生活方式、即ち所謂社会組織或わ経済組織を建設することが規範経済学の重大任務であるのである

七　経済学の地位

経済学わ理論理学に属する。であるから分类理学に属するもの、例へば商品学の类とわ区別され、又歴史科学に属するもの、例へば経済史、及び経済学史とも区別されねばならぬ。と同時に応用理学、例へば農業学、工業学等とも区別されねばならぬ。

社会の物質生活に於てさへ、幾多の応用理学わ存在する。応用理学わ或意味に於て範囲の狭い対象に関する特殊理学とも云われようけれども、主として理論理学を特殊事物に応用して、現実の結果を挙げることを目的として研究されてゐる。そうしを意味に於て社会的物質生活に付き応用理学を尋ねると、銀行論、消費組合論、財政学、保険論、外国貿易論、貨幣論、倉庫論、交通論、簿記法、会計法等がある。此等わ特殊方面に於ける経済理学の細論であると同時に、生活の必要に応じて、特殊な経済現象の結果を現実に挙げやうとする方法の研究なのである。えに対し経済学わ永久普遍の人类的一般物質生活の理論を研究する任務を持つから、諸多の特殊経済論或わ応用経済学と区別する為に、えを経済原論と称し得るのである。

経済学わ規範科学である。従て自然科学とわ区別される。過去に於ける経済学者わ、経済学が規範科学であることを了解しなかつた為に、アダム、スミス等正統派と称せられる経済学者わ、現実の経済現象に拘泥し、そこに存在する事実関係のみを発見し、えを経済理論と誤認してゐた。スマルクス等社会主義を説く者わ、自ら主義者と称するほどに、観念論的独断の哲学観を立て、えを経済理論と認めてゐた。両派共に誤である。

彼等の説が誤つてゐる根元わ、経済学が規範科学に属する正当な学問の地位を知らなかつたことに帰着しよう。学問を研究する者わ、先づ学問それ自体の地位を明確にしなければ、功角の大きな努力が見当違の無駄骨折となるばかりでなく、えが為め社会人类を錯誤に導く重大な結果ともならう。学者も研究者も戒心せねばならぬことである

経済学わ規範科学であるが、社会に於ける物質生活に関するものであるから、社会生活を取扱わぬ数学や論理学や言語学の类とわ判然と区別が出来る。しかし社会生活を対象とする倫理学や社会学とわ、学問全体として

の区別わ困難でないかも知れないが、現実の問題となると、彼も論じ我も論じ、立場を異にして互に同一の問題を研究することが多い。極端に云へば倫理学や社会学わ、史学として存在しようけれども、理学としての存在わ疑問である。精神生活として人間学、物質生活として経済学、其以外に社会学とか、倫理学とかいふ学問の存在範囲があり得るか疑ひである。

社会学者わ社会といふ人類生活の組織形態を対象として研究するものも社会学だと主張するであろうけれども、社会生活から物質を控除して果して何が残らうか。人類生活にわ、藝術の世界があり、愛と修養の世界があり、また絶対認識の世界もある。其他に政治の世界があろうけれども、政治の世界わ余り多く物質と交渉を持ち過ぎてゐる。率直に告白すれば、社会生活を取扱ふものわ、精神的に人間学、物質的に経済学であり、其他に社会学と称するもの丶区域を設定するわ無理である。史学としてわ社会学も存在しよう。理学としての社会学わ人類の物質生活が完全に規範化されるとき消滅するであろう。

倫理学に付いても略々同様のことが立言される。倫理学わ善とか理想とか行為とか云ふものを研究の対象とし、過渡期の今日に於てわ、種々の学説を立て、倫理学が講義されてゐるが、善や理想や行為の内容から物質を除けば、残るものわ疑問である。物質以外の善や理想わ人間学が正当に取扱ふから、学問の分科が正当に確定するとき、倫理学わ単に史学として存続するであろう。今日存在する学問の中で、倫理学并に社会学と称するものほど、内容が不確定で学者互に甲論乙駁し殆んど学問としての体裁を

為さぬものわないのであるが之れ決して学者の業でなく学問として成立し難いものも、無理に倫理学或わ社会学として論究せんとする所に、そうした惑乱が起るのであろう。私のこの主張を奇とする者わ、私の人間学即ち美教と、規範経済学の内容を吟味されるであろう。

第二章　経済大勢史観

経済事実及び経済学説の厂史も論ずるわ、專向の経済史及び経済学史に譲らわばならぬ。現代経済学の内容に於ても、正する意味に於て、経済の大勢も略説しよう。

人類社会発達の初期にわ平和な軟能が続いわ、和楽な物語ってみる。父系よりも母系にしろ。自給自足して経済的に争ふ事わ遊牧し狩猟し或わ農耕を始めもに於ても、観ねこうしも因を持もなかつも。今日に於ける未開蛮人の集團に於ても。経済以外の事情、例へば勢力の争事実が観察され、彼等が争ふしもんばひとしか感情等に基く闘争からであつもでもであらう。発生的社会学を程唱するコセンチニわ五ふつ狩猟人及び漁猟人わ最初群を組んで彼等の食物を探し家めてみた。家畜人わ武装なく、僅ばかりの植物しか植ていなかつたので彼等よりも一層強く、又一層敏捷な多くの動物し相并して闘ふことわ不可能であつも。多くの事実によれば、孤立しも個人わ自分自身で生存競争をすることが出来ない。もべ観わ相互扶助及び相互作用の欲望も有ってみるからして、彼等の勢力も増加してみるものである。」このコセンチニの所論にも見へる如く、家畜人わ争ふよりも互に扶助し物に付いても一般に観察される処で、異種族間にわ弱肉強食があり、えによつて進化も起るであろうけれども、この弱肉強食を生存競争と解釈するわ、ダーヰン一派の誤覚である。同種族の動物わ互に闘争するよりも、よ

り進に互に扶助してみることも確実である。生物進化わ同種族間の生存競争に基づかず、異種族間に於ける弱肉強食等を背景とする適者生存からの自然淘汰や、突然変異等の原因に基くことも、経済史実の研究者わ了解して置かないと、往々にして大きな錯誤に陥るであらう。

人口が増加すれば遊牧の民も大集團となり、それが大挙して牧草を逐ひ移住する処に、他種族からの疑心や恐怖の感情が激成されもであろう。太古遊牧したユダヤ人わ到る処で受難の物語を残してみる。ナイルの大野に農耕し、ピラミットを作つて栢であつた家畜人の心理を推想するとき、ユダヤ人の大家が羊の群を率みて転住するとき、平和に農耕してみも種族を恐怖に導いたわ当然である。また平和な自給自足の農民さへ人口が増加すれば、耕地を周囲に拡張し、狩猟伐採の往来も繁くなつて、隣接種族との険悪な接触が起り、誤解や疑惑が醸成され て、優越感や支配慾も昂まり、此に人類の争闘史が開始されるのである。

争闘わ争闘を呼び、名誉観や愛国心まで養成されて、アッシリアにもバビロニアにも、希臘にも羅馬にも、東わ支那にも印度にも日本にも、優勝劣敗の古界厂史が、人向わ恰も闘争本能を持つかの如く展開した。かくして家畜の姿であつた自給自足の平和な社会わ消滅し、掠奪の闘争生活が出現したものである。

優勝劣敗の古界史が開始さ小たとき、其わ突然に物質生活に影響した。人類家畜の姿わ平和な相互扶助であつたとき、恰も異種の生物間に弱肉強食が行わ小る如く、優勝集團が出現したも。優勝集團わ弱者を支配

しえを自己に隷属せしめて、彼等の生産する物を掠奪し、優勝征服者の一團わ生産労働にさへも従事しなくなり、征服した奴隷に生産労働を強制した。我等の祖先に開始された人类社会最初の物質生活方式わ、斯様な掠奪経済であつたのである。

人类が目醒めたとき、何時までも掠奪を是認してゐようか。優勝者の集團も平和が続くと文弱に流れ、武力の代りに政治の組織によつて社会を維持しようとしたした。政治組織へわ次第に多くの人が参加することになる。わ避け難い必然であり、多くの人の参加わ自然と正義の観念を呼び起し、優勝者の集團まで平和を渇仰しだし、其平和わ次第に多くの人へ自由を与へ権力を分割することによつて保たれた。学問としての経済学が成立したのわ、自由と平和が承認された近古の出来事であるが、しかし物質生活としての社会経済わ、希臘、羅馬、もしくわ其以前の掠奪時代に開始されたのである。

自由と平和の思想が勃興するに従ふて、掠奪経済わ継続され得なくなつた。けれども相互扶助の自給自足を基本とする原始時代の生活方式へ復帰することわ出来なかつた。商業が進み、大量な工場生産が産業状態を革命してからわ、自給自足とわ反対の方向へ経済生活わ赴いた。武力や政治の優勝者の代りに産業の優勝者が現われ、自由と平和を標榜しながら、弱者から掠奪にも似たことを続けた。強制掠奪時代に次いで現われたものわ詐欺時代であつた。重商主義といふわ露骨な詐欺経済の指導原理である。けれども大衆わ間もなく詐欺経済の不合理を看破した。経済学此に起つ

て、到達時代の余波を受けた産業の生活方式を年縁する重農学説を生じ、其学説が産業的優勝者に満足な解答を与へぬ為に、アダム・スミスの自由競争に基く経済学説が観迎され、其と表裏して資本経済が今日までの物質生活方式となつて現実に行われてゐる。しかし此資本経済にわ幾多の欠点があり、人类が望む処の自由と平和さへも確保されないので、マルクス其他の新しい主張を産んだ。欧洲戦后露西亜でわ、マルクス説を実行せんとし、其以前にも各国の処々で種々な新提案が試行されてゐる。しかし将来の物質生活方式の規範わ未だ確定されてをらぬ。我等わえを確定することを任務とし、まづ簡単に人类過去の経済生活方式を観察しよう。

一 掠奪経済時代

人类最初の生活状態わ判然としないが、農業さへも紀元前一万五千年頃に行われてゐたと信じられてゐる。恐らく彼等わ自給自足の生活を為し、今日にいふ社会経済わ開始されてゐなかつたであらう。猶太人の如く遊牧する大衆が牧草を逐ふて移動するに従ひ、掠奪と賣買が相混じて発達したらしい。けれども当時にわ既に優越征服者が現われてゐて、平和な賣買よりも掠奪が長い期間の世界歴史を占領した。其時代にわ自給自足よりもたゞ物質生活が拡張され、假令掠奪したにしろ、物質生活わ社会的となつてゐた。また掠奪の蔭に隠れて價格を承認しての平和な交換が発達しつゝあつた。けれども表面に活動して物質生活の中心となつたものわ優勝者の掠奪であつたので、学問としての経済学も発生する機会を得なかつた。

掠奪を原則としたからといふて、経済生活の存在を否認してわならぬ。平和と自由の上にのみ経済生活が成立するものと限定すれば、今日の社会にもまだ経済わ成立しないであらう。今日の社会わ武力によらないが、金力に依つて掠奪されてゐる。しかも其弊害わ武力掠奪に劣らず、或わ其を超へるかも知れない。金力掠奪を本位方式とする現代に経済生活の存立を認容すれば、同時に武力掠奪を本位方式とする過去戦国時代にも経済生活の存立したことを承認せねばならぬ。

戦国に開始された武力掠奪の経済わ残忍であつた。残忍の適例わ旧約聖書や羅馬史から捨ふことができる。

「ユダの王ゼデキヤの九年十月バビロン王の王ネブカデネザルその全軍を率ゐ、エルサレムに至りえを攻圍みけるが、ユダ王の王ゼデキヤ及び兵卒どもえを見て逃げ、アラバの途に行きしが、カルデヤ人の軍勢えを追ひ、ゼデキヤに追付きえを執へ、ネブカデネザルの許に曳きゆきければ、王彼の罪を定めたり。即ちゼデキヤの諸子を彼の目前に殺せり。バビロンの王またユダの凡の牧伯等を殺せり。王またゼデキヤの目を抉さしめ銅索に縛げり。またカルデヤ人火をもて王の室と民の家を焼き、邑の中に余れる民と降りし者及び其外の遺れる民をバビロンに移せり」（耶利米亜記二十九章）

古代の戦勝者わバビロン王の如く劣敗者の王と家族と将士を殺し、財宝わ掠奪し人民わ捕虜とした。捕虜わ云ふまでもなく農牧等の労働に従事せしめられ、戦勝民族わ労働せずして武技を練り捕虜にした奴隷の労作物を掠奪して富貴の生活をしたのである。羅馬の奴隷の如きわ、逃亡することが

出来ないように鎖につながれ、或わ逃亡を困難にする為に半分頭を剃り落されたりした。彼等わ妻を持つことを許されず、主人の為に傷害を受けたり、四肢を切断されたり、殺されたりしても、少しも反抗することが出来なかつた。主人わ闘場の獣と戦わす為に奴隷を賣買することも出来た。

当時に於ける物質生活の基本原理わ、労働を卑んで弱者奴隷の仕事とし強兵即ち富国を本則として、富貴わ武技を練つてわ歓楽に耽つた。地中海を繞る旧世界を征服した羅馬人わ、最もよく此の生活を代表してゐた。伊太利中部に分在してゐた数多種族わ、人口増加に伴ふて互に争闘したが、外寇に刺戟されて大同團結することを悟り、進んで外征に従事し、勝つて弱者の財宝と人民を掠奪し、次第に自ら農耕する労働を廃めて、専ら奴隷に労働を強制し、羅馬自身の民族わ武を練つて政治を語り、また歓楽に耽つてゐた。外征わ彼等に猛獣の如き野望を与へ、勝てば兵士に掠奪と強姦を許し、血に狂へる猛獣の羅馬将卒わ火の如き欲望を燃やして、到る処を蹂躙し掠奪し放火したのである。多年の紛紜の後、カルタゴに勝つた羅馬人わ戦慄すべき大虐殺を行ひ、籠城者が降服した時にわ、カルタゴ市内の住民二十五万人の中で生き残つた者わ五万人であつた。彼等わ奴隷に賣られ、市街わ掠奪されて焼き拂われ、見る影もなく破壊されて、灰燼に掩われた市街わ廃墟とする為め挙き返へされて穀物の種が蒔かれた。

掠奪経済わバビロンと云わず、古界各地に行われた。比較的道徳的な希臘が猛獣の如き野望を燃やし、しかも團結と馴練の組織が優れた羅馬に隷属するに至つたのも、富国強兵が経済原理である時代にわ、当

然の結果であつた。悠長な熱帯の印度にさへも、羅馬に劣らぬ掠奪の記録がある。

摩訶陀国と覇権を争ふた拘薩羅国舎衛城の毘瑠陀王わ、釈迦の生れた迦毗羅城を攻め滅した。一度わ釈迦の説法によつて遠征軍を引返したけれども、摩訶陀国と覇権を争ふ関係上、釈迦が遠く離れてゐた時機を利用し、大軍を以つて迦毗羅城を攻め落し、大暴虐を行ふた。釈迦の弟子摩訶男わ惨状を見るに忍びず、毘瑠陀王にこふて、彼自身の水中に沈みゐる間だけ暴虐の手を緩むことをこふて其許可を得た。かくして彼わ水中に沈んだが王を初め人々わ間もなく浮び出ると予想してゐたのに、容易に水面に現われて来ないから、水底を捜つたら、彼わ水中の樹根に自分の髪を結び付けて溺死してゐたといふことが、増一阿含経などに残し伝へられてゐる。

しかし概して東洋人種わアリアン人種に比べて平和であり、又道徳心に富んでゐた。支那でわ宋襄の仁さへ行ふ武王があつたのである。蒙古のクブライの如きわ羅馬人に次ぐ狂暴をして西欧にまで覇権を伸したが、我国第一の英雄豊臣秀吉わ、武士道を重んじて弱きを助け降る者わ悉く許したかような東洋人の道徳わ、戦勝者の地位を安固にするにわ不適当で、羅馬の覇権が永続して当時の世界に及んだのわ、残虐を基礎とする掠奪経済の結果であつたであろう。しかし大衆が自覚するに従ひ、また科学が発達して、人力に優越する絶対威力の武器が工業的に製造され出したことによつて、人間が人間を統制する武力掠奪の経済に破綻が生じた。次の経済方式わ少し改良されて、詐欺が其指導原理となつたのである。

二　詐欺経済時代

殺人々放火々強姦よりも、詐欺が仁愛の道徳である。社会経済わ暴力から道徳へと進化しつゝある。進化の一段わ強奪から詐欺へと展開した。

軍国掠奪の時代と雖も、戦争わ年中の行事でなく、弱者を威喝する盗賊頭巾であつた。王侯将相と雖も、内心わ平和の歓楽を望み、労働を賤んで奴隷の仕事とし、又奴隷から解放された自由民から、并に服従した他民族からわ租税と貢物を納めさした。租税と貢物わ平和でわあつたが、掠奪の本質形態に属することわ勿論である。軍国強兵の全期間、労働を卑んで、富貴わ租税と貢物を取り、坐して歓楽と政治を行ふことが、物質社会の生活方式であつたのである。民衆の自覚わえに対する不平の叫びとなり、また世界覇権に服せざる王侯わ、銃砲火薬の発明に伴ふて独立し、民族自主の国家組織を出現し、統一覇権の下に、上より下へと秩序的に掠奪してゐた封建制度わ破れたのである。自覚した民衆の新時代わ、まづ国家と民族を中心に、近古文明の黎明に接した。えに従ふて租税の観念も変更され、昔わ優勝集團者の私生活と支配の政治とが区別されず、租税も概わ彼等の私生活に費消されてゐたが、民族的国家が出現するに及んで、政治わ支配階級の自己満足の為でなく、民族の幸福増進の為となり、民族わ負擔能力に応じて、其費用を分擔する観念に進んだ。

掠奪から目醒めたとき、知識階級が新しい国家を組織する中堅となつた。道徳的な東洋の中でも、特に君子国と自称して来た我国でさへ、明治維新

の后わ知識を応く世界に求めて、德望よりも知育を重んじ、道学者わ遂に時代后れとなつて敬遠され、狡猾な知識階級が政治と経済を握つた。欧洲でも封建が破れた当時の諸国わ、政治も経済も此等狡猾な知識階級によつて指導された。えに従ふて暴力の代わりに詐欺による掠奪と搾取が発明されたのである。佛のコルベアや、英のクロム、ウエル等わ、所謂名宰相であつて、重商主義の経済政策を採つた。細論わ史学の範圍である。此にわえを実行した商業と、えを支持した経済学説の一例を示すに止めよう。

英語の読本に載つてゐる有名な話から、詐欺商業の実例を一つ借用しよう。南洋の島々が発見されたとき、欧洲から商人が渡航して、文明的な貨物と土人の持つ毛皮や宝石類と交換した。文明的な貨物の中に鉄砲と火薬があり、土人わ有りだけの貴重品を提供して、鉄砲や火薬を欲しがつた。火薬が盡きたとき、狡猾な文明商人わ、葱の種子を火薬の種子といふて賣り付け、火薬の種の栽培法を教へた。土人わ火薬以上に爭ふて葱の種子を欲しがり、持つだけの貴重品を提供し、そして彼等わ教へられた通り、火薬の種子を栽培した。葱わ青く芽を出し、肥料が与へられるに従ふて花を開き実を結んだ。土人わ喜んで葱の実から火薬を取り、さてえを鉄砲に使ふて獲物を狙ひ撃つた。葱の種子わ発火しない。其時はじめて欺かれたことを土人わ発見した。詐欺経済とわ此類である。

昔と云わず今日に於ても、文明国の商人が未開土人に対するときわ、往々詐欺を公然と行ふてゐる。例へば我国が樺太を領有した当時、土人に数の観念がないを奇貨とし、我国の商人が土人より獲物を買取るとき、「初

まり、一つ、二つ……十、終り」と数へて、実物十二を十個と計算したなどの実話がある。此等も詐欺経済の一例である。

詐欺経済を理論づけたものに、マーカンチリズムとフィジオクラットの両学説がある。此等を説いた学者わ、純真な研究の結果であると思つたであろう。が、此両学説に支持された重商と重農の両政策わ、孰も詐欺の掠奪を平和に行ふた。千六百十三年伴太利のアントニオ・セラわ「鉱山のない国で金銀を豊にする原因を論ず」といふ一書を著した。当時西班牙わアメリカ大陸を発見し、盛に金銀を採掘輸入し富強を極め、他の各国わえを羨望してゐて、鉱山なくして金銀を豊にする方法わあるまいかと悩んでゐた。此悩みに答へたものがセラの著書であり、彼わ工業及び外国貿易により、自国の生産品を輸出して、外国より金銀を輸入するマーカンチリズムを推奨した。十字軍以来、漸次に発達して来た国際商業わ、戦国時代の暴力に代わり富国強兵の機関となつて、貿易上の差額により国富を強大にしようとする事実と学説が生れたのである。

マーカンチリズムの理論わ平和であつた。しかし行ふ処わ詐欺であつた。商人わ顧客に隠れて原價計算の算盤を弾じいてゐる。少しでも高く商品を賣つて、多くの金銀を利益しようとするわ、マーカンチリズムの心理である。正直な農家の少年が、或る大商店へ年期奉公をした。其少年わ余り正直であつて、店の為にならぬことをするので、主人わ少年の父を呼び寄せた。朴吶な老農わ何事が起つたかと驚いて上京し、平身低頭して謝罪に冬ると、大商店の主人が云ふのに、貴様の小伜わ言ひ付けを守らず、店の為

にならぬから。善く教訓して呉れろしの事であつた。事実を聞くし、或日貴婦人が来て貴残りであある水、高価な品物を見て気に入り、其を買わうとすると、貴様の小伴が横から飛び出し、其品にわえれえれの欲しがありよく教訓しろと云われた。そんな馬鹿正直でわ商人になれわから、貴水残りとなつてゐるから別の品をあげませうと出しやばり、切角貰れる筈の残りものが貰れなくなつた。そんな馬鹿正直でわ商人になれわから、よく教訓しろと云われた。先農わ驚き又た嘆じ、商人とわ嘘を云わねばならぬものか、それでわ伴も不正直にしたくないから、お暇を頂いて連れ帰りますし、浜ぐまくしく伴の手を携うたといふ実話がある。

マーカンチリズムわ詐欺を支持する。が、人類わ自覚するに従ふて其の不正であることを覚り、真の正義と平和を追求しだした。政治と経済の実際が国際貿易上の差額を目標にできるだけの詐欺を行ふてゐる間に、経済学説わ一段と進歩し、ルイ十五世の侍医ケネーをして、フィジオクラットの学説を主唱せしめ、正理を愛する人々わ彼の門に集り、自ら経済学者と称した。近世経済学の根祇を為す思想わ彼により提出されたのである。

ケネーわ人間の目的に有用な富を生産する労力のみが生産的であるとの主張した。此主張わアダム・スミスに伝わり、更にマルクスをして労働一元の経済学説を大成せしめた。しかしケネー自身わ、価値増殖の労力も土地の農作に限つた。工業わ原料を変形するに過ぎず、商業わ富を移転するに過ぎず、工業によつて高められた価値わ、製造中に使用或わ消費された食料や原料の分量を示すに止まり、又商業階級の利得わ国民の失費を意味する。真に富を作るものわ農業のみである。この農業の所産を多くし、其か

ら農夫の生活費用を控除した差額が国の富を形成して、一切文化の資源となるから。其差額を増大にしなければならぬと主張したのである。

理論としてケネーの所説わ一段と進歩してゐる。が、支配階級が百姓を搾取することを正当づけるに過ぎない学説である。徳川幕府三百年の方針わ百姓を死さずに生かして置けばよいであつた。死なぬ程度に、生きる程度に農作物の一部を残し、他の全部を取上げることしか、平和に民政も行ふ幕府の方針であつた。家康の重臣本多正信の本代錆に、「百姓を治る法は、一年の入用の食量だけを残して、其余は年貢に取り、彼等の手許には財の余らぬ様に、且つ不足なき様に治むべし」と誡さる。又た本多利明の西域物語に「胡麻の油と百姓は絞れば絞るほど出るものなり」と書かれてある。家康の言葉として徳川実記にも「難儀にならぬ程にして、気まゝさせず百姓共への慈悲なりし」とあり。諸侯わつねに斯うした方針を以て領の百姓から搾り取ると同時に、幕府わ更に諸侯を絞つて、百の中に幕府以外の富強者を存在さないこともし政治も泰平にする要道とした。商人の中に暴富を作る者があれば、何かの口実を設けて闕所に處し、財産を没収されたのである。近松の傾城仏教経に「百姓の搾取が如何に厳しかつたかを物語る岡の小万の述懐がある。「横田村の父様ニ石ニ斗の米進につまり、六十六で水牢、男にも娘にも、子としては比身ばかりなり、しよざいこそおじやれ、出せなれ、お大名へも知らず、参宮するとて暇もらひ、廿子の身で代官所も秋納まで請合ふて牢も出しは出しも出共、何もあひてに何もしよう」フィジオクラットの学説も、詐欺

経済を掠奪経済で結ぶ時代の遺物である

三　資本経済時代

フィジオクラットの学説が現われてから、詐欺経済わ搾取経済へと進化を始めた。最も巧妙に搾取を是認する経済学説わアダム・スミスが主唱した正統派の経済論であり、其に支持される現在の資本主義経済わ、少数の有産者が多数の実産者を搾取してゐる。しかして少数資本家の手によつて今日の物質文明が展開されてゐる。

アダム・スミスの根本学説わ、近古の初頭に勃興した「為すに任せよ、行くに任せよ」と標榜した自由主義の思潮に乗つて、フィジオクラットの労力基本説を展開せしめたものである。アダム・スミスわ労働を高揚して自然價値説さへ唱導したが、自由主義の思潮から経済社会を見渡すとき、市場價額が需用供給の原理によつて支配されるを発見した。彼わ需用供給によつて價額を決定しながらも、其基底に労働の要素があつて補正し、労働が價額の基底を為しながらも、現実わ需用供給が市場價格を決定するも、孤疑唆巡する所に、正統派経済学の古典「国富論」が著述されたのである。

正統派の学説によれば、労働わ神聖である。嘗て労働わ賤しまれ、富貴わ奴隷の上に生じたが、ケネー以来労働わ神聖となつたのである。しかしケネーが神聖とした労働わ農業に限られてゐたが、スミスわ一切の労働を神聖とし、商人わ勿論、企業者の労力まで最も神聖な労力となつた。にも拘わらず、実際を規則立てるものわ、取引自由に出発する貨物の需用供給であ

つた為め、労働わ神聖價値を持ちながらも、所得わ資本家の懐へと流れて行つた。正統派の学者曰わく、工場と機械を整へ多数の労働者を集めて分業による大工場を経営する者わ、有能な企業者である。企業者わ工場と機械の設備や原料購入等の為め資本を借入れるから、資本家へ利子を支拂わねばならぬ。土地を借入れるから地主へ地代を支拂わねばならぬ。労働者へわ労銀を支拂わねばならぬ。しかるに市場でわ需要供給の原則を見計らい、生産物を成るべく高價に賣るから、利子や地代や労銀を支拂ふても尚ほ多額の利潤を得るのである。又を利子わ金融市場が需要供給に原いて決定し、地代わ需要増加による穀物の騰貴につれて確実に高くなり、労銀も労力の需要供給に依るけれども、無智な労働者わ生活に餘裕が出来ると、忽ち生殖を旺盛にするから、労銀ばかりわ労働者の最低生活費によつて決定される。労働者わ永久の無産者であるけれども、しかし資本家も地主も企業者も、悪意あつて貪るのでなく、需要供給の経済原理が決めて呉れる利子と地代と利潤とを正当に収得するだけである。地主も資本家と云へよう、企業者も資本家と同列であろう。資本家と並ぶことの出来ない貧弱な企業者わ、企業が大規模となるに従ふて自由競争に破れ、資本家の企業者のみが、他の資本家の支持を受けて益々優勝するであろう。結局資本家のみの富を増大し世界の文化を指導する。斯く考へて資本経済を支持する学説が正統派経済学と称せられてゐる

四　組織経済時代

正統派の経済学わ正当であろうか。えが学問的に正当であれば、多数無産者わ、自然の法則として不利益を甘受しなければならぬ。正統派の経済学説わ科学者の云ふ自然法則であろうか。正統派の経済学者自身わ、需要供給の理論を自然法則とも思ふてゐよう。しかし需要供給の理論わ自然から生れたものでなく「為すに任せよ。行くに任せよ」の自由主義から生れた人為のものであるまいか。為すに行くにわ、自然でなく人為である。であるから需要供給の理論わ一個の主義であり、自然の法則でない。

社会経済わ暴力掠奪から平和掠奪へと進化した。強奪から詐欺、詐欺から搾取へと進歩した。進歩の根元わ人類の正義心と人類愛の理想である。この理想わ油の如く一挙に水面に浮び上ることが出来ない。強奪者から解放されたとき、新しい詐欺漢に出遇ひ、詐欺漢と絶縁したとき、新しい搾取者と文明の車に同乗してゐた。搾取を覚つたとき、正義心と人類愛が理想の光明を頻りに示指するけれども、車が止らない中に飛び降りわできない。

「史は繰返へされないで進化する。社会経済わ遅くわあるが、正義と愛の努力によつて絶えず理想に向い動いてゐる。何者がえを誤解し、人類に努力なく、正義なく、平等愛もなく、理想と目的もないといふのか。唯物的に史観を説く者わ、こうした錯誤に墜ちてわならぬ。

マルクス自身にとつてわ、唯物史観わ重要な主張の骨子をなしてをらぬ。厳重に批評すると、唯物史観わ却つて彼の階級闘争説に矛盾さへもする点がないでわない。階級闘争わ意識的人類の努力であるのに、唯物史観わ社

会の自然的進化を意味してゐる。マルクスわ恐らく無産階級の團結を激励する意味に於て、唯物史観から見ると今や資本経済わ行詰つてゐて、既に社会革命の時期わ来たと、階級闘争の努力に努を付ける為め、大家を激励するに用いたのが、彼の唯物史観であろう。

正統派の経済学説に反対するマルクス等の社会主義わ、無産階級の権力的組織によつて、社会経済の新生活方式を立てようとする。とのマルク等の主張に拘わらず、各国の無産者わ自治的組織を作つて、自分等の手に新しい生活方式を持とうとしてゐる。資本経済に次いで起りつゝあるものを、組織経済と総称することが出来るのである。

資本経済わ無組織である。群雄割據する資本家の戦国時代に比すべきものである。であるから為すに任せよ。行くに任せよと、自由競争を基本とし、價格の如きも定まる標準がなく、需要と供給のまに〳〵騰落し、人類の生活にわ何等の安定がない。組織経済わ、此不安な資本経済へ生活の安定を与へ、一定不動の標準の下に、経済学理と実際を立てようとする共通の目的を有してゐる。マルクス等わ権力的中央集権の組織を説き、各国に於て無産者等が徐々に行ひ来つた所わ、自治的の組合組織であつた。

(1) 中央集権的経済組織

資本経済わ資本家を中心として労働者并に勤労者を結合し統制ある経済の大組織をなしてゐるかに見えるが、労働者等わ搾取されてゐることを発見して以来、資本と労働者等との結合関係わ破ぶれ、資本階級と無産階級の二派に分れて激しく争闘してゐる。であるから少くも今日に於いて資本

経済わ、経済生活を組織する事実と理論を失ふた。之に代わるものとして提案さ礼をものが、マルクス等の社会主義、即ち社会を一團として中央集権的に結合せしめ、其権力によつて経済を行うとする主張である。

マルクスわ理論的にわ資本論によつて正統派経済学の誤謬を指摘し、現実に行われてゐる資本経済が少数資本家によつて多数無産者を搾取する仕計であるを暴露し、方法的にわ共産党宣言によつて、労働者の團結を勧告し、階級争闘による無産階級の政治的権力支配を力説し、其政治上の支配力を利用して、資本階級から資本を取上げて、國家の手へ生産設備の全部を集中することを主張した。現実に之を行ふたのわ露西亜であつて、レーニン等わプロレタリアートの支配を高唱し、強力な共産党の集権的支配の下に、ソビエートの政治組織を確立し、工場も鉱山も土地も資本階級から没収し、働かざる者わ食ふべからずと掲げて凡ての者に労働を強制し、工場や鉱山等わ国営とし、工地わ耕作する農民へ分配し又農産物わ國家機関に集めて、之を工場労働者等の需要に割当て与へんとしたも、もちろん個人の商工業わ禁止されたものである。

革命の直後レニン等が実行した処わ、確実にマルクス政策の実施であり何の妨害もなくプロレタリアートの支配による中央集権社会の権力的経済組織を立てんとしたのである。しかし其わ民衆の気分と傾向に反し、苛酷な刑罰の強制によつても好成績を挙げることができなかつた。何故かといふに、主に農民わ耕作に怠慢勝となつたからである。

農民わ自ら食ふ以上に、貴族や地主の奢侈費と貢ぐ為め、又都会住民

が生活するに必要な食糧其他の物を生産してゐるも、彼等わ其の為に過重な労働に服さねばならぬかつも、其わ耕作するに最も不便な土地が多分に、其わ耕作するに適する土地が多分に放棄されるだけの工地が含まれてゐるにも拘わらず、農夫わ無理して餓死過重な労働を強制し得るであろう筈わない。けれども広い畑に散在する労働も強制し得るであろう筈わない。けれども広い畑に散在するであろう。農夫の心理わ、やれ〳〵と安堵し、自ら喰ふ程度にしか農作せの超過に伏ふて労働を強制し又わ監視することわ不可能である。多くの種子を蒔いても草取や耕作を怠れば穀物わ実らない。其結果わ革命后の露西亜に於ける農産物の大不収となつた

露西亜の穀産統計（単位百万プード）

千九百九年	
千九百十三年	平均 四、六〇一
千九百十四年	四、五六九
千九百十五年	五、〇五七
千九百十六年	四、一三七
千九百十七年	三、九八七
千九百十八年	三、四三四
千九百十九年	三、五二四
千九百二十年	二、七九四
千九百二十一年	一、九六九
千九百二十二年	三、二五七

千九百二十三年　三、一七〇
千九百二十四年　二、七六四

欧洲大戦前半に大戦中わ、年産五十億万プードに近い穀産があつたが、革命の翌年から三十数億万到度となり、千九十九年五月十六日農業人民委員会が土地利用を当然農民の自由選択として以来、千九百二十年にわ二十七億万プードに激減した。同年遂に新経済政策を樹てたが、農業組織が共働組合の基礎の上に実際に改善されたのわ、千九百二十五年前后である。全年の穀産わ都市と農村の需要を充たし、千九百二十六年以后、殆んど戦争前の産額に回復し、多量の穀物を外国へ輸出することにもなり、えが為め世界の麦相場を崩落さし、米国の農民わ恐慌を来したのである。

権力による組織経済わ、都会労働者に大なる不満を与へなかつたとしても、農民の性格にわ適合しない。都会でさへも藁混りのパンなどを配給されてゐてわ、永く強制組織が認識される筈がない。各人の欲望わ均一でないから、強制わ必要の最低限度とし、及ぶだけ多くの自由を認めなければ人類の性格わ決して満足しないのである。共産主義わ経済の為に人類の性格を無視して見たが、人類の性格わ共産主義から無視されるにわ余りに頑固であつた。人類の性格わ遂に勝つて、ロシアわ表面に共産主義を誓ふてゐるが、内実わ共働組合を根幹とする新経済政策に逆転することを余儀なくされた。共働組合を基本とする新経済政策わ、即ち他の各国に発生して来た処の自治的組合の経済組織なのである。

(2) 自治組合的経済組織

自治組合組織の経済わ、人類の性格から自然に発生したものである。それわ自然の産出物であつて、まだ経済学からも、また哲学や倫理学、或わ社会学からさへも、理論を与へられてゐない。其を理論付けるものとして私わ規範経済学を提出する。規範経済学によつて、自治組合の経済組織わ初て理論づけられるであろう。

自治組合の経済組織わ、人類の性格に原く自然発生物である。古く歴史を詮議すれば、世界の各国に原始的な経済の自治組合を発見し得るであらう。けれども、其精神を意識して、しかも社会経済として人類的に主張し運動したものわ、英国ランカシャイヤ州ロチデール町の職工二十八人に始まる。彼等の自治経済組織をコ・オペレーションと称する、露西亜の新経済政策も虚飾を去れば、此のコ・オペレーションを実行したものである。之に比べると、ロバート・オーエンのニュー・ハーモニーなど、地主から解放された恩恵的農園に過ぎず、ロチデール以前にも、種々なコ・オペレーションわ有つたが、社会経済の人類的組織として主張されたのわ、自ら平等開拓者組合と称した、ロチデール二十八人の先駆者に始まるのである。

コ・オペレーション、即ち共働経済の主張を、ロバート・オーエンに開始されたと説くを普通とするが、オーエンわ未だ正当に共働経済を理解してゐなかつた。彼の主張わマルクスと同列の共産主義であつた。マルクスとオーエンとの差異わ、理論よりも方法にあつた。マルクスわ階級闘争を戦術とし、権力組織による共産経済を描いた。オーエンわ自由と共力を基礎と

する共産村を描いた。両者とも同じように利潤と剰余を罪悪として排斥し生産物わ労働に比例して均分されねばならぬを説いた。彼等に取り資本の蓄積わ罪悪であつた。オーエンわ貨幣さへも悪み、労働取引所を設け、労働一元の経済を理想とした。マルクスわ此の労働一元説を経済理論の根拠とし、極度にえを発展せしめたものが、彼の著書資本論なのである。

共働経済わ斯様な社会的共産主義とわ大差を持つ。ロチデール二十八人が最初の共働組合を組織したとき

『本組合の目的わ各人より一磅を醵出して次の計画を行ひ、十分な資本を蓄積して会員の財産上の改善を図り、其社会上と家庭に於ける地位を向上せんとする』と。

明瞭に宣言した。即ち彼等わ資本を認め、蓄積を認め、其効果をも認め十分に蓄積された資本によつて、社会上と家庭に於ける地位を向上するを目的とした。それ故にロチデール・パイオニアーズとオーエンやマルクス等との間にわ、本質的の相違があり、オーエンやマルクス等わ社会的共産主義者であつたが、ロチデール先駆者等わ彼等と相違する共働組合主義者であつたのである。露西亜の新経済政策も、そうした比較の上に観察するとき共産主義を裏切つてゐることが追々と判明するであらう。

ロチデールの共働経済わ、忽ち英国各地わ無論、白耳義、佛蘭西、独逸丁抹其他の世界各国へ伝搬した。佛蘭西でわ工業を共働組織によつて経営することを試み、丁抹でわ農産加工を共働組織に依つて行ふことに驚くべき成功を遂げた。飢饉と破産の露西亜を救ふたのも共働経済であつたので

ある。

共働経済わ理論を知らぬ前、人类の性格から生れた。共産理論と資本経済の圧迫の下に、共働経済わ世界の各地へ自然と発芽したのである。人类わ如何なる圧迫にも屈せず、其性格を維持し、そこに自身の喜びと満足を発見する適例を、我等わ共働経済の発生に付いて見るのである。共働経済の実例わ、生活方式篇に於て述べるであらう。茲にわ規範経済学が共働組織を理論づけ、且つ完全に其を人类の永久的生活方式として発展せしめることを提言するに止める。顧みれば正統派の経済学と云わず、マルクスの資本論等でさへも、過去一切の経済学わ誤謬であつたのである。

第三章　規範経済学研究法

科学わ自然現象の法則を発見するものであるから、まづ自然現象を観察して、之を事物に区分し、それ〴〵の概念を組立てることから始めねばならぬ。自然現象を観察し、其を事物に区分して、種々な事物の概念が組立てられると、次にわ事物を類別して、雑然と存在する概念の間に系統を立て最后に事物相互の間の関係を調査して、自然現象の法則が発見される。規範経済学も、一個の科学であるから、こうした一般科学の研究法に従わねばならぬ。それと同時に規範科学としての特殊な研究法に依つて、規範経済学わ自己の任務を果さなければならぬ。

学問の研究に志す者わ、まづ如何なる方法により、其の学問の研究を進め、又たえを完成せねばならぬかを十分に意識してゐないと、学問が自己の気分や独断に支配され、理学を研究してゐるに拘らず、何時の間にか過去に於て哲学者の犯したやうな独断的観念論に墜るものである。学問の研究者わ、自己の研究する学問の地位を確認すると共に、其研究方法をも明瞭に意識して置かねばならぬ。但し研究法と講述の体裁とわ別問題である学問の講述わ一般読者に了解せしめるが目的であるから、研究法の順序其儘を踏襲することわ出来ない。研究された結果を、了解し易く講述する便宜な方法を採用しなければならぬ。しかし読者わ学問の研究を志す以上、其学問わ如何なる研究法に依るものであるかを了解してゐて、講述されたる著書を批判しながら学説を正当に受け入れなければならぬ。本書の講述わ

強ち此に掲げる研究方法に従わねけれども、本書の内容わ此研究方法によつて厳正に考慮せられた結果であり、読者にも厳正な批判をなしつゝ、本書の内容を受取られることを希望する。哲人レッシングが云ふた如く「人間として價値あらしめるものわ、人間の所有する真理でなく、真理の根抵に達せんが為に、人間が拂ふた真面目な努力である。人間の力わ真理の所有に依つてゞなく、真理の追求によつて拡大される。真理の追求に於ての及人間の完成わ増大するが、所有わ却つて台人を平静、怠惰、傲慢ならしめる。」智識と学問わ著書によつて其儘各人の所有に移さうとせず、著書を通して各人が批判の努力を加へ厳正に追求して各人自身のものとしなければならない。

第一、規範経済学わ物質生活に関係ある人類の性質を調査せねばならぬ。経済わ人類の生活方式であつて、普通の自然現象とわ相違する特質を備へてゐる。其特質わ人類の性質、畧して人間性と名け得るものに出発する。経済わ人間性の所産であつて、決して単純な普通の自然現象と同視さるべきものでわない。しかし経済に関係ある人間性わ、人類の有つ性質の全部でなく、特別に物質生活方面に現われる人間性なのである。であるから規範経済学の研究わ、まづ第一に物質生活に関する此の人間性の調査から始めねばならぬ。然るに過去の経済学者わ、単に欲望を捉へ来つて、其内質さへも調査せず、人間にわ欲望があるといふだけの假定に出発して、欲望を満足するに必要な價値、又わ貨物の生産関係を説明することを急いだ。其結果わ営利を人類普通の根本的欲望と誤認するなどの結果ともなつたので

ある

経済学が無目的の自然理学であれば、こうした軽卒も勘弁されるであろう。けれども経済学わ人類社会の物質生活を規範する最良方式の研究を目的としてゐるから、まづ物質生活の根抵となる人向性を確認してからでなければ 最良の生活方式を定めるにも、えを定める標準が出て来ないのである のみならず、経済学の対象わ、人類の物質生活現象であるが、物質生活現象わ単に物質関係から成立せず、えに人向性が参加して発生するものであるから、経済現象の内容を確認するにも、まづ人向性の調査が必要である 人向性わ不可分の一体であらう。えを確定することわ、科学を超越した大向題である。従て経済学の冒頭に於て其を決定することわ出来ない。けれども、また人向性わ多数の表面を持つてゐる。実質わ唯一不可分でも、其人向性わ対象に応じ種々な性質となつて表面に現われる。我等が人向性を指すのでわなく、それが物質生活と云ふ対象に於いて現われる幾個かの表面的に明白な性質を指すのである。例へば伝統的に経済学者が注意する欲望の如きわ顕著な人向性の一例なのである

物にわ本質があるであろうか。えにわ大きな疑向が挿入さ れ得る。本質としての人向性を確定することも、実に重大な難向大であるが、人向の本質を如何に見るに拘わらず、対象に応じて人向から発表される性質わ明白に確認することが出来る。 信も物それ自身を決定することわ出来ないのに、各種の理学が存立すると同じである。

物の性質とわ、物と物と水関係しあふて、其向に発表される不変の傾向である。例へば水わ人体に感覚されて冷い性質を現わし、木片と関係して浮力を現わす如く、さいこしや本片を浴ばすことなど、水の性質である。こうした水の性質の調査にわ、水の本質乃至わ化学的終局の組織が判明せずとも、調査に差支がないのである。人向性の研究も同様であつて、人向それ自体の実質わ急に確定し難い重大向題であるけれども、此重大向題と わ独立に、人向わ他の人向との向に愛憎等の感情を現わし、人向宇宙の自然に対し美の感覚を現わし、其他人向にわ宇宙の変化に付いて理論を発見しようとする気分があり、又た自己の感想を言語或わ藝術を以て表現しようとする希望を抱いてゐることわ明白である。此等の人向性わ対象に応じ必ず人向が発表する性質であり、一層適切にえを命名すれば、人向の傾向とも云ふべきものであつて、其調査確定にわ、人向自身の本質を知るを待たないのである。寧ろ人向自身の本質わ以上の性質即ち傾向を持つと説明さるべきである。しかして経済学に関係ある人向性わ、物質生活に現われる人類の性質即ち傾向に外ならない。えを研究し決定するわ、決して他の学向の任務でなく、経済学自身の任務である しかし過去の経済学者わ、此任務を知らずにゐた。もちろん他の学向も、物質生活に関係する人向性わ研究して呉れず、学向全体の系統に於ける大脱漏もなしてゐたのである。規範経済学わ、物質生活に関する此人向性の調査より開始されねばならぬ。

第二、規範経済学わ人類の物質生活に関係ある自然の性質を調査せね

ばならぬ。

自然界にわ物それ自身としての種々な性質がある。物と物との間に存在する性質の調査わ、それぐの自然理学を成立せしめる。が、物にわ自然理学の研究問題となる物相互間の性質以外に人類の物質生活に関係して現われる性質がある。えを調査し研究するわ経済学の任務なのである。しかし過去の経済学わ、此任務をも脱漏してゐた

過去の経済学者わ生産要素の一として、土地を主とする自然を記述する。この頃自然力にも注意し初めたが、彼等わ自然に対し当然に与へねばならぬ地位を与へずに、人間の側へ其全部を奪ふてゐる。

経済学者わ脱漏と云わねばならぬほど、自然を看破してゐる。しかし経済学が人類の物質生活を対象とするからわ、物質生活を構成する二大要素わ、人間性と自然性であることわ明白であるから、人間性の研究と共に、自然をも十分に調査しなければならぬ。

自然性わ物理化学其他の理学が確定して呉れる。が、其等の理学わ夫々に特殊な任務を持つてゐて物と物との間に於ける自然法則を発見することが彼等の使命である。其等の理学に取つてわ、物が人類の生活に関係することなど顧慮する必要がない。経済学のみが、人類の生活に関係することに於て現われる自然性を調査せねばならぬ。もし経済学がえを調査しなければ、そうした自然性わ学問の全区域から脱漏されることになるのである。

経済学が人類の生活に関係する自然性の研究を脱漏するとき、物に対して与へられねばならぬ当然の地位が、無視され或わ顛倒するであろうことわ必然の結果である。物に対し与へねばならぬ地位が与へられぬとき、物に対し与へねばならぬ分まで、物以外のものに与へられることになり、経済学わ誤謬となることを免かれぬ。経済学を正当に構成し又た研究するにわ、是非共人類生活に関係する自然界の諸性質を調査せねばならぬのである。

第三、規範経済学わ人間性と自然性との相互作用によつて生ずる生活現象の事実を調査せねばならぬ。

経済学が対象として観察する所わ、人類の物質生活現象である。従来の経済学わ主として此の物質生活現象を観察し、其間に於ける理論を発見せんとした。経済学が自然科学であれば、こうした態度わ当然であり、又たこの種の観察と研究だけで、経済学の任務わ盡きるであろう。けれども経済学が人類の物質生活に於ける最良の規範方式を発見することを任務とするとき、別の断定が下されねばならぬ。規範経済学も物質生活現象を調査するが、其を自然法則として観察するのでわなく、人間性と自然性との相互作用から営為し出される人類の生活現象として観察する。従て確定的に見ず変化的に見る。静的に見ず動的に見る。不易の自然法則とせず、発達して行く所の現象として観察せねばならぬ。

従来の経済学わ物質生活現象を静的に観察して、其間に於ける自然法則を発見することを任務とした。彼等にとり重要なものわ、発達過程に於ける経済現象の事実でわなく、経済現象の事実を出没せしめる背后の理論であつた。規範経済学も、経済現象の静的法則を調査するが、其の前に動的経

過の経済現象その物を観察せねばならぬ。こうした観察に於いて、二種の新しい生活方則が発見される。一つは人向性と自然性との相互作用より生ずる法則、其中には静的な自然法則も含まれてゐる、他は物資生活の規範方式を展開せしめる法則である。

第四　規範経済学は生活現象の事実の向に存在する理法を発見せねばならぬ。

経済学に取り最も重要な理論は償額と剰余である。在来の経済学が現実に拘泥して動揺する儘に償額を観察するとき、需要供給の法則が飛び出しも、之を排斥せんとするとき労働一元の償値哲学が描出された。不幸にして在来の経済学者は、経済現象を観察したが、経済現象が人向性と自然性との相互作用から出現することを悟らなかつた。之が為め欲望なども、殆んど人向に無関係な取扱を受け、しかも経済学最初の数頁に紹介されるに過ぎず、経済学の内容と同化されてゐない。労働のみは終始一貫して経済学の要素を為すが、けれども労働も人向から切離され抽象せられ、唯時向によつてのみ計算される為目的の商品と同視されてゐる。彼等は云ふであろう、経済学は営利を人類の基礎動念として取扱ひ、経済学の全理論を通じ、瞬間も営利の人向性を忘れないと。けれども営利を極端に排斥する経済学がある。人向性を忘れないで、漠然と営利などの観念に立籠るからこうした疑問の種を蒔いたのである。経済学は人類の物質生活現象を研究するものでありながらも、人向を知らず、人向と無関係に説かれたものが在来の経済学なのである。

在来の経済学は出発の一頁から大きな錯誤に陥てゐる経済学は人類の物質生活に関する方式を研究するものであるから、まづ純真に人向性を観察せねばならぬ。でないと人向ばなれの机上の空論となり、又た却て人生途上の有害物ともなるのである。

償格に次いで最も重大な題目は剰余であるが、在来の経済学は其意味さへ知らない。現範経済学の静的理論方面に於ける最も大きな功績は償格に関する理論を不変の基礎に立てたことをふとも、剰余に関する理論を提出したことである。

理論は標準の法則でなければならぬ。しかるに現実の経済現象は標準に従わぬ例外であることが多い。例外を理論と誤認してはならぬ。例外を理論とし、例外も亦た現実のみを観察する経済学は、例外を理論とし、例外も亦た現実の経済現象は標準に従わぬ例外であることが多い。しかるに現実の経済現象は標準に従わぬ例外であることが多い。しかるに現実の経済現象は標準に従わぬ例外であることが多い。

其上に了ダム・スミス等は、自然償値の理論といふ理論を発見した。同一現象に抵触する二重理論があるなど、学向の奇観である。

自然は絶対に一律である。例外は物質の騰落は人向の側に存在する。需要供給による例外を理論とし、例外も亦た現実のみを観察する経済学は、人向にのみ存在する例外を理論としたスミス等正統派経済学者は、人向性と自然性の相互関係から経済生活が出現することを悟らなかつた根本の誤解に出発して、彼等の経済学が描写されたのである。償格に於いて例外から理論を構成せず、経済現象の一律関係から真に普遍的なものを理論として追求するとき、当然に純剰余の法則が結果する

マルクス等一元哲学者わ労働を固定せしめて、之を無目的な時間的計算の対象とした。そして労働以外の自然から一切の價値を剥奪した。彼等の学説わ余りに乱暴である。最極端な独断哲学の標本として珍蔵するに適するほど乱暴な学説から、彼等の経済学わ成つてゐる。此誤謬の根本も、人間性と自然性とを純真に観察しなかつたことに原因する

規範経済学わ人間性と自然性とを正直に観察し、更に其相互作用になる物質生活現象を出現せしめる事実を確認して、其間に存在する静的標準の自然法則と、又た人為に依つて変異し出される動的例外の理法とを併せ研究せんとする。自然わ一律であるが、人為わ例外を作出する。一律の自然的標準理論と、之を変異せしめる人為的例外とを区別して調査する所に、やがて規範経済学わ成立するのである

第五、規範経済学わ人類の物質生活に関する生活方式を調査せねばならぬ。

理論わ関係であつて、事物それ自身でわない、現象とわ事物それ自身の出没し、或わ変化する事実である。事物が出没し或わ変化するにわ、一定の条件があるので、此条件を理論といふのである。

理論わ目的とならぬ。目的わ出没し変化する所の事実に存在する。学問わ往々理論を目的とするかに誤解されるが、学問わ事実を目的とするものである。しかし事実を正当に理解し、之を人生の必要に応じて出没し変化せしめるにわ、其条件を知らねばならぬので、学問わ事実を知る根拠として理論を調査するが、理論を学問の目的として誤認してわならぬ、従来の

学者わ往々そうした誤解を持つ為に、学問わ人間ばなれすると同時に、事実ばなれもして、学者わ空理空論を知つて肝腎の事実を知らないことが余りに多すぎた。学者わ何人よりも多く事実を知らねばならぬと同時に、学問の目的わ事実に存在するを忘れてわならぬ。事実わ理論を実現するものでなく、事実が出現する因果関係其他の条件が理論なのである。よく判別しないと、事実わ理論の実現を目的とするなどと、誤解を生ずるであろう。

規範経済学わ人類の物質生活に関する現実な最良の生活方式を研究せんとする。生活方式わ事実であつて理論でわない。もちろん最良の生活方式わ、例外を持たず一律の経済理論を実際に現わすものでなければならぬ。であるから生活方式の事実わ、経済理論を基礎的出現の条件とわするがしかし規範経済学の目的わ、最良な生活方式の事実を発見することである。

價額の理論が安定し、純剰余の根本原理が発見されても、規範経済学わ未だ何等の喜びに接せぬ。規範経済学わ此等の根本理論を条件として、最良の生活方式を発見したとき、始めて任務を果して、人類と喜びを共にするであらう。最格に云へば生活方式わ手段であり真の目的わ人生に喜びの幸福を与へることであり、其に必要な最良の生活方式わ、経済理論を條件として考案し出されるものなのである。

最良な生活方式わ事実以外の観念世界から天降るものでない。最良な生活方式わ種々な生活方式の中から選択せられ、種々な生活方式わ事実の世界に存在してゐる。各種の生活方式わ必要から生れる。けれども事実の世界にわ、厂史と伝統に基く種々な生活方式が互に争ふてゐる。規範経済学

わ。此等各種の生活方式を、まづ発見し調査せねばならぬ。

一人の観念作用わ、大衆の厖大的歴史的努力に比べると、微弱なものである。

5長い過去より現在に亘り、生死する幾百億の人類わ、必要から種々な生活方式を考案し、また実行したことである。我等わ決して四人の考案を否定せぬ。一人の観念作用から、往々にして重大な結果が生じたことも知つてゐる。だけれども大衆生活の事実を、無視しての観念論にわ賛成が出来ない。唯物史観と称するわ、大衆的努力の結果を、大衆の生活事実を調査し、其を補ふに観念作用を雑へて、現実な生活方式とし、可能な生活方式を普く研究する所に、規範経済学の最后の任務が果さるるであらう。

第六、規範経済学わ人類の物質生活に仕き、規範の生活方式を決定せねばならぬ。

規範経済学わ最后の任務に向ふて歩みを進める。現実な又可能な幾多の生活方式が調査されたとき、孰れが人類の物質生活に最も適当するものとして採用さるるかを決定せねばならぬ。其決定が一人の為であれば、他人の嗜好し感情によつて取捨し、別に理窟もいらぬであらう。性急な者わ往々理窟を云ふなと云ふが、大衆の為め人類の為め、一致して如何なる生活方式を採用するかの調査に於て、嗜好と感情からの主観的な主張でわ、他人を承服さすことが出来ない。過去専制時代にわ、理窟を云ふなと頭から押へ付けて、一人の権力者が自分の嗜好と感情によつて社会の生活を決定し得たであらうが、左く知識を世界に求めて万機を公論に決せんとする文

化の今日でわ、大衆が討究して篤と選択をしなければならぬ。

大衆の討究わ取捨選択の標準を論議し合ふ外に方法わない。好むとか好まぬとかの感情論わ、事制者の武断的主張であつて、正義の公論でない。生活方式が多様に存在するとき、各人の都合を離れて、理論の上に取捨選択の標準を発見するわ、人類的に必要なことである。経済生活わ各人別個にでなく、人類の一団となつて社会的に共通してゐる。であるから人類全体が最良とするものでなければ、努力して之を現実な生活方式とする訳にゆかぬ。人類全体が最良とするもの、それ即ち規範なのである。従つて規範経済学の主要な任務わ、人類の立場から生活方式を選択する標準を立てることである。

次ぎに、規範経済学わ物質生活の規範方式を展開せしめて人類の社会生活を幸福にする法則を調査せねばならぬ。

規範経済学最后の任務わ、最良の生活方式を決定することである。今日の経済学わ、そうした意識を持たないで、実わ生活方式の是非を論じてゐる。従て其議論わ不徹底である。時としてわ最良の生活方式を論することもユトピアとして非難して排斥することさへある。

最良の生活方式わ確実な規範理論からでなく、過去に於てわ独断的に提案されたり、オーエンの共産村や労働取引所の如き、実行わされて見たが失敗に終わつたり、フーリエーのファランステールも試行されたが又た失敗したり、アナキストわ理想境を描いて在界の処々で行つて見たが、一も成功しなかつた。此等の提案わ独断的であり、又た空想的であつた。理論的な経済

学者からユトピアとして排斥されたも理由があるのである。
理想的生活方式をユトピアとして排斥した結果わ、無理想に只だ現実を破壊せよといふ主張さへ生じた。佛蘭西のサンヂカリストわ其である。彼等わナポレオンさへ策戦した通りに戦を導くことわ出来なかつた。ナポレオンが最も苦心して策戦を凝らし、十分な準備をして戦を挑んだがボロヂノの戦が豫期した成功を収めなかつたことを指摘し、経済上の争闘に於ても、結果を予定して戦ひ、其通り結果を挙げ得るものでないから、只だ悪い現実を破壊するだけを目標とすればよい。悪い現実さへ破壊すれば、其后に必ず何物かゞ生れる。其わ現実より吃度善いものである。よし破壊の后に生れ出る現実を描写しても、ナポレオンさへ描写通りに戦ひ得ないから、徒労に終るに過ぎないと、サンヂカリストわ教へる。
勇敢に戦へ。無産者わ團結して勇敢に階級戦争をなし、先づ政治権力を獲得しろと主張したマルクス一派わ、オーエンやフーリエー等の描写をユトピアと嘲笑しながら、自己わ、可なり細く来ねばならぬ社会を描出した。

一、土地所有権の廃止及び地代を挙げて公共目的に供すること。
二、強度の累進税。
三、相続権の全廃
四、総ての移住民及び叛徒の財産の没収
五、国家の資本による絶対的独占の国立銀行を設け、信用を国家の手に集中すること
六、国家の手に交通機関を集中すること

七、国有の工場及び生産機関を拡張し、又も一般的の計画に従ふて荒地の開墾及び地味の改良をなすこと
八、総ての人々に対する労働の平等責任、産業特に農業に関する労働軍の建設。
九、農業及び工業の経営連絡、人口配分を成るべく国内に平均せしめ、都会及び村落の区別を次第に無くすること。
十、総ての児童を公共学校にて自由に教養すること。現在の如き状態に於ける児童の工場労働を廃止すること。教育と産業的生産との関係を密にすること。等、等。

マルクスわ以上の生活方式を進歩した国々に於て政治的支配を獲得した無産者の取るべき方策として共産党宣言に掲げたが、内容わ明に生活方式の一理想である。
サンヂカリストわ破壊せよといふが、彼等とても破壊わ建設の為であることを知つてゐる。只だ新しく建設される所のものを図案に用意しても徒労であらうといふのが、彼等の意見である。
生活方式に関する規範の理論が判然しなかつた今迄わ、サンヂカリストの考へ方に理由があつた。しかし規範が経済学によつて確実に立てられたとき、なほ建設の図案を無用と云ふであらうが、ナポレオンわボロヂノの戦に成功しなかつたが、でわ策戦と戦術わ無用であらうが、否、否、人を殺す戦に於て、よし往々策戦通りに戦を指導することができぬとしても緻密な戦闘図案と周到の用意とわ常に必要である。世界人类幸福の為に建設

し獲得されねばならぬ物質生活の最良方式を、綿密な図案の上に現わす努力を続けるであろう。

建設の為でない破壊わ罪悪であるも所持せねばならぬ。しかし其が簡単な堀立小屋であるとき、設計図の必要わないであろう。物質生活の理想方式を持たず。現実を破壊するわ、丈明を焼いて野蛮の堀立小屋とするに等しい。文明が破壊されたとき、再び建設されるまでにわ、長い時間と努力を必要とする。出来ればこの破壊せず過去を材料として、より幸福な未来へと進化したい。其にわ人を殺す戦争の準備にもまして、綿密な科学的設計と図案を必要とする。

オーエンやフーリエーや、又たマルクスまで、生活方式の理想を設計したも、多数人が一致して進むにわ、同一の計画が確定してあなければならぬ。計画が確定せぬとき一致わ不可能である。甲論乙駁してあれば、仲間喧嘩わあつても、外部へ進出することが出来ない。計画を確定するにわ、其が人間性に適合し、最良の生活方式でなければならぬ。

最良の生活方式わ唯一でなく多数に提案される向わ、まだ最良のものが確定してをらぬ。唯一である。其時わ先ず最良の生活方式を確定するエ夫からしなければならぬ。幾多の生活方式の中に最良のものを選択するにわ標準も要する。標準が決定されたとき、生活の最良方式わ大きな争論なしに選択されるであらう。最良の生活方式が決定されたとき、程度に其を展開せしめねばならぬ。其展開にわ又た法則があるのである。此等を研究するのが、規範経済学である。

規範経済学を知らない間わ、生活の理想方式がユトピアとして排作もされよう。排作されないまでも、恍惚的な観念や想像に落ち易いから、実行して見ても失敗するわ当然である。彼等の独断な主張わ、生活方式として受入れるほど整頓せず、単なる一種の政策と見なければならぬほどに乱雑な箇条書に過ぎなかつた。しかし人類未来の幸福の根本となる生活方式わ、斯様に粗末に取扱わるべきものでない。我等わ判然と其を調査研究して確定し、現規範科学の上から学向の結論として、人向性と自然性との相互関係のうえに永久不変の確定断案に到着しなければならぬ。しかし経済学が自然科学であるもすれば、そうした要求も経済学に望むことわ出来ない。本に縁て奥をきめる徒労である。

自然科学わ事物の現実な理論を解説し得るに止まり、決して其以上の能力を持たない。経済学が規範科学であるとき、始めて学向的に物質生活の最良方式がユトピアでなく確定され、物質生活の幸福内容を豊にし、且つ之を確実にする理論も方法をも調査しなければならぬ。規範経済学の任務わ実に重大なのである。

規範経済学の任務わ以上七種の研究を以て終了する。尚ほ残された、ことわ、現実の生活方式から規範の生活方式へ到着する順序方法の向題である。之わ規範科学もいふよりも、過渡的経済政策に属するものである。或る程度まで本書わ之に触れるであらう。

規範経済学が調査しなければならぬ諸実わ、事実に関する宇宙已分や、宇宙全分相互間の関係に就いてわ、一般の自然科学も同様に観察を主とし、一般の自然科学も同様に観察を主とし、て類推期待する判断を正確にし、又分析し綜合する知識の一般的方法に、るべきもので、規範方式の決定や其展開に就いてわ、人間性の普遍的傾向を理想と認定して選択の標準を定め、此理想に適応する状態と条件を推想して、工夫し追求せねばならぬ、それに関しヘーゲルの弁証法わ、否定と肯定の反目を持つと考へるものもあらうが、ヘーゲルの弁証法わ、対を綜合する所に、新しい知識が獲得されると主張する。知識の発生、むしろ自然界の構成に関する提案であり事実を観察して、自然科学的に現象を調査し又自然現象から人為の理想に適合する規範を発見しようとする純真な研究にわ、無関係のものである。ヘーゲルの弁証法わ、知識并に宇宙の構成に関する大膽な独断的仮定であり、しかも其仮定わ少しも証明されてをらず又た其に依つて発見された知識もないことであるから、規範経済学にとり全く無用のものである。

最后に注意せねばならぬわ、規範経済学の論ずる所を、倫理学又わ社会学の問題でないかも疑ふ人のあらうことである。倫理学わ人間行為の善悪を論ずるし、物質生活方式わ人間行為の善悪も深い関係を持つてゐる。けれども、過去に於て倫理学者の論じたこともわ、物質生活よりも、人間相互の精神的関係、又わ個人の品性や良心の善良な方式問題わ倫理学者から論ぜられずにゐる、倫理学者がそを論じないのわ、経済学の範囲であるからであらう、倫理学者ぶ同時に経済学者

でない限り、此問題を解決することわ不可能である、しかし過去に於てわ経済学者も此問題を経済科学の範囲外と見たであらう、よし範囲外としせぬ迄もそを速歩に論ずる学問的順序を見出さなかつたのである、なぜならば経済学者わ自然科学者にと自己の地位を決めてゐたからである。

社会学者も本た同様にたへてゐる、社会学わ自然科学であり、又発生的史学でもあるとたへてゐる、しかも社会学わ、物質生活以外に存在する社会の諸関係、例へば性的関係に出発する家とか、政治的関係に出発する国家其他の公共団体等の組織を主眼とし、それに風俗や習慣等の民家的出来事を織り込んで、社会と云ふものの結合関係や、社会意志などの題目を設け、物質生活のことわ、従属する程度しか取扱わない、であるから、彼等の領域と思ふてゐる社会現象に干与する責任を期待することわ出来ない、大膽に云へば、精神的にわ人間学、物質的にわ規範経済学があり、学問の系統が完全に分科するとき、倫理学と社会学とわ、発生史及生わ発生学的厂史科学としての存在を持つに止まらう、物質生活の規範わ経済学のみが決定せねばならぬ独自の責任である。

第四章　物質生活に関係する人間性

万物わ統一された範囲内に於て、一個の存在として意識される。統一が破れる処にわ、一個の存在としての宇宙区分わ、我等に意識されないのである。人間が一個の存在として意識されるのも、全一体として統一されてゐるからである。

万物にわ雑多な性質がある。けれども其雑多わ、統一した一個の存在物の属性であり、変化する間にも、一律の自然関係が発見されるのである。もし雑多が一個の存在物に統一されず、属性の変化が乱雑であれば、知識わ存立し得ないのである。であるから属性といひ、性質といふわ一個の存在として統一して意識される宇宙区分相互間に発見される。一律変化の自然関係以外でわないのである。

人間わ全一体の生物であり、分割すれば其瞬間に人間わ消滅する。そして人間わ凡の宇宙区分との間に、何等かの関係を持つてゐる。其関係も亦を確定してをり、一律の自然変化を現わす、此に種々な人間の性質が吟味され、心理学其の他の人間に関する自然科学の知識が成立するのである。

宇宙わ森羅万象、雑然と観察すれば、もつれた糸の累積の如く、ほどくすべもなく抛棄されよう。だけれども困惑の心が静まつたとき、事物に分解し、相互関係が認識されて、整然と森羅万象を分類し、又これを綜合する知識が組織される。宇宙を写す人間性も多岐多様、漠然と内観すれば、糸のもつれの累積に向ふように、また困惑が待つであらう

困惑わ征服されねばならぬ。静に静に、内観するとき、人間性が多岐に見へるわ、写す宇宙が複雑な為でもあり、また人間の個性が人により相違する為でもあるを発見しよう。人間わ全一体の生物であるが、違つた個性の者が無数の宇宙区分に対立して、夫々と複雑な関係に置かれるから、多岐多様に人間性が見へるのである。個性の相違から人間性が多岐に見へるわやがて規範科学の必要を喚起する所以であり、倫理学上に意志の自由と必然が論争される要因ともなるのである。

物質生活に関する人間性を調査する前に、人間学の一般結論を簡略に掲げる必要がある。でないと人間性の実質を誤認する危険がある。学問わ分科されてゐるが、これわ講究の便宜からで、学問の目的わ宇宙と人性に関する全般の知識を獲得することにある。講究の都合から分科されるが、分科の為に部分を知つて全体を捉へ損へば、角を矯めて牛を殺す類の学問の自殺しならう、分科されたものわ、綜合されねばならぬ。特に人間わ全一体の生物であり、雑多な人間性わ、全一体の人間が、多様な宇宙区分に対立するにより現われるものであるから、人間性の一般的性質を吟味して置くことが必要である。

一　人間性

人間にわ性質がある。人間の性質を品性ともいふ、品性といへば共通性であることを離れて、各人別個のものと思われ易い。確に品性わ人により相違し、又共通してゐる。

人向わ互に類同する生物である以上、其性質も共通してゐるべきわ勿論である。恰も水にわ水の性質があり、土にわ土の性質がある如く、人向にも人向の性質がなければならぬ。水でも海水わ塩分を含み、谷川の水わ何かの鉱物質を含む。土にも色々な組織分があるであらう。けれども水とし土としての共通性質があることわ疑がない。だからこそ土とか水とかし、共通した名称が附与されるのである。人向としいふとき、人種や男女の区別に頓着せず、共通の人向性を指称する為の言葉である。人向性とわ人向といふ生物の共通した性質であり、性質としいふわ、其自身の有つ傾向しもいわれるものである。

論理学でわ言葉に内包と外延とを分つ。外延としいふわ、或る言葉の指示する個々物であり、其言葉の指示するだけの個々物に共通しての何等かの性質があらう。それを内包といふてゐる。従つて内包と外延わ反比例し、外延が多くなるにつれ内包わ少なくなる。なぜならば言葉がより広く個々物を統括するに従ふて各個の物に共通する性質わ少なくなるからである。人向としいふ言葉わ、統ての人種、男女、老幼、賢愚、一切の人を網羅するので共通性質としての人向の内包わ豊富でないのである。人向の内包わ即ち此にいふ人向性なのである。

共通性としいふても、畢竟わ個性の共通傾向であるから、共通の中にも多様が隠れてある。人向性わ普遍の共通性であると同時に、其末端わ常に多岐多様であり、特に意識の作用に基く人類活動の諸現象わ、規範科学の特別な対照となるものである。

人向学からの結論を挙げよう。結論であるから、理由わ述べない。詳しく知らうとする人わ、美教に関する諸論文を見られるであらう。

人向わ宇宙の波の中にある。宇宙の波からの運動に共動し、また自らも活動して、人向わ不断に宇宙と共鳴し振動もしてゐる。実験理学の報告によれば、宇宙の波わ千波万波どころの形容詞でわ盡されず、実に幾億無数の波が、隅なく不断に渦巻いてゐる。その波わ宇宙の各物体からまるであらうが、人向わ宇宙の波の全部に共鳴することが出まない。実験理学者の報告によれば、一秒向に一回及至十回の振動を為す外界の波わ、耳を刺戟して触覚を起し、一秒向に十回及至五万回の振動を為す外界の波わ、皮膚を刺戟して音響となして感覚される。五万回以上の振動わ我等の感覚で受入れることが出まないが、外界の振動数が増加して一秒向に三十万億回となると熱の感覚となり、四百五十万億回より七百八十万億回となると色の感覚となるしいふことである。

宇宙わ物体から成つてゐるが、その物体わ四方へ振動を起してゐる。物体わ一秒向に一回以下のものもあらう。一回以上七百八十万億回、或わ其以上の振動もあらう。そうした振動波の渦中にある我等人向わ、振動に共鳴して種々の感覚を生ずるが、我等人向わ一切の振動に感応することが出まず、宇宙の波の若干振動数のものだけを受け入れ得るに止まる。であるから我等わ解釈して、感覚の欽陥を補わねばならぬ。此感覚の欽陥を補ふ

解釈の方法を推論と名け、えにわ古来演釈と帰納の二論理が採用されてゐるが、其外に假定知識の推論法がある。

科学わ凡て假定を持てゐる。嚴正に云へば、一切の推論わみな假定である。無假定のものと云へば、現実な感覚ばかりであるが、現実な感覚わ知識でなく、宇宙の波に共鳴する我等自身の振動状態であり、其状態が我等自身に意識されたものでもある。従てえわ説明することのできない我等自身の絶対認識と称せられ、より妥当にえを美観と命名されるのである。

感覚を総称して美観といふ、美観の内容わ現実の感覚であり、分類や綜合や判断等の知的作用わ含んでをらぬ。美観わ宇宙と我との間に創造され、主観と客観の共動産物であり、しかも美観わ客観即ち大宇宙に対する、主観即ち我の精神傾向、換言すれば人間性の現われなのである。

美観が全振動に創造されれば、知的解釈わ無用であつたであらう。けれども美観の現実感覚わ、宇宙の波の処々を映すに過ぎない。映らぬ処が多いから、えを継ぎ合わす知的解釈が必要となるのである。えに役立つ意識作用が类推であり、三段論法の演釈論理も、観察や実験を基礎とする帰納論理も、嚴正に云へば、みな此类推に属し、其以上に奇妙な存在でわないのである。ヘーゲルの年証法など、哲覚者の錯覚的産物であり、そんなものが人类の意識作用に固有されてゐる訳でわないのである。

类推解釈が発展した頂上に假定知識が成立する。しかし假定わ気儘のものでなく、假定をしなければ実感の衝突を解釈し能わぬとき、我等わ已むを得ず必然に假定推論をするやうに、我等の精神傾向が出来てゐる。けれ

ども此場合の假定も、決して任意でなく、研究に研究を重ね、演釈的にも考察し、帰納的にも追求し、どうしても唯一の方法しか假定の工夫が付かぬとき、そして其唯一の方法を假定することによつて、実感の衝突と缺陥が、邪魔物を除かれた疏水の如く、流通して継ぎ合わされるとき、其假定わ学問的に受け入れられるのである。えに反し斯かる場合に、もし数種の假定が同時に認容されるとき、不幸にして我等わ其何れを假定の知識とせねばならぬかを決定することが出来ない。此場合にわ学問的に假定の条件を推究して、唯一假定の必然を発見せねばならぬ。唯一假定の適例わ、ダルトンの原子説、アボガドローの分子説等である。経済学に於ても假定を必要とするときわ、任意と独断を避けて、科学的に唯一假定の推論に到着することを努めなければならぬ。

宇宙の波の只中にゐる我等人間わ、肉体の殻を被つてゐる。我等人間の本質わ、肉体以外に存在する精神体であらう。けれども精神体わ肉体に宿つてゐる。此肉体わ物質的存在である。此に人間の物質生活が開始されるのである。

肉体わ物質である。しかも其肉体わ生物一般の原則に従ふて新陳代謝する。新陳代謝わ、肉体が物質であることに基き、老廃物を排斥しつゝ、新しく補給の物質を求める。物質わ物質によつて補給せられ、又た物質によつて保護せられ、無用に肉体組織が消耗することを予防する。衣食住わ此種の補給と保護の物質に当り、詳しく云へば、食わ肉体組織を補ふために摂取される新物質、衣と住わ体温を調節して無用な肉体組織の消耗を避け

一、物質なのである。しかしそが為に物質生活わ
其れ丈肉体を持つ所に物質生活わ
必ずも人間性にわ宇宙に感応する美観の喜
悦があり、人間性の全部し誤認してわならぬ
認識の欽陥を補ふ知識作用があり、其代にも美観や知識の作用
等も記述し、或わ表現せんとする藝術作用がある。此等わ肉体以外の精神
活動である。

肉体の物質生活も人間性の全部し思ふわ大きな誤謬である。と同時に
精神活動のみも人間性と見て、肉体の物質生活を無視することも大きな
誤謬である。過去に於て印度の波羅門行者や、或る種の佛教信者、又たわ
基督教信徒中の出世向的な人々が、断食其他の苦行をして肉体生活を無視
することにより、精神生活を確実に
健全な精神わ健全な肉体に宿る。精神体も完成するにわ、肉体の物質生活
に欽えず、又た之に悉酬せず、順歩に肉体の物質生活とわ何ぞと問ふものである。
の現範経済学わ順歩な肉体の物質生活とわ何ぞと問ふものである。
肉体の物質生活わ具体的に云へば衣食住である。衣食住わ各個人が別個に
自給自足することも出来ようけれども、多数人が社会を為すとき、社会的
に共働扶助するなら、衣食住の物質生活を潤澤にし、又た安固にするに都合
がより経済学わ社会に於ける物質生活の規範も調査することも目的とす
るものである。

二、物質生活と人間性

人間性わ統一されてある。人間わ全一体の精神的存在であるが、肉体に
宿つてある。その人間が宇宙の波に感応するとき美観の意識となり、肉体の
欽えに刺戟されるとき、社会的の物質生活が生れる。美観の意識と社会的
物質生活とわ、無関係の別物であるが、しかし統一されも人間性の両方面
に於ける現われである。

人間わ東に向へば海を見、西に向へば山を見るといふ具合に、宇宙に関
する視的感覚でさへ、方面を異にすると無関係な別物を意識する。けれど
も人間わ唯一であり、同じ傾向が方面を異にして現われるのである。其人
間の固有傾向が肉体と物質から刺戟されて現れるものを、総称して物質生
活といふ。

我等が物質生活をするとき、また
れる。之を綜合し分類すれば、大要
二者に概括されるのである。此二者わ物質生活に於て、我等が表出する人
間性の二大形式である。

人間わ意欲を持ち希望に充つる。意欲も失へば廃人同様、希望に燃え意欲に勤
望も失へば茫然となる。意識して自己を持つ人間わ、希望といふも、意欲といふも、同一意義の異なる文
く、又欲望といふも、同一意義の異なる文
学的用語であり、其意味する所のものわ、物質生活に於ける我等自身の内
的緊張である。其緊張が昂進して外部に向ひ何等か活動するとき、之を能
力と名ける。

欲望も能力とわ、我等人間が肉体を持ち物質生活をする所に発現する人

間性である。もちろん此二者わ肉体に関係し、また物質に直接の関係を持つてゐるが、之が為め人間性の固有表出であることを失ふものでわない。なるほど欲望にしろ、能力にしろ決して人間の専有でなく、人間以外の生物もまた欲望を持ち能力を現われるが、固有の人間性から切離されて、欲望と能力といふ、生物的な独立の性質があると假定することわ、人間の統一的存在を否認するものであり、其假定わ知識としての資格を具備しない。

生物にわ生物の欲望と能力がある。それに人間性が色彩されたとき、人間の物質生活としての欲望と能力が出現する。人間性を離れても考へ得るであらう欲望と能力へ人間性が加わるものを、物質生活に於ける人間性とするのである。欲望と能力わ、肉体と物質とから人間性を剥離し、また人間性が肉体と物質を通じて表出されるであらう所のものであつて、美観が宇宙と人間との共働産物である如く欲望と能力とわ、人間と肉体并に物質との共働産物である。即ち唯一の人間性が全体的な宇宙と共働すれば、美観を創造し、部分的な肉体并に物質と共働すれば、欲望と能力を現出するのである。

此にわ畧して欲望と能力と名けたが、正確に云へば経済的欲望と経済的能力と云わねばならぬ。この経済的な欲望と能力の外に、精神生活の方面へも欲望と能力わ現われる。例へば知識的欲望と能力、并に藝術的欲望と能力の美である。此等の欲望と能力も、やはり人間性が肉体と物質を通じて発現する。けれども知識的欲望と能力并に藝術的欲望と能力わ、経済学の範囲外である。なぜならば其等わ肉体と物質を通じて現われるにしろ

物質生活の方面に現われるものでなく、知識生活或わ藝術生活などの精神的方面に現われるからである。

全一体の人間を取巻くに種々な方面があることわ既に注意した。全一体の宇宙と全一体の人間とが交渉する所に美観が現われ、全一体の人間が宇宙環境の特殊な一部である所の物質生活の方面に向ふとき経済的欲望と能力が現われ、知識生活の方面に向ふとき知識的欲望と能力が現われる。しかして各方面の対境活の方面に向ふとき藝術的欲望と能力が現われる。しかして各方面の対境わ更に細く区劃することが出来、知識的欲望や能力にも、理論的のものや「史的のものや計算的のものや幾多の細分を許るし、また藝術方面の欲望と能力も、文学的のものや絵画的のものや音楽的のものや舞踊的のものや幾多の細分を可能とする。経済的欲望と能力も精細に観察すれば非常に多様である。しかし、こうした方面の異なるにつれて、別種の人間性があり独立した欲望や能力が発生するものと思ふてわならぬ。人格わ二重でなく三重でもなく、統一された唯一の人間が、各方面に意欲し活動するのである。従て各方面の生活わ無関係に見へても、其実わ密に関聯し、経済生活の為に、他の生活を無視し或わ犠牲とせず、寧ろ互に培養して凡の生活方面に於ける人間性の発揮と充実を図らねばならぬ。之を人格の完成とも人間の修養とも云ふのである。

三、物質欲望の種类

統一した人間性が物質世界に干与するとき、大体二種の基本欲望を生す

る。消費と使用とが其であり、之を物質生活に於ける二種の基本欲望とする。

物質に関する欲望わ千態万様であつて、之を簡単に消費と使用の二系統に分類するわ無理であるかのやうにも見へよう。一たい分類といふわ、何等かの観察点から、同種のものを細分することであつて、勿論人為の区分である。従つて全体のものを分け盡さず、区分の範囲外に漏れるものもあれば、まだ何れとも付かず中間に残されるものもあらう。顔と胴との間を首と名けても、首とも顔ともつかず胴とも首ともつかぬ部分のあることわ人為的に自然を分類する場合に避け難い出来事である。物質欲望を消費と使用に大別するに付いても、こうした欽点を寛容して貰わねばならぬ。

消費と使用とが物質生活に於ける二大種類であることわ、常識を持つ凡の人が疑わぬ処であらう。消費とわ欲望を満足さすことによつて貨物が其特質を失ふ種類の欲望、使用とわ欲望を満足する為に、貨物が特質を失わず其貨物が存在する限り継続して欲望を満足さす種類のものであると定義することが出来る。即ち欲望満足の為に、其に充用される貨物が特質を失ふや否やによつて、我等の物質生活に於ける欲望を二種に大別し得るのである。

消費欲望の対象貨物わ欲望の満足に充当れるとき特質を失ふものである。普通わ一回の欲望満足によつて貨物としての存在を失ふものであるが、強ち一回だけで消滅することを必要としない。ペンやインキや鉛筆の類わ、一体の貨物として意識される存在が、かなり長く継続して欲望の満足に耐

へる。けれども欲望満足の各瞬間に、幾許かの部分わ消滅しをり、従てえを使用と見ることわできず。消費欲望の満足と見ねばならぬ。又た木炭を燃して暖を取るにしても、かなり長時間の欲望満足に耐へる。でわこの種の欲望満足を使用と呼ぶかといふに、使用と云われる場合わ、欲望満足自体が貨物の特質消耗でなく、貨物自身の物理性によつて貨物が自ら特質を喪失するまで、継続して貨物が我等の欲望を満足して呉れることを条件とし、此条件が使用欲望の内容となつてゐる。例へば机や体温計や、鍋釜の類わ、使用することが貨物の消耗とならず、此等の貨物わ自身の物理性により特質が失われるまで、我等わ子孫にも伝へて使用を継続することができるのである。家屋や衣服や、自転車なども、かなり長く使用出来るが、使用に従ふて破損し始める。しかし家屋が破損するわ使用の結果であるよりも、家屋としての存在が風雨や地震等に耐へる処より起り使用しない空屋わ却て早く朽ちる。衣服や自転車類の破損わ、使用が物の特質を喪失せしめると云ふよりも、使用に伴ふての外界の物理的障害、例へば衣服が物に磨れるとか、自転車が衝突するとかといふ。使用目的以外の出来事から、貨物の特質が失われるのである。であるから大まかに物質欲望を使用と消費の二種に区別し、インキやペンや鉛筆の類わ、使ふ瞬間に物質の一部を消耗せしめ、我等も之を意識して、消耗が欲望満足の条件となつてゐるから、此等を消費欲望と名け、之に反し使用わ欲望満足の為に、貨物が得質を失わず継続して其貨物を使わんとする意識の欲望であるを観察し得るのである。しかして欲望を消費と使用に二大別することわ、消費生活と使用

生活といふ経済生活の二大現象に相応し経済生活の基礎的諸事実に一致するものである。

欲望の分類わ対象となる物質の消耗から見るに止まらず、昔から衣食住と云ふように、欲望満足の起因する肉体部位に応ずる貨物の種類によつても区別されよう、だけれども斯した区別わ機械的列挙であるから、此等を綜合して消費と使用の二大欲望に概括するのである。かように欲望を消費と使用に二大別することの経済学上に於ける價値わ、人間性と物質との相互関係としての生活現象を論ずるとき、一層適切に判明するであらう。

消費と使用に大別する外、欲望わ程度によつて必要的欲望、有益的欲望誘惑的欲望に区別することが出来る、しかして此等の区別わ経済理学に取り、かなり重要な役割を持つものである。

必要的欲望と云ふわ重に生理上から来るものであり、其欲望を満足しなければ、肉体を健康に維持することができない種類の欲望である。例へば生理的に必要な飲食や、気候に応じた衣服や寝具や、雨露を凌ぐ住居に対する欲望などが必要的欲望である。従て必要的欲望わ、消費欲望の中にも使用欲望の中にも発見されるのである

有益的欲望といふわ生理的にわ必要でないが、其欲望の満足が、能力の效果即ち能率を高めるであらう種類の欲望である。例へば机や筆盤の類わ生理的に必要でないけれども、机を使ふと長時間の読書ができ、筆盤を使ふと正確な計算を早くすることが出来る。ペンやインキや、自転車の類も有益的欲望の対象であり、普通の家屋も必要以外に有益部分を多量に含んでゐ

るのである。此の有益的欲望もペンやインキの如く消費に付いても存在するが、重に使用に就いて其中の主要なものが発見されるのである。

誘惑的欲望わ或る場合にわ生理的に有害となる。それ程でなくても、勤勉と努力心を奪ひ、或わ正義観念や平等愛の人間性を麻痺せしめる種類の欲望である。こうした誘惑的欲望わ大体有害であるが、其初階段に当るものわ刺戟的欲望ともいわれ得るであらう。例へば茶や菓子の類わ応義に云へば誘惑的でもあるが、しかし有害とか麻痺的とかいふわ無理である。それ故此等を別に刺戟的欲望と名けて、一分類を与へ得るであらうけれども分類を成るべく簡約する為め、刺戟的欲望の有效なものわ有益的欲望に包含せしめ、その有害無益に近いものわ誘惑的欲望に含有せしめることとする。

欲望に関する以上の類別わ、主に個人の立場から見たものであるが、見方を変へて社会の立場から観察できぬことわない、消費にしても使用にしても各人別個になし得るものであるが、同時に家族又わ其以上の團体を単位とする等、社会的に欲望が満足されることが少なくない。例へば食事にしても、家族で共働して炊事してゐるし、家や家具類にも共用のものが多い。場合によると学校の寄宿舎や兵営の如く、家族以上の多人数が一團体をなして、共働の炊事や共用の設備をすることがある。又た道路や橋の如きわ無制限に多数の者が使用するようにと設備されてゐる、斯くの如く欲望の多数わ、或わ個人的に満足され、或わ社会的にも満足されてゐるから、之をも亦た欲望の種類とすることができよう。けれども個人的に満足される

とか、社会的に満足されるとかといふことわ、欲望の種類であるよりも、欲望満足の形式と見られ得る。欲望満足の形式わ規範経済学が最后に調査しようとする物質生活の方式と最も密接の関係あるものであるから、個人的とか社会的とかの、欲望満足方法わ、欲望区分の一着点とせず、物質生活の方式に関係ある、欲望満足の形式として観察することにしよう。

欲望わ本質的に消費と使用とに大別される。この二大別わ本質的である。本質的と云ふわ消費にしろ、使用にしろ、其自体が直接に人間の満足となることを意味する。こうした本質的に直接な欲望の外、なほ間接的な欲望がある。其を大別すると、生産、交換、借用、所有の四種類となるであらう。

生産、交換、借用、所有の四者わ、本質的な直接の欲望でない、此等わ、本質的な直接の欲望を満足する手段として間接に欲求される所のものである。しかも個人の立場を離れ、主に社会的に生ずるものである。であるから在来の経済学でわ、此等を欲望として取扱わず、経済行為として取扱ふて来た。

普通の考へ方でわ、欲望と行為を分けるを当然としてゐるが、行為わ欲望が或る程度まで進行したとき必然に現われるから、私わ欲望と行為との間に区別を立てるのを人為すぎると思ふ。消費や使用も欲望であり、同時に行為である。行為へと進行しない程度の欲望わ、経済上でわ欲望といふに足らぬ潜在的のものである。経済上に欲望として取扱われるものわ、行為の程度にまで緊張したものでなければならぬ。であるから経済学上でわ

欲望と云へば、同時に行為の意味を含み、行為に現われぬ欲望と、行為に現われた欲望とわ、心理学的に区別の必要わあらうけれども、経済学上にこれを区別する必要わないのである。経済学でわ、欲望其他の人間性の研究と、貨物其他の外界物質性の研究と、人間性と物質性との相互作用から起る生活現象を基礎的研究の三題目とするのである。

経済行為の文字を避ける理由わ尚ほ一つある。経済行為といふときわ、欲望が進行したと同時に、人間能力の現われとなつてゐることを意味する。従て行為わ基礎的観念として取扱ふに複雑すぎる。学問の出発点となる観念わ、成るべく単純なものでなければならぬから、私わ人間性を欲望と能力に分けるのである。それでも尚ほ複雑になり易いのわ、欲望にしろ外界の貨物と無関係に考へ得ないから、単純観念に似ても尚ほ複雑観念である。欲望と貨物との相互関係わ生活現象として研究さるべきであるから、単純に欲望を研究するにわ、貨物との交渉を避けることに勉めるであらうけれども、なほ幾分の貨物との交渉を持たずにわ欲望を説明し得ない憾があるから、之に加へて能力関係をも混合した経済行為を経済学の基礎的観念とすることわ、とても承認出来ない煩鎖でなければならぬ。謂ふ所の経済行為わ、本書の経済生活即ち経済現象に当るを了解されたいのである。

間接欲望として此に挙示される生産、交換、借用、所有の四者わ、或意味に於て経済行為であるが、経済行為と云ふわ、欲望の進行したものである故に、生産、交換、借用、所有を経済行為として是認するわ、即ち欲望を承認することと同意義となる。経済行為わ対象あつて活動する複雑観念で

かして経済行為即ち経済生活の現象として論究することとする。し
かも其々の行為に相当する欲望あつて、其欲望が一定の対象物に
向ふて進行するを常するものであるから、基礎観念として先ず欲望を観察
せねばならぬのである。

消費し使用の欲望を満足するにわ貨物を必要とする。けれども我等わ生
活上らに貨物を所持してゐない。だから何等かの方法によつてこれを獲得しな
ければならぬ。貨物を獲得しようとする我等が緊張する意識も生産欲望とい
ふ。生産わ各人別個の欲望であるし同時に互に伏け合ふて社会的に其満
足も実現しようとされる。もし生産された貨物が自己の消費又わ使用を満
足するに不十分なとき。他人の生産した貨物と交換しようし意識が緊張す
るであらう。此に交換欲望が発生する。

交換欲望わ消費又わ使用の対象となる貨物を所持しないときに起る。消費又
又わ使用に差向き不用な貨物も所持するとき。我等の意識に現れる人間性
である。しかしてこの人間性わ、自己と貨物との間に於てよりも、社会に
於ける他人との間に発現するものである。であるから交換欲望わ社会的看
点を離れて考へることの出来ないものである。

借用の欲望も交換欲望と略々同じ緊張の下に起る。借用欲望わ、消費又
わ使用しもしい貨物を所持せぬのみならず、また交換するほどの不用な貨物を
も所持しないときに現われる意識の緊張であり、此借用意識わ交換欲望の
如く、また社会に於ける、誰人かに向ふて緊張するものである。

交換及び借用の欲望わ、社会的に何人かに対して緊張するものであるが
もし此種の欲望が発生する事情の下に於て、社会の何人とも願意せず、早
に欲求する貨物にのみ意識が緊張すれば、交換でなく借用でもなく、盗賊
もなるのである。事実に於て盗賊的意識を持つ者わ相当に多くあるが、し
かし従等にわ修養の不足、或わ変態心理の欲陥があり、従て盗賊を一種の
経済欲望として観察することわ出来ない。経済学わ盗賊の如く変態的な欲
望が生わ生活現象を取扱わず、人間普通の標準に基いて欲望と其発展も観察
するものであることも善く了解しなければならぬ。

生産した貨物、交換し借用した貨物わ消費し
又わ使用されるであらうけれども、消費わ次ぎ次ぎにと実行せられ、使用
わ、貨物の存在する長期間に継続して欲望が満足される。従て消費の純行
に不都合のない為にわ当分の必要に応ずる貨物を所持し、又た使用にあつ
ても、使用自体が貨物の所持も意味する。しかし則ち貨物の所持わ、そ
れ自体で独立した欲望と見ることわできない。所持わ独立した欲望であるこ
とりも、消費や使用の前提となり、其内容の一部ともなり、又た生産や交換
や借用の動機の結果、別言すれば、其欲望の内容の一部をなしてゐるもの
である。けれども所持そのものを欲望の一部となすも可である。

消費にも使用にも付きものである所持の事実わ、其段階に応じて、或わ
之を保存と名け貯蔵とも呼ぶ。保存や貯蔵わ所持観念の一部であり、之も
独立した経済的欲望と見ることわ無理である。けれども消費や使用に必要

な所持や貯蔵や保存に超過して、必要でもない貨物を、所持の為に所持しようといふ特殊な所有欲望が、往々にして我等の人間性に萌した。端的に云へば、所有欲望とわ不必要なものに対する独占的支配意識である。こうした特色を持たぬ所持わ保存にしても、貯蔵にしても、独立した欲望と認めることは出来ない。

所持も貯蔵も保存も人間性の内であり、意識としての緊張性を持つてゐるが、之等わ消費や使用の欲望行為の延長であり、消費と使用の基礎的意識内容から分離し独立して観察せねばならぬ程特色あるものでわない。けれども所有わ、排他的な独占の支配であることに特色を持つてゐる。

消費にせよ使用にせよ、それの欲望満足にわ、前提として所持が必要である。所持なしにわ消費も意識の満足が得られない。消費でさえペンヤインキは保存の必要があり、使用に至つてわ、家でも衣服でも、変態心理の怠け者を除けば、家わ掃除し衣服わ洗濯し日々の保存配慮をしてゐる。けれども此等わ消費と使用の不可分無意識であり、飲食するだけを消費とし生わるだけを家の使用と考へてわならぬ。特に消費欲望にあつてわ、消費するに従ふて貨物が消耗されるから予め相当の数量を貯蔵して置かないと、恐ち不都合を生ずる。言葉でわ保存と貯蔵を分けるが、保存即ち貯蔵であり、内実わ同一意識の異林でもある。だから所持とか保存とか、貯蔵とかといふ意識わ、消費と使用の内容であり、又を延長であると見るが適当である。しかし所有欲望だけわ、別種類のものとして特別に考へずにわゐられない

所持や保存や貯蔵わ強ち社会的の出来事になく、個人と貨物との間に於ける単純な基本的意識関係として観察し得るが、所有欲望わ排他的であり従つて社会に於ける人々を考へないでわ、所有欲望といふ観念が成り立たない。こうした理由からも所有欲望を独立した種類のものとしなければならなくなる。

柳正成わ鳥わ家財を貯へぬから飛行自在だと云ふた。古来の聖賢並に宗教わ、貪欲を罪悪として排斥する。キリストわ富める者に汝の財産を賣つて貧民に施せ、しからば天国に行かれようと教へた。この貪欲的罪悪こそ今日いふ所有欲望に当る。経済学わ盗賊其他の変態的罪悪わ研究しないから、聖人や宗教から見て貪欲的罪悪にも当る所有欲望も経済学が取扱ふを[illegible]い観念であるかも知れないが、事実に於て所有欲望わ時代的に一般人から受入れられ、罪悪としても余りに常習的となり変態が逆に標準化してゐる。そして所有欲望に冷淡な人間性を却つて変人とさへ嘲笑してゐるであるから本書も時代の流れに追従して、所有欲望を社会に於ける物質生活上の人間性の一種美として観察するであらう。しかし其本質わ所持や保存や貯蔵とわ別であることと、所有わ如何なる時代にも正当に存在した人間性でなく、時代的に存在する特殊の欲望であることを注意して置かねばならぬ。

所有欲望を定義すれば、消費にも使用にも差当り必要のない貨物を所持したい欲望であるといわねばならぬ。しからば何が動機で必要のないものを所持しようとするか。それわ他人の借用欲望に応ずる為であることが多

い、でわ誠に博愛的な奇特の欲望だと推奨できるかといふに、借用に応じようとする動機わ賃貸にあるので、実わ博愛でも奇特でもないのである。

所有わ差当り必要のない貨物に対する所持欲望である。其動機わ賃貸であるが其外にも蒐集的な自己満足の直接欲望からの所有もある。この蒐集的欲望わ所有の為めの所有ともいひ得る欲望である。しかし此蒐集的所有欲望が普通の標準的人間性であるかわ疑問である。多くの人わ斯した欲望を持たず、之わ余裕のある一部の人々のみが道楽的に持つ変態的心理に近い欲望であるらしい。学問上の材料として必要なものを蒐集する以外わ人类の文化にも関係のないことであり、単純な個人の道楽に過ぎぬ蒐集的所有欲望わ経済学の範囲外に置くべきものかとも思ふが、盗賊を変態心理といふに比べて稍々普遍的のものであるから、生活現象篇に於て簡単に此種の所有欲望も観察しよう。

所有の為の所有わ自己満足の直接欲望である。けれども蒐集したものと誇り顔に多くの人々に見せびらかし、何等かの讃辞を受けて、所有欲望が一層深く自己満足となるから、所有の為の所有欲望も、貨物に対する単純な直接欲望であるに止まらず、同時に社会的の関係に於て発生する複雑意識である。もし蒐集したものを一人も賞めず、異口同音に御吾労ですと嘲笑すれば蒐集的所有欲望わ消滅するであらうことが十分に期待される。

蒐集的所有欲望に似て非なものわ、名誉と支配の利己的打算から起る所有欲望である。所謂財産に対する欲望わ、重に此動機から生ずる。財産家にわ、社会上の名誉ある地位が与へられ、財産によつて多数の人々を支配

し得ることに現実の社会関係がなつてゐるとき、所有欲望わ最も旺盛に活動するものである。資本主義社会でわ斯した財産的支配が最も有力な社会関係となつてゐるので、所有欲望が普遍化されて、社会的に人間欲望の中心となり、消費や使用の基本欲望よりも以上に、法律制度の上にさへ此意味に於ての所有の権利が尊重されてゐる。果して所有欲望わ消費や使用の基本欲望よりも尊重されねばならぬであらうか、規範経済学わ生活現象篇并に生活方式篇に於て、よくこれを講究しなければならない。

最后に欲望の種类に関する以上の記述を表示しよう。

- 欲望の人間性
  - 直接欲望
    - 消費欲望
      - 必要的欲望
      - 有益的欲望
      - 誘惑的欲望
    - 使用欲望
      - 必要的欲望
      - 有益的欲望
      - 誘惑的欲望
  - 間接欲望
    - 生産欲望
    - 交換欲望
    - 借用欲望
    - 所有欲望

四　物質欲望の共通性

欲望と貨物との交渉なしに考へることができない。欲望と貨物との双方から性質が交錯されることによつて、経済現象が起る。それ生活現象篇の研究内容となるものである。けれども貨物に付いてわ人向性からの影響を多く受けない処の客観的な共通の属性があり、また欲望に付いてわ貨物から多くの影響を受けない処の主観的な共通の性質がある。本篇でわそれを研究し、貨物から濃厚な影響を受けた後の欲望の属性わ、生活現象篇の研究に譲るであらう。

普通経済学者の説く所でわ、欲望の前提に欲えがあり、欲望わ貨物によつて補われ、ここに満足が起るといふやうに、彼等わ欲望発展の心理的順序を決定しようとする。なるほど、必要的欲望にわ生理上の欲えが伴ひ従ふて貨物により之を補ふ物理関係が続くであらう。しかし有益的欲望や誘惑的欲望に付いてわ、欲えといふものを前提にしても考へることしわ無理である。無理すれば有益的欲望や誘惑的欲望についても、欲えを観念し得られないこともないであらうが、この場合の欲え観念わ生理的でなく、経験的であり又た知識的である。過去の経験から便利であつたこと等を聯想し具便利等を得ようと直接に欲望するのであつて、この経験からの便利の欲望的聯想意識を欲えと名付けるわ如何にも無理である。欲えがなければ補ふしいふことも起らぬわけであるから、欲望にわ欲えが伴ひ、貨物によつて此欲えが補われるといふように、心理的の順序を一定せず、我等わ欲望

も生理的に或わ経験的に意欲さゝる基礎的な人向の性質であると観察するに止まらう。この欲望にわ主観的に種々な共通性質があるのである。

扨一、欲望わ個人的に相違する。

欲望わ各人一様でなく、各人の生理的事情により大差がある。健康体と病人の向に非常な欲望の内容に相違があることわ云ふまでもない。健康者に付いても、体力の旺盛な者わ食欲が優れて盛であらうし、体力に比して知能が発達してゐる者わ何かしら嗜好的な欲望が多いことであらう。男女によつても欲望に大差があり、同じ人でも熱帯と寒帯とし、居住する場所により、また欲望に非常な相違を生ずる。なほ其上に欲望わ生理関係以外の経験から影響を受け、俗に風俗習慣といふものにより、大きな相違を来すことも発見して怪ず承認する所であらう。

欲望が個人的に相違することわ、経済生活に都合がよい。此事実わ社会的物質生活の方式を決定する規範の基礎ともなる。もし各人の欲望が同一であれば、天然の利用わ著しく制限されるであらう。天然わ何処でも同一貨物を産出するに同一の条件を持つてわゐない。幸に人向の欲望も人により大差があるから、位置により相違する天然を、地味や気候に応じて最も有効に利用し、夫々の位置に適応する貨物を産出することができる。之と同時にこうしたことわ社会の物質生活の方式を決定する一個の基礎的事実であり、欲望が人により相違することも無視して、一様な生活を強制しよ

うとする経済方式わ、生活規範から当然に拒否されねばならぬ。

第二、欲望にわ変化性がある。

人間性わ一体である。えわ欲望に付いても当嵌まる。しかしながら、人間性わ、物に応じ種々に変化する。従て欲望にも変化性があることわ説明する迄もない。或る瞬間にわ、一の欲望が全一体としての意識を完全に支配するかに見へるが、時を距てて観察すると、意識わ刻々に激しく変化してゐることに気付くであらう。時としてわ変化以前の欲望が意識に残存して新しく現われようとする欲望の発展を妨害し、意識の中で争闘が起り全一体の欲望わ統一が破れて、混乱の中に醜い自己を発見せねばならぬ。こうした状態を煩悶と名け、精神修養の途上に於て何人も経験する処である。しかし精神が修養されれば、理想と現実わ一致し、欲望の生滅わ乱雑でなく、全一体の人間性が聰明に現われる。自由意志とわ、此状態を形容したものであり、不自由に拘束され惑乱して煩悶渦中にある意志わ、自由でなく不自由なのである。

経済学上にも自由といふ言葉が屢々使われるが、自由の意義わ他人に対する関係でなく、自己の欲望が統一されてゐる状態なのである。けれども自己が他人から拘束されるとき、拘束者に対し自由が叫ばれるであらう。他人から拘束されるのわ、自己に欠点があつて、自己の欲望が惑乱し、理想と現実が一致してゐないから、止むを得ず他人から拘束されるのであらう。このとき他人に向ひ自由が叫ばれると意識しても、実わ他人が自己に代わつて拘束して呉れるのであるから、やはり自己に対して自由を叫んでゐる

と理解せねばならぬ。が、現代わ他人も自己も放縦であり、自分にわ欲望を統一する能力がない癖にゐて、自由を他人に向ふて叫びかけ。又他人も勝手すぎて、拘束する者の都合で、利己的に他人を拘束しようとする。従て現代にわ、本当に他人に対し叫ばれる自由が多く、本来の自由から自由が脱線してゐる状態である。

修養途上に於ける多くの人わ、人格の統一が破ぶれて煩悶してゐるが、同時に物質生活上にも煩悶してゐる。経済生活の上に種々な煩悶を持つてゐるのが、修養期の人々の常態である。この事実も経済学を研究する者が予知して置かねばならぬ。でないと、煩悶と惑乱の欲望状態を当然と考へるかも知れない。其時に其人わ人間的にも経済的にも進歩することができないであらう。進歩わヴォルフやライブニッツ一派の言を借るまでもなく、不明瞭な状態を脱却して明瞭な状態へ移ることである。煩悶と惑乱わ最も不明瞭な状態であるが、それを当然と心得れば、人類乃至其人の進歩わ停止するであらう。我等わ進歩の停止を避けて意識の統一を鮮明にし、理想と現実を一致せしめた欲望の透明状態に、精神生活も物質生活も安定さそうと追求せねばならぬ。

しかし欲望にわ変化がある。決して永く同じ欲望が継続してわゐない。現在の欲望が満足されゝば、続いて他の欲望が起るのである。満足されなければ、欲望わ緊張して濃厚となり、或わ衰弱して他の欲望へと移ることもあらう。又もえを長い時間を距てゝ観察すれば年令により欲望が相違することをも、欲望の変化性と云われるであらう。

欲望が変化することわ判明な事実である。この欲望変化の事実から、種々な重要性質が派生する。欲望に強度あること、欲望の代替性、欲望の統制に関する理論等が生れる。欲望の強度に付いてわ、最も重要な残存強度に関する法則が発見される。此等わ欲望の性質であるが、同時にえを法則と名けても差支がない

一切の法則わ人為の規定を除けば、自然界に於ける物理性、もしくわ現象性の発現なのである。法則といふわ人間的命名であつて、自然界にわ物理性わあるけれども、造物主が存在して自然界へ法則を賦課したのでない限り、法則といふものわ存在しない筈である。しかし理解し易いように、物理性を人間的に命名して法則といふことが多い。本書わ成るべく性質又わ傾向といふ文字を使用するけれども、法則といふ方が尊厳めいて聞へるからときぐ法則といふ言葉を使用することもあらうけれども、本書に限らず凡て法則といふ言葉わ、自然界に於ける物理性もしくわ現象性を指すものであることを注意して置きたい。

第三　欲望にわ強度がある。

欲望わ芽生へたとき、弱いのが普通である。人間わ案外横着であつて、欲望が芽生へたからといふて、すぐそれに従わない。といふのわ、それよりも前の欲望が残影を曳いてゐて、其残影が満足の喜びであれば、暫らく其中に陶然とするわ安逸を貪る怠け者よし、一がいに叱り得ない人情である。若し又た前の欲望の残影が不満足からの衰弱であれば、意識わ難段して意気わ消沈し、激しく刺戟しなければ、新しい努力を[illegible]し得ないことも多く、えを薄志弱行と責めるわ苛酷である。

欲望わ前欲望の残影の中へ芽生へる。芽生へると生育しだす。それに従ふて欲望わ強度を高める。この強度わ変化性の一種であるが、内容の質を換へずに変化するから、普通の変化と区別して、強度に関する欲望の法則を観察することになる。

欲望わ芽生へるとき弱くても、前欲望の残影が消へるに従ひ、其跡へと発達して拡充され、其強度を増す。えを欲望の強度に関する第一法則とする。

欲望わ前欲望の残影に拘わらず、自身に発育して前欲望の残影を駆逐し、意識の全域を占領しようとする。えを欲望の強度に関する第二法則とする。精神修養の積んだ人わ、こうした心理作用が迅速であり、特に欲望の結果に関する理想的并に知識的洞察の聯想作用が迅速となれば、判断流るゝ如く人格的にも又た叡智的にも、煩悶を持たなくなるのである。こうした人わ安逸を求めず、又た意気消沈の薄志弱行を嘆息することも稀である。

欲望が一定の強度に進めば、如何なる怠け者でも努力せずにゐられなくなる。努力とわ消費又わ使用の生活である。それにわ生産や交換や借用や所有等の種々な生活も必要となつて来る。かように欲望が一定の強度を持ちだせば、消費或わ使用と名け得る明瞭な意識となつて、それに必要な努力をしだす。かく欲望が努力に向ふて発達することを、欲望の強度に関する第三法則とする。生理上の必要的欲望に付いて此等の三法則を例示すれば、欲望が芽生へて第一法則又わ第二法則により、食わんとする消費欲望

〔強度が進むにつれ、最初の内臓刺戟の潜在的な気分作用であるに止まつたものが意識を完全に領有して第三法則により〕

や、着ようとする使用欲望の努力へと発展するのである。

欲望の強度を絶対的のものであり、他の欲望に比較して、初めて一の欲望の強度を知り得るような相対的のものでない。それを欲望強度に関する第四法則とする。

欲望が満足されるにわ、消費にしても使用にしても、常に努力を要する。其努力わ筋肉の働だけにしても、実わ犠牲なのである。そして欲望が筋肉的動作の犠牲を払ふて満足されるときも、喜びを感ずる。学者わ往々此喜びも欲望の目的とし、或わ動作の苦痛も解釈するが、此解釈わ必要的欲望に付いてわ誤解であることが多い。必要の為にわ、我等わ不快をも忍ぶこと、病気の場合に薬も飲み、生命にも関する冒険な外科手術さへ受ける。又た喝すれば汚水さへ飲み、貧乏すれば不味の食物も顔をしかめても取らねばならぬ。それやへ努力わ欲望の強度から必然的に結果するものであつて、結果に伴ふ快不快わ、寧ろ欲望の強度を促進せしめるに役立つであらう。

欲望の強度も満足からの快感等より促進されることわ、欲望が競起する場合に於て満足の結果を比較し、相対的に欲望相互間に取捨をなすことが出来るようになる。相対的に判断して捨てられた欲望わ衰弱するであらうし、採用された欲望わ其に代わつて意識を領有するであらう。かく結果に伴ふ快不快によつて、欲望が最進し或わ衰弱する心理作用を、欲望の強度に関する第五法則とする。

欲望わ満足されたとき、悦びも残影として衰滅に向ひ、捨てられもしき

わ、不満を残影として又た衰滅に向う。相対的の比較から捨てられずとも、其を満足するに要する努力の犠牲が過重であるしき、放棄されることもあらう。いづれにせよ欲望わ残影を思いて衰滅に向ふことも欲望の強度に関する第六法則となし得るのである。

欲望に強度あることわ、やがて経済上に価値を考へる根本となるものである。経済学上の最大問題わ価値論であり、昔より価値に付いてわ種々な解釈があるが、如何なる解釈も欲望の持つ強度を無視してわ立論することが出来ない。労働価値説の如きも一見すれば欲望の強度に無関係のやうであるが、労働のみによつて欲望を満足する貨物が生産されるとする点であるも思かも労働の強度きに、価値の結局の出発点わ、欲望の強度にあるを知ることができよう。価値わ貨物に対し附与されるものである。其貨物が欲望を満足することに依つてのみ存へられる。しかし価値の根拠となる欲望の満足わ其程度を計算することができない。計量し得る欲望の性質わ、強度の側にあるのである。而して欲望の強度わ犠牲の側面からのみ測定されるであらうことも注意せねばならぬ。

第四　欲望を満足するにわ努力も犠牲を要する。

精神的のものわ別であるが、物質生活上の欲望が満足されるにわ、必ず物質も肉体働作の努力を必要とするしする。物質わ無盡蔵に得られることもあらうが、肉体働作わ静止に打ち勝つて努力されなければならぬ。その努力わ喜しい結果を齎らすであらうけれども働作そのものわ静止に打ち勝つ努力

である。

働作わ子供に於ける場合の如く本能的にも営為される。子供にとつてわ働作を封じられることもが、無上の迫害であらう。かように。働作わ喜びでありまた本能的であることもあるが。常に其が努力であることにわ変りない。世間でわ努力と小徴牲とかと云へば、苦痛も睥睨するが、その睥睨たわ誤謬があるとも云わねばならぬ。人生わ努力と徴牲の結晶であるが、人生わ決して苦痛し断する訳にゆかぬ。努力と徴牲の人生を、出来れば喜びしたいのである

人生を喜びとするにわ、人生の内容をなす努力と徴牲とが、喜びでなければならぬ。しかし苦痛なものを無理に喜びとし解釈しても駄目である。本質が喜びでありたいのである。

評に観察するとき、努力と徴牲わ苦痛であるうか。もし此等が苦痛であれば、如何に解釈しようとも、人生も本た苦痛であることを免かれぬ。

努力わ徴笠が意識を領有して緊張の発現に違したとき、必然に惹起される肉体神主の連弋的活動である。こうした活動わ子供に限らず、反射的或わ本能的であり、苦痛の感覚わ、そうした筋肉神主運動が長時間に継続するとき起る副作用である。

るとき、反射的に或わ本能的に筋肉運動そのものも苦痛と感ずる心理作用も、此等が持つ飲てわないのである。況て筋肉運動から云へば、其原因となる徴望意識わ目的となり、意識が目的徴望で緊張するとき、殆んど反射的に或わ本能的に筋肉わ活動するのである。しかし其活動も長く継続せねばならぬとき、倦怠わやがて生理的にも

疲労を覚へさし、努力にわ苦痛の意識が伴ふようにもなる。従て苦痛わ努力そのものゝ性質でなく、努力が継続する結果しして起る副作用である。

であるから、長時向の動作さへ避けることができれば、努力にわ苦痛水伴わめことになる。人生から苦痛を排除する鍵わ此に蔵されてあるのである。

普通に努力を苦痛しいふわ、長時向からの疲労であるよりも、より愉快な欲望に違ざかることの精神的苦痛を指すのでわあるまいか。それならば勝手すぎる。より愉快にも迷ふ煩悶を克服し、まご必要的欲望も満足し有益的欲望を満足し、むしろ誘惑的欲望からわ遠ざかるが、人格者の品性なのである。気儘に思ひ病らうて、自分で作り上げる勝手の苦痛なら、其も苦痛し感ずる根本に誤謬があるのである。例へば遊蕨わ飲食よりも愉快であるからしいふて、飲食することを苦痛し考へれば余りにも横着すぎる。又た山畑で耕作してゐて喉が乾いたとき、重い足を引いて谷に下り水を飲むことわ、中々大なる苦痛の努力であるのである。努力が苦痛に感じられるのわ、同じ種類の働作を継続する結果であることわ、此の終りの例によつても知られるであらう。喉が喝いても、目の前の火鉢の上の湯沸から湯を飲むのであれば、働作が短時間であるから、少しも苦痛し感じないのである。ことい井照し、器々了解されるであらう。

努力わ必らずしも苦痛でない。徴牲の語源わ神に対する供物である。苦痛より わ感謝の表示であり、本来喜びとし解すべきものであるのに、何故か苦痛の深刻なものを徴牲し解し始めた。それわ供物に捧げる物を惜しむ貪欲からまたでもあらう。

この貪欲さへ解放されれば、徴牲わ苦痛でなく喜

びとなる。

自己の欲望を満足する為に必要な犠牲の供物が、なんで苦痛であらうか、むしろ喜びと感謝でなければならぬ。何の為に貪欲するか、貪欲しても結局わ腐らさずに、我等わ一切の貨物を何時か欲望の犠牲に供へねばならぬ。犠牲の中へ貪慾の観念を雑へたのわ、貨物が生産されるに伴ふ労働の苦痛に由来するであらうけれども、しかし労働が短時間であれば決して苦痛とわ感じないから、人生を喜びとするにわ、労働を長時間であることから解放すれば、その時一切の犠牲が喜びとならう。しかし今日の経済生活でわ、努力と犠牲とわ苦痛が伴ふことが多いのである。

努力と犠牲とわ苦痛であると否とに拘わらず。之を欲望満足の代價と考へることができる。努力と犠牲が苦痛であるとき、代價も苦痛と意識されよう。しかし、もし努力と犠牲が苦痛でなくなれば、代價も苦痛でなく、或わ喜びとも意識されよう。いづれにせよ、欲望満足には代價があり、其代價わ努力と犠牲を観念の内容とする

欲望の満足にわ代價があるが、しかし満足それ自身わ精神状態であつて計量され得べきものでない。計量され得るものわ、欲望が満足されるまでの経過、即ち欲望の強度でなければならぬ。努力と犠牲わ、欲望の強度に比例して拂はれるのである。であるから、欲望の強度が一定の度に達すれば、苦痛であつても努力と犠牲が続けられ、その時、努力と犠牲が多すぎれば、強度の弱い欲望わ放棄されることになる。満足とわ一定強度の欲望が放棄されずに、努力と犠牲の代價によつて充足された時の精神状態である。

代價即ち價額の根元わ欲望の強度であり、之を測るものわ努力と犠牲であるが、欲望わ人間に属し交換譲渡することができぬ。であるから欲望の價額を測ることわ無用である。でも有用と無用とに拘わらず、欲望にわ價額が存在する。が、無用なものわ測るを要しない。しかるに此に是非とも測るを要する價額がある。それわ貨物の價額である。

貨物とわ欲望満足の手段となる犠牲を、外物の側面より見た名称である。欲望にわ價額があるが、欲望わ交換譲渡できぬから、其價額わ計算するを要しない。けれども努力と犠牲、即ち努力と貨物とが欲望の價額なのである。普通の観念に於て價額といふわ、相互的のものであり、交換され譲渡されるとき、其價額を計算する必要が生ずるのであるが、價額の基本わ交換譲渡の以前に存在し、又た計算され得ることが、必しも價額の要素でわないのである。

欲望に價額があることわ、必然に努力と貨物にも價額があることを意味する。しかし欲望の價額わ計算するを要しないと同時に努力の價額も特殊の場合、例へば努力を賃銀に換へて労働する如き場合を除き、又もえを計算する必要がない。そこで甚だ大雑把であるが

等價の種類 ＝ 貨物の種類 ＋ 種類の種類

といふ方程式に於て、努力の價額わ計算せぬから、假にえを零とすれば貨物の價額を欲望の價額に等しきものと見ることができる。実の処、欲望も努力も、余りに多くの主観的分子を持ち、其價額を計算するに困難である。

けれども貨物わ客観的存在であるから、其價額を計算することが比較的容易である。

欲望の價額わ貨物の價額に依つてゞなければ計算し得ないが、貨物の價額を計算するとき、逆でわあり、又た不正確でわあるが、大まかに其を欲望の價額と認め得る。しからば貨物の價額を如何して計算するか、これ経済学上の大問題である。が、貨物の價額わ計算し得ることだけわ確実である。

計算し得るもの、必ずしも價額を持つてゐない。往々にして計り得ることと、價値を有することを混同するが、えわ誤である。長さわ測り得る、面積も測り得る。しかし線や面積に價値があるとわ考へられぬ。線も面積も観念上のものであつて、実物でわないのである。実物でない観念上の符号乃至わ約束に價値があると思ふことわ不可能である。

貨物わ價額を測り得るが、價額わ果して貨物の性質であらうか。貨物にわ外物としての理学的性質があるが、價値わ理学的性質でわない。價値わ人間と貨物との関係から発生するものである。その関係わ貨物が欲望を満足する対象となる処に発生する。であるから價値の根元わ欲望にあらねばならぬ。欲望が満足されるにわ、努力と犠牲を必要とするが、えを方程式に現わすとき、努力わ計算を要しないから零とすることができ犠牲即ち貨物の價値を欲望の價値と等價に見ることができるのである。えを價値観念の基本とする。

犠牲に向ふて発展する欲望の強度のみ價値の出発点であり、價値わ欲望

の強度から発生し、えに対立する貨物に被せられるものである。欲望の強度わ貨物によつて制限される。欲望の対象となる貨物が手近にあれば、欲望わ強度を浪費せずに済むし、貨物が遠方にあれば、欲望わ其強度を緊張せねばならぬ。であるから價値わ積極的にわ欲望の強度より生じ、消極的にわ貨物によつて制限される関係に於て、欲望と貨物との間に発生したものである。しかしてえを測定する尺度わ、貨物の側にあるのである。しからば價値測定の尺度わ何であるか、これ経済学の重要問題であり、本書わ生活現象篇に於てえを研究するであらう。

第五　欲望わ他の欲望と交替される。

或る欲望の満足にわ大なる努力と犠牲が伴ひ、欲望の代價が其價値、即ち強度を超へることもあらう。この場合にわ、其欲望わ満足されず、其よりも容易に満足されるであらう安價な欲望へ、欲望追求の強度が移されるのである。こうした欲望の転換を欲望の交替性と名ける。例へば凶作で米が欲乏すれば、米に対する欲望が芋に対する欲望に交替される類である。

凶作で米が欲乏するとき、米に代わる芋の交替わ、犠牲即ち貨物の側の代價が、欲望の強度を超えて高すぎるから起るのであるが、場合により努力の側の代價が高すぎて交替が起ることもある。例へば急に雨降りとなり傘を探すが、傘が見当らぬとき、一寸した用事であれば、手当次第のものを被むつて用たしすることわ、誰にも経験があらう。此場合にわ傘を探す努力が用事の必要と雨にぬれる不快とに比べて多すぎるので、一寸の用事であれば、手当次第のものを被むるようになる。が遠方へ外出せねばならぬ

ほど重大な要件であれば、傘を探す必要が強大であるので、もし探して傘が見当らねば新しく購入し或わ借用しても、傘をさして外出するのに比べて、欲望の交替性を了解することができよう。

欲望の交替性わ、生理上の必要的欲望に付いて見れば欲望の原因となる飲食み存在する向、單に満足の手段方法に付いて変化が起るものであるも観察されよう。即ち此に掲げた例に於て、米と芋が交替されたのも、空腹の欲望を満す方法に付いての変化に過ぎわしも考へられる。有益的欲望についても、亦た誘惑的欲望についても、欲望の根元に存在する気持から見れば、單に手段或わ方法に付いて、交替が起ることも覚知する。例へば記録の必要あるとき、ペンが見付からねば鉛筆を使ふのも、欲望の交替に当る。が、然し往々にして欲望の起因にまで遡っての交替が、各種の欲望に付いて発見される。冬の日など、腹が減っても食物が見付からぬとき、焚火して気もまぎらすこともあるし、雨が降って傘がなければ、外出の代わりに読書することもあろう。

欲望に交替性があることわ、重要な結果も奇らす。或種の貨物が高價になれば、其貨物に対する需要が社会的に減じ、其に代わる貨物へ需要が向ふ。えわ自然の利用からいふても、また流行や習慣の変化なども、欲望の交替に基くことが多い。例へば我国の古代わ貴族の家でさへ板葺であり、徳川時代の中頃までも、江戸の真中に瓦家根の家わ稀であったが、瓦が低利に供給されだすも、瓦屋根が板葺や茅葺に代替し、最近でわ瓦よりも安價なトタン屋根などが多く見へだしたなど、家

屋に対する流行、又も習慣の変化によって欲望の交替が行われたと観察し得よう。

欲望の代替わ実わ欲望変化の一例である。であるのに特に代替性を掲げるわ無用であるまいか。なるほど欲望の代替わ欲望の変化に過ぎないかも、えを特に交替といふわ、観念の混雑を惹起するだけかも知れないが、單に変化といふだけでわ、欲望が代替さるることを現わし得ない為に、実際上の必要から、欲望変化の外に交替性あることを考へるが好都合である。変化と交替も区別して比較すれば、欲望の変化しいふわ欲望の発達を垂直線の方向に観察したものである。全一体の欲望が発達するとき、変化といふわ縦線的見方であり、交替といふわ横線的見方であるのである。なほ別言して判明にいふわ全一体の欲望が発達する絶対的の見方であり、交替とは欲望しいふものを抽象假定し、其を相対的の見方なのである。

分類わ学問的便宜に基き、又た自然物の持つ許多の性質の中から、其若干を抽出して法則とするも、学問的必要、別言すれば講学上の都合である。こしわ既に了解されたと思ふ。地球の表面を区劃して国や町何に区分するわ、山河等の自然にまることが多いにしろ、実際の便宜が其原因であるようにも、学向上の便宜が根本となってである。分類や性質の記述範囲が自然も定まるものであり、学向それ自体わ、人類の生活的需要に応ずるもので、特

に経済学わ人美生活の規範を研究するものであるから、必要のない観念迄
戯わ避けねばならぬ。が、しかし講学に必要な範囲の観念わ、判明に確定
し置き、不必要で不判明な観念わ之を排斥するだけの厳正を持たねばなら
ぬ。欲望の変化性以外に交替性を論ずるのも、こうした理由からである。
欲望の交替性を個々の欲望に付いての相対的観察であるとするとき、交
替性を広義に理解して、凡て欲望が変化する場合に、其変化を時間的に見
ず、之を平面的に観察して一つの欲望が他の欲望に移ることの凡てを、欲
望の交替と理解し得る。欲望の交替を斯く理解すれば、欲望の代償が強度
を超へる場合に限らず、広く欲望の相対的変化を交替と観察し得るのであ
る。本書でわ欲望交替の語を往々こうした広義に使用するであらう。
広義に欲望の交替を観察するとき、尚ほ二種の重要な欲望交替を発見す
る。一わ欲望が満足の途中に於て他の欲望に交替することであり、他わ欲
望が安逸に交替することである。
欲望わ起つた以上、必ず満足されねばならぬと予断してわならぬ。意識
の変化わ迅速であり、其変化わ激しい。甲の欲望が満足され終らずに乙の
欲望が起ることが、寧ろ常態なのである。しかしこわ欲望が競争して意識
の中で闘争する煩悶とわ区別せねばならぬ。煩悶の場合にわ、欲望が変化
する際、其交替が円滑に行かぬから起るものである。欲望の交替が円滑に
行けば、如何に激しく欲望が変化しても、決して争闘や煩悶が起るもので
なく頭脳明晰な人にわ、欲望交替が円滑に中かぬから、煩悶が起らぬが、頭
脳の悪い人にわ欲望交替が円滑に中かぬから、煩悶が起るのである。決断

流るゝが如しといふ判断能力の富んだ人わ、よく先が見へ少しも物に狐疑
遊滞せず、しかも誤謬が少ないのである。之を知的とばかり解してわなら
ぬ。其内容に欲望の交替といふ知識以外の意識作用が働いてゐるのである。
観察の不充分な人わ、欲望の交替を知識の作用とするかも知れないが、
知識とわ、前に定義した如く、事物の区分に伴ふ観念の把握と、事物相互
間に於ける関係の認識であつて、欲望作用自体わ知識でなく、知識以外の
人間性なのである。従て欲望が変化し交替することも、人間性直接の活動
である。が、知的判断が欲望変化の誘因となることがあるわ、云ふまでも
ない。しかし誘因となる知的判断と、欲望の変化そのものとを混同するわ
観察の不十分である。この点わ此以上に説明し難いから、よく味ふて考へ
られたい。例へば物の味や色わ、説明することができず、直接に味わねば
ならぬやうに、欲望其他の人間性それ自身の性質に関する説明も、単に理
解に端緒を与へる程度にしかできぬから、欲望其他の人間性の実質わ、直
接に翫味して認識されねばならぬのである。
甲の欲望が未だ満足されない中に、乙の欲望へ交替する幾多の事実があ
る。読書するにしても、一冊の書物を読み終らないで、他の書物を読み、
また時間を分けて数種の読書をすることがある。今日の学校の科目などわ
一を終へずに他を詰め込みつゝあるのである。食物にしても、一の品にて
空腹を満足し終らず、幾種もの品により味覚を交替的に満足しようとする。
所有欲望の如きに至つてわ、到底短時間に満足することができず、之を抱
きながらも、平素わ忘れてゐるかの如く、他の欲望の為に努力を捧げて満

足を買ふてゐる。しからば、斯様に交替された欲望が全く消滅したかと云へば、実わ意識の識域以下に尚ほ残存するを常としてゐる。

欲望が安逸に交替される場合も略々同様である。欲望わ他の物質欲望に依つてのみ交替されるとわ限らず、物質欲望わ、屢々精神的欲望によつて交替されることがある。読書なども物質的欲望といふよりも精神的欲望に近く旅行や遊戯も精神的欲望と見られるものである。こうした欲望交替の変態に、欲望から安逸へ移ることがある。

安逸わ欲望が満足された場合の陶酔とも見られ、強ち責むべきことでないが、欲望満足からの残影に陶酔する精神傾向の範囲を超へて、安逸の為に安逸するわ怠慢といわねばならぬ。しかも欲望わ満足されずにゐて、努力を厭ふ処から、直に安逸へ交替されるのでわ、無気力といわねばならぬ。

欲望にわ種類が多い。各種類を通じての欲望全体から云へば、欲望わ旺盛でなければならぬ。しかし単に肉体的物質生活の欲望に付いて云へば、物質的欲望の生理的必要と、使用欲望の有益的な範囲を超へて、例へば誘惑的欲望が旺盛なことわ、大なる人格的欠陥であつて避けねばならぬことである。なぜならば、欲望わ全一体として、意識内に発達するものであるが故に、物質的欲望の旺盛わ、精神的欲望の貧弱を意味するから、物質的欲望の為に意識を長時間に渉り領有されることわ必然に精神的欲望の活動を不能にする。であるから人間生活の全体より見て、欲望の総量わ旺盛でなければならぬが、物質欲望にわ制限が設けられねばならぬのである。しかし精神的にも物質的にも欲望の総量が不活潑である人わ、安逸が彼の意識を

支配してゐる。

安逸わ欲望状態でわない。欲望が活動してゐない消極的の状態である。しかし此消極状態が積極的の欲望状態に交替される性質があるから、往々安逸をも欲望と誤解されよう。けれども安逸わ消極的な怠慢状態である。そして安逸に似て非な状態わ睡眠である。

睡眠わ生理的に必要である睡眠わ疲労から来る意識性神経系統の休養であるが、安逸わ疲労したと否とに拘わらず、また意識性神経系統よりも、主に肉体性運動神経系統を休養してゐる状態である。であるから疲労しての肉体性運動神経系統の休養わ、睡眠と比較される程度に必要であるが、疲労せずして、又わ疲労から恢復されてゐるに拘わらず肉体を怠慢に置くわ無気力である。しかしこの場合に意識に十分な活動を与へて、精神的に欲望の満足に盡してゐれば怠慢でわないが、精神わ覚醒しながら、一定の方向に活動せず、肉体も亦休止してゐて、凡てが朦朧の状態にあるを、安逸といふのである。

小児期にわ、安逸わ稀にしかない。小児わ絶へず肉体を活動さしてゐる但し欲望が単純であるから、遊戯の程度にしか肉体わ活動してゐないが、大人を真似て何事か有意義なことをしてゐると思ふてゐるらしい。そして意識と肉体が疲労すると睡眠し、其間に少しも安逸わない。成人するに従ふて横着と怠慢が安逸を生みだす。安逸わ元来が肉体の疲労から来た休養であるが、休養する気楽さが怠惰を呼んで、安逸の為の安逸気分が濃厚に生育しだし、往々それが知識的後援を得て社会の習慣にさへなることがあ

る、新興国にわ斯様な気分わ少ないが、沈衰した亡国的時代にわ斯様な安逸の気分が全般的に濃厚となるものである。

欲望わ他の欲望、或わ安逸に交替されたとき、全然消滅すると思ふてわならぬ、欲望わこの時消滅せずに、識域以下に其強度が下つたのである。識域以下に於ける欲望を潜在欲望と名ける。

第六、欲望わ潜在的に残存して残存強度を持つ。

心理学上、意識にわ潜在意識といふものを認める。意識中の最も主要な欲望に、潜在欲望がないといふわ、むしろ心理学を無視した独断である。であるけれども、潜在欲望を一般心理学上の潜在意識から演繹して、不必要に其存在を假定するのでわない。潜在欲望わ物質生活に於ける人間性を観察する上に於て経験的に承認されねばならぬ処のものである。

潜在欲望が経験的に承認されると云へばこを奇怪に思ふ者もあらう。だけれども経験わ科学に関する一切推論の基礎であつて、漫然と他の学問から結論を借用することわ努めて避けねばならぬ。

カントの言葉にさへも、最も乱暴な假定さへも、超自然力に訴へるよりわ一層忍び得るといふてゐる。学問わ極端に云へば假定の累積である。経験と假定を交織りにしたものが学問である。といふ訳わ、前にも注意した通り、経験わ自然界の処々を、斑点的にしか映すことができない。その自然界わ永久に環流する波紋の渦巻である。が、人間の感器わ極めて狭い範囲に於て、波紋の処々と少しづゝしか映し得ないので、こうした狭い経験から映し得ない宇宙波紋の暗い全体を、我等わ解釈せねばならぬ。しかし

其解釈わ勝手な独断を許されず、何等かの経験を基礎にした推論であらねばならぬ。此推論の内質わ最正に云へば、必ず多少の假定を含んでゐるのである。であるから学問わ、経験と假定を交織して、組織と体系の極点に達することになるのである。

假定わ宇宙波紋の暗帯を説明するに必要であるが、独断的であつてわならぬ。宇宙波紋の暗帯を説明するに、経験上より推論して唯一の方法しかなく、しかも其唯一の方法を假定することによつて、暗帯を挟さんで生ずる一切の疑問が明瞭に解釈されるとき、其假定わ学問上の定説となり、假定でわあるが経験と同一の確実性が、我等の心理に湧き上るものである。経験とても、過去に於ける感覚事実の一致から未来を类推するものであるから、凡て假定程度の確実性しか持つていないことわ前述した通りである。知識とわ結局確実な假定であり、それ以上に絶対真理といふものわ、主観的な知識の持ち得ない客観世界の属性である。

学問上に重要な假定を構成さす基礎的経験わ微細な暗示から来るが普通である。ニュートンやダーウィンやダルトンやアボガドロー等の学者わ、こうした微細な暗示に最深の注意を押ひ、偉大な理学上の諸假定を完成し、今日の理学を成立せしめた。自然界の暗帯わ不注意者に気付かれず、又た鈍感な者わ説明を求めずに暗帯の世界を、カントも嘲ける如く超自然の所業などとしてしまう。けれども自然界わ、自然物と自然力から構成され、そこにわ超自然などいふことが、あり得よう筈がないのである。考へても見るがよい。過去に於て超自然から来ると思われたことわ、みな認識并に思

處の不足からでわなかつたか。最も乱暴な假定わ、この超自然力である。カントわえを最も乱暴な假定以上の誤謬としたが、超自然わ有らゆる假定の中で、最も乱暴な独断なのである。経済学の範囲に於ても、超自然の存在に超自然力わ絶対に否認される。

意識の奥にわ精神体があるとし決定さあつて、決して超自然の何物でもないであらう。経済学わ現実な欲望と、それを假定にさへも觸れるを要しないであらうとする。

補ふ潜在欲望の独自な假定の基礎に展開しようとする。

潜在欲望わ経済学に於ての独自な假定である。えを假定しなければ、欲望の世界の暗帯が継ぎ合わされず、えを継ぎ合わすに潜在欲望唯一の方法であり、しかも潜在欲望も假定するときの問題が明瞭に解決されるから。潜在欲望わ物理学に於ける引力説、化学の基礎的学説である。経済学に於ける最大の問題である價額も、潜在欲望を基礎として観察するとき最も明確に理解されるのである。

欲望にわ暗帯があるであらうか。確かに欲望にわ大きな暗帯がある。書商お君常震家の青年が、朝三時又わ四時に起きて、体力の旺盛な数時間を読書に研究に捧げるときのことを考へても、わ八時間以上も労働をせねばならぬ君等わ炭火を起して指先を暖めたいし見よ。雪の降る寒い朝であるから。君等わ炭火を作る五分間の労力によつて満足欲望する。この欲望わ枯枝を焚いて炭火を作る五分間の労力によつて満足が得られよう。それと同時に君等わ机に向ふて精神を統一し、静に読書や

研究を開始するであらう。これ実わ私自身の日課となつてゐる現実の体験である

炭火が作られて巧妙に手足を暖めてゐるし、精神を統一して一心に研究ができる。原稿を書く速度も早い。急慢から炭火が作られれば、精神が統一されます。冷いなあ、炭火が欲しいなあと思ふ欲望が、研究心を損乱して原稿を書く手の能率わ痩せ馬が重荷をつけて坂道を上るようにも鈍い。此種の事実わ潜在欲望の假定によつてのみ明瞭に解釈される。

炭火が準備されても、暖を求める欲望わ消滅しない。けれども其欲望わ識域以下へ退却し、潜在欲望となつて研究心を妨げなくなる。私わ外見に於て反射的に見へるほどに、絶へず炭火で手足を暖めてゐる。それわ暖を求める潜在欲望があるからである。絶へず炭火を破ぶられず。研究の能率が高いのである。がる欲望が容易に識域から退却せず、読書しながらも、研究してゐながらも、炭火を用意せぬときわ、暖を欲しがるからである。

暖を欲しがる欲望に絶へず襲撃されて意識の統一がみだされず、読書と研究の能率が鈍いのである。此場合に暖を欲しがる欲望わ決して意識を領有して居ないのである。もし其欲望が意識を領有したならば、いかな怠け者も読書を開始する前に或わ途中に炭火を用意したであらう。しかし怠け者にとり炭火を用意する欲望わ、努力となるまでの強度に意識の全体を領有しなかつても、であるから彼わ炭火を用意せずに読書を始めも、炭火を用意したい欲望わ萌し、又た若干の強度に達したが、途中で読書の欲望に性急な交替をしてしまつても、しかして読書の欲望が意識を領有し、彼わ読書の努力を開始し

たのである。此場合に暖を欲しがる欲望が消滅したものに見へるが。もし其欲望が消滅したものなら、彼わ精神を統一して読書の能率が高いであらうけれども彼の読書能率わ低い。假の精神わ統一されてゐない。何故であるかを彼わ知らぬが、假の精神わ動いてゐる。動揺してゐる。何物かに驚わされて、彼わ意識も統一することができない。此事実を如何に解釈するか。決して他に方法わないのである。読書の欲望が、意識線に出没してゐるのである。暖を欲しがる欲望わ意識を領有することができない。てあるから、しかし暖を欲しがる欲望わ意識線に出没してゐるが。しかし読書欲望わ絶へず暖を欲しがる。彼わ相変らず読書を続けてわるからである。だけれども暖を欲しがる欲望わ意識を領有しないから、炭火を用意する努力わ彼に起らないのである。でも彼にわ読書の意識が統一されてをらぬ。これわ彼に暖を欲しがる欲望が潜在欲望となつてあるのである。即ち暖を欲しがる欲望が意識の線に近く潜在的に存続し、其潜在欲望が不断に膨張し収縮をなしてある。彼が読書を開始した瞬間に、暖を意識線に出頭し又た没頭するのである。彼わ読書を開始した瞬間に、暖を欲する欲望が消滅し、又た読書してゐる間に再び暖を欲しがる欲望が発生するのである。もし其欲望が消滅し、而して又た新しく発生するものならば、其に従ふて読書わ能率よく進行し、また中止されて炭火を用意しようと努力に移らねばならぬのであるが。優柔不断な青年の心理わ絶へず鈍い読書をして、しかも炭火わ用意しないのである。こうした事実わ潜在欲望の存在を假定しなければならなくなる基礎的暗示である。しか

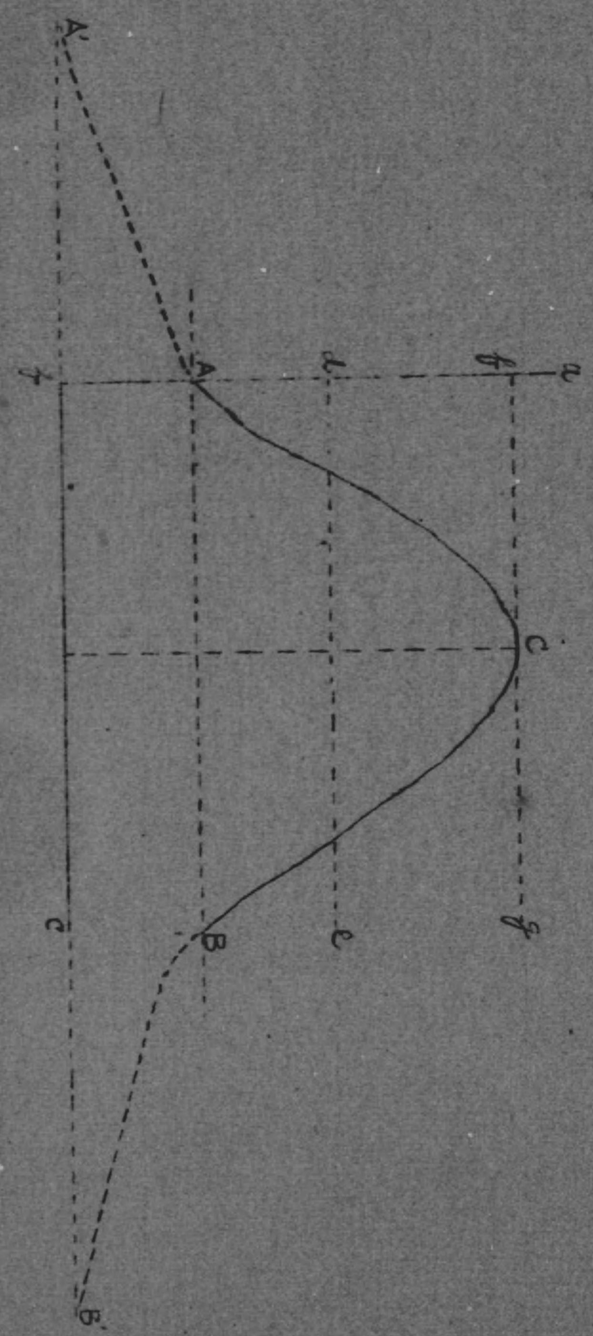
してこの種の事実わ日常生活に甚だ多く存在し、我等わ潜在欲望を假定するも不可避にせざるをえない。こうした潜在欲望や、意識の不統一等に関する一切の問題が明瞭に理解されるのである。それ故潜在欲望わ假定である。なぜならば其わ意識することができないからである。潜在といふのである。えを假定する学向上の理由わ尚ほ他にある。況そ発達するものわ、突然に生じ又た突然に消滅することわない。発達するものの生滅わ種子より芽生へて生育するものである。欲望が突然し意識に現われ、又た突然し消滅して意識界から去るも思ふわ、一般経験に違反した無理な考へ方である。そうした無理を考へる以外に方法がないときに限り、かいる乱暴な考へ方を、余儀ない假定して許されるであらう。けれども潜在意識を假定するときわ、かいる乱暴な考へ方をせめてもよいことになる。意識が突然し発生するか否わ、知ることの出来ない客観世界の事実であるから。これを突然に発生するし解釈するにしろ、やはり假定であり、又たえを潜在意識からの発達とするも亦假定であるから我等わ両假定の中から、より妥当な潜在意識の学説を定論として採用するのである。

意識が種子から芽生へたときわ、まだ識域以下である。識域以下で相当に発達して始めて意識に出場するし、また反対に衰弱するとも、意識から退場することになる。が、その時、意識わ即座に消滅せず、普通わ潜在意識として識域以下に存続して、残影を留めてゐる。欲望に付いても同様であ

る。我等が欲望の満足を喫い得るのも、満足によつて欲望が即死せず満足された欲望が潜在的に残影を曳くからである

一の書物を読みたい欲望わ、其を読み終わるか、又わ読むことを断念すまで迄わ継続するが、其欲望が絶へず意識を領有してゐれば、我等わ乾干になつてしまうであらう。幸にも読書の欲望が潜在的に退却して呉れるから我が愛する農村青年わ、朝食すると夕食迄耕作に精励し、夕食后は疲労するから、明朝未明に起きて読書しようと、安心して早く寝に就き、明朝未明に目醒めると、反射的と見へる迅速さを以て渇者が水を求める如く、即時に読書を開始するのである。潜在的に読書欲望が継続してゐることを認めなければこうした意識作用わ説明ができない。欲望が完全に消滅し、又た新しく類似の欲望が発生するものとすれば、前后の両欲望の間に、連続関係あることすら了解が困難である。潜在欲望わ種々な点から承認されねばならぬのである

我利な高利貸でさへ、所有欲望ばかりに終生を領有されず、睡眠もし、時にわ子供のことも考へよう。しかし彼わ睡眠の間にも、食事の際にも、子供の事等を考へながらも所有欲望を抛棄してゐない。幸にも彼わ所有欲望を潜在的に続けることを発見した。又た我等が精神修養をするのも、実わ潜在欲望の鍛練である。精神修養が積めば、現実欲望わ迅速に意識を領有して、躊躇なく努力の活動となり、又欲望が満足されると、忽ち識域下に退却して、更に新な欲望に意識を領有せしめ、其間に時間の空費がなくなる。しかし退却した欲望わ消滅したのでわなく、識域の下際に退却して、



次回の登場を待ち、潜在欲望として継続してゐるから、其欲望が識域に現われねばならぬときにわ、何等の顧慮なく、極めて迅速であるのである。かように潜在欲望の把握を修養するときわ、少しも精神の統一を破ぶらず、しかも欲望の消滅と新生とに要する途中の時間を省略して、人生わ最も有效に活動することになるのである。

現実欲望と潜在欲望との関係を表示すればその通である。

ab線わ欲望の強度を現わす。それゆへ犠牲線、或わ價値線と名けよう。bc線わ欲望継続の時間を現わす。之を時間線と名けよう。ACB線わ欲望曲線である。その中犠牲線外のA'A'わ潜在欲望に当りA'点に於て欲望わ発芽するが、A'b時間の間、潜在識域にあつて、Ab強度にまで発育するABわ意識線であり、aAわ識域、Abわ潜在識域である。それで、A'に発芽した欲望曲線がAに達するとき意識に上つて現実欲望となるのである。しかし未だ努力を惹起するほどの強度を持つてゐない。欲望曲線が意識線に達すると急速に発達し、普通ならばde線に達するとき努力を惹起するが、不幸にして犠牲に相当する貨物が手近になければ、欲望わ益々強度を高め、それに従ふて手近にない貨物に対する追求の努力を続けだす。しかし貨物が容易に見付からぬときわ、bg線に達すると共に、欲望わ遂に断念せられるであらう。尤もdbの途中に於て他の欲望に代替することもあらう。かく断念された欲望わ急速に衰弱し始め、AB線に達するまでわ、意識を刺激してゐて、尚ほ満足の方法を考へてわゐるが、AB線に達すると潜在欲望に変わり、普通わ無意識域に永く残影を存続し、全然放棄されて消滅する場合でさへも、BB'線わ緩慢に衰弱するのである。欲望曲線の形状わ欲望各個に付いて相違する犠牲の價額、従て貨物の價額わ、この欲望曲線に対応して重大な意味を有するものであることわ、生活現象篇に於て述べるであらう。此にわ欲望曲線の経済学上に於ける意義と重要なることを注意するに止める。

尚ほ一言を加へて置く。それわ欲望曲線わ物質欲望に止まらず、一切の

欲望に適用されることであり、修養の大なる目的の一わ、欲望が意識に現われたとき、迅速にACが発達し、又た迅速にCBが退却し、其間に無用の時間を空費せめよう。意識の活動を正当な欲望に集中して活発にし、少しの澁滞も、狐疑煩悶も、欲望相互にわ何等の争闘がないように、常に意識を各瞬間に於ける最も必要な欲望に領有さすことである。古来精神の統一といふのわ、えを指すのである。意識が乱れ煩悶するわ、意識に二重或わ三重の現実欲望線が低迷して存在することを意味する。即ち欲望曲線が單一でなく、二重にも三重にも交錯するのである。また修養が積むに従ふて、無意識界へ無数の欲望を貯蔵し、意識の統一を妨害せずに、一の努力が終われば、即時に他の努力に移るよう、仕事の段取、又わ生活の順序を整頓して置くことゝなる。俗に意思が鞏固だといわれる人わ、或る中心欲望を完全に満足される迄、潜在的に常に把持してゐるのである。靜穏わ多くの希望(アンビシアス)を持たねばならぬ。希望を持つとわ、多数の希望を意識界に抱いて、常に懊悩してをれといふのでなく、正当な無数の希望を潜在欲望として確く把握し、其を貫徹する方法に付き不断の考慮を拂ふて、絶へず機会を狙ひ、廿時も目的の貫徹を忘るなと教へる訓言なのである。

第七、欲望の統制。

或る瞬間に於ける現実欲望わ一種であるにせよ、欲望わ変化し交替せられ、多種多様である。しからば多数の欲望が雑然と存在し、其の数学的合計が意識或わ精神といふものであらうか。機械的唯物論者わ斯様にも考へんとする。けれども彼等の多数わ結局自説を放棄せねばならなくなつた。

今日に於て唯物論を信仰する者わ理学者よりも、理学を知つてゐると軽信する読書階級である。

十九世紀に於ける独逸唯物論の最も偉大な主張者わクツオルベであつた。彼わ徹底して唯物論を主張して云ふたのに「外界から感官と神経とを経て脳髄に伝わり来るものわ本質上同一の運動である」。「各種感覚の差別わ運動が各種の機官に起させる強度の差別に外ならぬ」「意識の統一性わ脳髄内の運動が再び脳髄内に循環するといふ事実によつて説明される」と説明し、彼わ完全に唯物論を組織し得たと思ふてゐたが、斯様に意識現象を説明する結果を推究して行くと「一定の強さと一定の形式との運動が起つた場合にわそこに必ず意識も存在しなければならぬ」、従て自然わ普く生命と意識を有たなければならない結論になると気付いた彼わ、唯物論の代表的主唱者ビュヒネル等と共に、遂に唯物論を抛棄し、世界を一個の原理より説明することの不可能を承認し、「吾等わ到底分析することの出来ないものさ要素とする。此等の要素わ、物質的原子、有機的勢力、及び心理的要素であり、三者間にわ調和的共働が生じ、自然界の合目的統一を実現する」と自説を変更したのである。

唯物論わ嘗てえを主唱した独逸の生物学者や生理学者自身に依つて抛棄された。今日の生物学者并に生理学者わ、学問の範囲を限定して、自然理学の立場から精神作用の説明に深入りすることを避けてゐる。自然理学でわ精神作用わ説明のできないもの、即ち自然理学の唯物的観察のみでわ、精神現象を研究するに不適当で精神現象わ独自の方法による研究に委さなければならぬを承認してゐる。自然理学と生物学又わ生理学の基礎的理論に深い理解を持たない軽信な読書階級のみが、唯物論といふものに取り付いてゐる。

嘗てわ唯物論を唱へた自然科学の両指者さへ、物質的原子、有機的勢力の外に、心理的要素を承認した。心理的要素の何者であるかわ、人間学に向わねばならぬ。其の結論として精神体の存在を承認せねばならぬことわ前にも説明した所である。心理的要素を代表しての精神体が承認されるとき、一切の欲望わ精神体の性質もしくわ傾向であり、えを人間性と総称して差支のないものである。しかるとき欲望わ多様でも、結局わ精神体の傾向として表現するものであり、従て統一した全一体を為して発達し変化し交替もすることを、明瞭に説明し得られるのである。又た欲望が潜在して長時間に亘り固く把握されてゐることも、其を把握する精神体があればこそ、始めて真に了解され得るものなのである。

水にわ多様の性質があり、木にも亦多様の性質がある。此等多様の性質が集合して、或わ水を為し、或わ木を為すのでなく、水あり木あり、そこに多様の性質が統一して把握されるのである。宇宙万物に一貫して此事実が存在すると承認するとき、欲望といふ人間性も、実わ精神体の持つ自然傾向、もしくわ性質、即ち精神体の属性であり、逆に此等の無数な欲望或わ意識が集合して、人間的存在を構成すると考へることわ無理である。

欲望が精神体の属性であり、精神体が多様の欲望を把握するとき、多様の間に統制が存在するわ当然である。我等わ幾多の家具や必要品を所有す

る。机の上を見よ、書架を見よ、押入を見よ、台所を見よ。如何なる貧乏世帯でも、車に一杯ほどの種々な道具があらう。しからば雑然たる此等の道具が集合したものが、我等の家にあり、其主体の下に多様の道具が、把握され統一されてゐるのである。我等の欲望も亦た多様であるが雑然と集合して我等を組織するのでなく、我等が之を統制し、整理し、しかして把握してゐるのである。でなければ、欲望を鍛練する意義も存在しなくなる。

欲望が統一され整理されるから、多様のものを取捨選択することができる。欲望の其が発展しを生活方式を取捨する所に、規範経済学も成立するのである。従て経済学も雑然たる貨物の学でなく、貨物が家に於ける道具の如く整理されて、統制された欲望に応じ、社会の物質生活を完成しようとする。人類生活の規範理学なのである雑然たる欲望わ、こうした大なる社会的人類の物質生活の大局から、統制されるものであることをよく理解しなければならぬ。もしそうした統制のない欲望が存在すれば、我等自身の中に欲望が闘し、我等の意思の自由わ混乱させられる。この争闘も混乱わ、修養によつてのみ避けられる。我等わ修養せわはならぬ。修養なのである。

第八、物質欲望わ二次的である。

欲望わ多様であるが、人類の社会的物質生活の大方針によつて統制される。

てゐることを述べた。しかし社会以前に個人があり、個人が社会生活をするものであるから、個人から見れば社会わ生活の方法であり、社会わ個人を単位とし、個人の為に存在するものでなければならぬ。しからば社会生活の為に個人わ無視されず、個人によつて社会生活が形成されねばならぬ。

社会にわ物質生活わあるが、精神生活わない。最正に精神生活を指示すれば個人にのみ存在するものである。であるから、社会より見ての生活批判わ、物質生活にのみ堕り易い。しかし社会の為に個人を殺してわならぬ。社会わ個人の為に、個人を単位として成立する。社会の基礎として個人を見うるとき、物質生活の外に精神生活が観察される。しからば、物質生活と精神生活との関係わ如何にあらうか。其結論として物質欲望わ二次的であり、精神欲望とわ何であるか。えを詳細に述べることもわ経済学の範囲外である。人間学の結論を取つてえを簡単に云へば精神欲望も多様であり、其中の最根本となるものわ、人生の目的とも云われるものに相当する。何を根本となし得るか。えわ学問が決定し得る処でなく、各人が自己の性質傾向も味ふて、直接に選択決定する外わない。知識学向わ屢々云ふ通り、事実を認識し、事実相互の関係を見極めるものであるから、欲望の取捨選択をするわ、知識や学向にできないことであり、其を為すわ、人間自性の直接認識でなければならぬ。学向わ斯く取捨選択された事実を発見し、又た記述するであらう。

人生の中心目的として各人わ何を撰択するか、それわ精神体の傾向に向

ふ外わない。精神体の自性即ち傾向が、意識に作用して欲望選択の表面的事実となるのである。精神体の傾向とや、肉体欲望や、物質欲望や、また名誉や支配等の社会的優越感や、或わ知識や芸術等の類でもないのである。此等のものわ凡て必要から生じた二次的派生の欲望である。

精神体の自性傾向わ必要を超越し、必要が行着く処の目的地でなければならぬ。目的わ必ず喜びであらう。なぜなれば、自性に従ふことわ、無上の不倫快であるから。喜びといふものを考へ得る限り、それわ必ず精神体の自性に従ふ現実のものでなければならぬ。しかし其喜びの状態わ、種々な努力の過程に依つて遮ぎられるであらう。この努力の過程わ必要である。やへに必要わ喜びに取り違中の手段なのである。また喜びわ必要にとり、行着く最後の目的なのである。であるから必要にわ必ず目的がなければならぬと同時に、目的にわ必ず手段が伴ふものである。

自然現象わ必要でもなく、また喜びでもない。人生の現象のみ独り目的を持ち、また喜びである。やへもすると自然現象に目的が発見されぬからしいふて、人生にも目的わないと速断するが、こうした速断わ人生を知らざる誤謬に出る。

自然の万物にも自性があり、傾向がある。やへたもし自然に意識があれば水わ落下するとき喜びを感じたであらう。ぜひにも、自然にわ意識がない。従て喜びも感じないのである。自然にわ自性あり、傾向わあるがそれだけである。人間にも意識がなければ、水の如く石の如く唯だ落

下も、凡の如く細の如く徒に舞ひ上るだけであらう。人間にわ意識があるやへに人生わ喜びを感ずる。しかしても喜びわ、自性の満足が圧迫されて阻害されるときに不満快が起る。

目的もいふ白業が無ければ、何にても代へうるかよい。私が目的もこれも人間の自性に依ふことにより、人間の意識に起る喜びであり、歌舞伎芝居わ人間固有の傾向を其儘に活躍する状態を人生の目的とわいうものである。吾びや其時に不可避に味わい得るのである。

運動し満足されるのでもなく、喜びわ感覚である。一切が感覚こそ精神体の人生の目的も具体的に指示すれば、感覚である。喜びわ感覚であり、人生の目的も自然傾向が現実に活躍するものである。しかるに感覚に対する観察のもはふる感覚のみにわ代してない。不快感も行ふもあり、感覚わ下すから感覚の中にわ快感も行ふもあり、不快感もあり、感覚わ夢う利益の心理作用でのつや、世の中の悲情もいふ凡ての現象を人生の目的とするものである。既に目的が心理学を教へられてゐる。

受取るこもわ、夢たも想像し得ない。

目的である。

度も話へも感覚にわ不倫快なものがあり、しかし倫快も同様であらうか、不倫快わ目的でないからうか、不目的。しかして提出する感覚わ肉体的のものであり、肉体の圧迫から来る感覚でもない。外界から来る感覚、人自然から来る感覚、人生の目的内容もあるのである。しかして其ホモく喜びであり、また実現なのである。

ある。

感覚の此さを肉体的と俗識では思ふてゐるのは[illegible]誤で有る。宇宙に於て、大自然から来る処の感覚を美観と名ける。美観とは[illegible]者に取り了解し易いと思ふからである。しかし美観とは何から進来するかと、大自然と人間との間に創造される感覚とはいふ外はない。自然は不断に波動の渦巻をであるのである。人間は其渦中に在て之を持って共鳴する。其共鳴を言すれば大宇宙に対する共感の感覚であり美観なのである。即ち此美観なのであり、感覚であるのである。美観としての感覚は大宇宙の波動と共鳴して、我々の創造する意識であり、肉体的ではなく物質的でもなく、社会的でもない。[illegible]宇宙の物質ではあるが、波動は物質としての大宇宙を活動する自然の傾向であり、我々の精神体も亦た物質であらう。[illegible]も大宇宙の活動に共鳴する美観は我の精神傾向であり、共鳴活動なのである。しかし此[illegible]肉体が共鳴するのではない。また神経系統も単に波動の伝達者に過ぎず、神経系統を通じて大宇宙の波動に共鳴して、我の側面に美観を創造するものは我の精神体なのである。人生の目的とはこの美観の創造者としての我の精神体を完成して、永久不死に大宇宙に直面することである。

我の精神体が完成されるには、種々な肉体的、物質的、社会的、知識的芸術的の修養と条件が必要である。経済学は其中での物質生活を研究し、我の精神体を完成するに必要な学問なのである。

目的は必要の出発点であり、また到着点でもある。必要を知って目的を

忘記する人は、必要でないものを無用とも考へるが、必要とは果して何物なりと自問自答するとき、必要から目的を奪ふて果して何等かの残存物があらうか。必要は目的に追従する相対観念である。目的を放棄せば、必要なものを消滅することを反省するがよい。例へば富士山へ上る目的を定めて[illegible]、吉田口又は須走口から、[illegible]登山を開始するとしよう。金を出して汽車の切符を買ふことも、宿を取ることも、[illegible]ることも等は必要であるが、こうした必要は決して[illegible]喜びではないのである。富士の山頂に達した時に味はふ[illegible]であらう。

人生の目的を[illegible]ではならぬ。人生の目的は人間の完成[illegible]精神的完成と[illegible]大宇宙を実感して美観を創造し[illegible]人生の不断にも目的を達するには、まづ肉体の[illegible]物質生活を正当[illegible]必要に[illegible]、経済学は[illegible]規範と呼ぶ[illegible]を出発として[illegible]物質欲望は、自己完成の美的精神欲望[illegible]、二次的な必要なものなのである。

五　各種物質欲望と其共通性

[illegible]種々な[illegible]一等に関する八種の共通性は、各種の物質欲望に[illegible]ある[illegible]消費[illegible]使用其他[illegible]物質欲望[illegible]生活の[illegible]現れ[illegible]経済生活の諸現象を生ずるのである。[illegible]の消費や使用や交換等は、欲望としての消費や使用や交換等である

区別されねばならぬ。本書に於てわ觀念の混乱を生ずる恐なしと思ふ場合にわ、商業に消費、使用、交換等の文字を使用して、夫々の場合に於て或わ欲望、或わ生活現象を指称せしめるが、觀念の混雜を来す恐れありと思ふときわ、消費欲望使用欲望、交換欲望等の文字を、消費生活、使用等と、交換生活等の文字を区別して使用するであらう。

生活現象としての消費、使用、交換等についてわ、生活現象篇の記述に譲り、此にわ欲望としての消費や使用や交換等が持つ目的を調査しようと思ふ。但、消費のみ、使用のみ、交換のみ等に関する欲望の特殊性質わ、欲望と無物との生活関係に緊密な関係を有つが故に、生活現象の論に譲り、此にわ各種欲望と共通性との関係を述べるに止めよう。

(1) 消費欲望と共通性

消費欲望わ最も根本的な物質欲望であり、肉体組織の消耗を補充する所に、他の欲望から区別される特異点が存在するが、しかし消費欲望の全部が肉体組織の消耗を補充する訳でわない。消費欲望の中にわ、燈火の如く有無的に役立つものもあり、また酒や煙草の如く誘惑的なものもある。消費わ必ずしも肉体組織の消耗を補ふものでわないが、肉体組織の消耗を補ふものわ必ず消費的である。なんとなれば、貨物を変形せずにわ、そこに肉体組織の一部として、肉体組織の消耗を補ふに役立たし得ないからである。之に比して使用欲望わ、衣服にしても、家屋にしても、肉体組織の消耗を防ぐに役立つものである。

肉体組織の構成わ、人により多少相違する。具相違は気候や体質からも来るであらうが、平常の食物から来ることも多く、肉食を常習とする人わ、那寫倫塩の過剰する体質となり、菜食を主とする人わ、反対に加里塩の過剰する体質ともならう。そうした体質に従ひ、肉体組織の消耗を補ふ貨物にも相違があらねばならぬ。であるから消費欲望も人により相違することを免かれぬが、体質に相違あり、[illegible]組織わ類似してゐるから、必要的消費欲望の個人的相違わ他の欲望に比較するとき僅少である。[illegible]等の差異から、衣服や住居等に関する顕著な相違が生ずるのである。

[illegible]

[illegible]

は偽りてなり（方丈記）と云ふは言語を主張するのである。
必要的消費欲望は高度な[illegible]
[illegible]
[illegible]往々例外があつて、他を食通家も称する飲食を道楽事にする
人々がある。彼等は生きる為に食ふ[illegible]
食ふ為に生き、食ふ為に[illegible]生理的に健康
を損し、甚しきは生命を失ふ[illegible]
も貴族の宴会に[illegible]飲食物を[illegible]
[illegible]飲食は必要欲望
ある[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
神体の[illegible]生活にも[illegible]味覚は一[illegible]客観して、之を人生目的
の内容と見ても差支ないが、肉体生活の途上に於ては、味覚には貪欲が伴
ふてゐて、単に甘みで味はつて味覚を楽しむだけでは物足らず。喉を通して

も味ひ、胃腸に入れても見なければ満足しなく我等の肉体が傾向付けられてゐて、ローマ貴族の如く、之を一次的の喜びともするには、暴飲暴食からの生理的障害を覚悟しなければならぬ矛盾がある。ゆへに生理的健康上の必要から、飲食は統制されて、肉体組織の消耗を補ふ二次的な必要欲望と解釈しなければならぬ。

味覚は喜びであるが故に、飲食は衛生上から統制されるが、之は物質生活に重要な結果を齎らすものであつて、人口と食糧問題の関係には特に大きな影響を与へる。であるから経済学の範囲内では、飲食は二次的な必要消費の生活方式と観察し、之を味覚という一次的な宇宙未観の[illegible]言ふことは出来ない。味覚を一次的な宇宙未観を見るは物質生活から[illegible]へ、むしろ精神生活の区域に入るのである。

[illegible]精神生活と物質生活との境界線も、実は暖昧である。恰も胴と[illegible]議論があり、両者を動物と植物の区劃が判然せぬように、境界線に[illegible]しきものは、判然と区別し得ぬが、人為的分類に通け難い、両面に[illegible]ある。精神生活と物質生活についても、味覚の如く境界線上にあつて、甚だ区別し難いものがある。であるから、食通家をしてローマ貴族たらしめる錯誤へ往々にして我等の頭脳に浮び上るのである。しかして、かうしたる錯誤は味覚のみに止まらず、嗅覚でも、触覚でも、種々なる欲望生活に於いて、屢々起るであらう。

個々の生活事例に於いて云へば、物質生活か、精神生活か、区別し難いこともある。また、例へば読書は、書籍といふ貨物を使用する点から見れ

は物質生活であるが、読書して知識を獲得し、或わ研究することわ、精神生活の部類に属する。逆戻りして味覚に付いて云へば、食道楽が欲する貨物の消費わ、誘惑的物質生活であるが、その貨物を食道楽して味は味わ、精神的であらわれならぬ。けれども、此種の精神生活わ、純粋なものとなく、貨物の消費を条件とし、其を混濁してゐる。真に美観といふ。混濁しない純粋絶対の精神生活に限られる。

斯様に考へれば、物質生活と精神生活とわ、混乱の中にも、大体区別が得るであらう。両明に云へば、物質生活とわ、貨物の消費を使用に関係するもの、精神生活とわ、消費や使用の関係的努力や、貨物の代償的様性に傾着せず、自然と我との共鳴関係に於て、我の側面に至する意識活動をさすのであるが、かように言葉でわ判然と区別し得るが、現実にわ可なり混雑してゐるのであるが、経済生活わ、消費や使用に関係する関係的努力と、貨物の代償的様性を対象とし、其中でも消費欲望わ、生理的に必要なものを主とすることを了解し得ると思ふ。

(2) 使用欲望と共通性

使用欲望わ消費欲望と対立して物質生活の二大分野をなす基礎的のものである。使用欲望と消費欲望の外に、交換、借用、所有の欲望を区別し得るが、此等わ消費または使用の手段として派生した欲望である。

人間性全体から通観するときわ、精神欲望の中でも、自然に対する共感美観のみ、最も根本的であつて、人生の目的と称すべきものおえであり、

知識や藝術等の精神欲望さへも、二次的なものである。消費や使用の物質欲望わ、この知識や藝術に対し再び二次的であり、最后に交換借用等の関係欲望わ、消費や使用に対し二次的となるのである。

使用欲望わ消費欲望と共に、物質生活の基礎的欲望である。而して其にわ必要的なものと、有益的なものと、誘惑的なものとがある。衣服と居住わ、必要的な使用欲望の最も重要なものであるが、衣服にしても居住にしても、実際わ必要以外に有益な部分、或わ有益以上に誘惑的な部分を持つてゐる。使用欲望にわ、衣服や居住に限らず、有益的な無数の種類があり、種類も数量に於て、決して消費欲望に劣らぬのである。

使用欲望の中でも、必要的のものに付いてわ、消費欲望中の必要的なものに付いて述べたと大体同一の性質を持つてゐる。故に云へば、有益的なことであり、衣服も省略する。使用欲望の特色といひ得るわ、有益的なことであり、衣服も居住も単に体温を保つ点から云へば、穴居して蒂や獣皮を被てゐてもよいが、今日の文化生活に於ける衣服や居住の実際を見ると、必要的な部分わ、誠に僅少な一部分に過ぎず、極端な貧民窟を見ても、必要的の部分よりも有益的な部分が多いのである。例へば、台所の設備、入口の設備、柵、押へ等わ、生理的の必要よりも、経済生活の便利を主とするものである。最も生理的に必要な居住でさへ大部分わ有益的であると見れば、使用欲望の中心わ必要よりも有益であると、有取するに困難わあるまい。従て此にわ有益的欲望としての使用欲望が持つ共通性を考察しよう。其考察わ消費欲望中の有益的なもの、并に誘惑的なものにも適用さ

るであらう。

一之共わ欲望わ消費に付いても個人的に相違することわ、比較的に少ない。有益的使用に付いても亦た必要的欲望の個人的相違わ比較的に少ないが、有益的欲望となると、個人的に相違することが多くなり、誘惑的欲望となれば個人的の相違が最も著しくなる。読書家わ机其他の書斎設備を有益的欲望として持つが、運動家わ種々な運動器具を有益的欲望として持つ。但し大人と子供とでわ異にせねばならぬ。婦人にわ衣服装身具等が有益であり、青年にわ昂銭の様な有益となる。進んで誘惑的欲望となれば、其個人的相違一層甚しく、全然夢にも達しない人さへあれば、己れを忘れて其に耽溺する人々もある。而して此等の有益的並に誘惑的欲望わ、習慣による相違の外、流行によりまる特別な變化性と交替性とを持つてゐて、之と個人の興味から見れば時代の大勢に従ふ流行もあり、又た其に逆行して新奇を衒ふ流行もあるのである。衣服の形やもとにしても可なり新奇を衒ふ変装もあり、けれども人わ習慣を超越することができず、よし習慣を超越しても個人によりて異つてゐても、実わ単に新奇な流行に従ふ程度に過ぎないのである。

必要的消費わ最も速に潜在方向へ退却する。必要的使用も亦た同様であり、有益的使用欲望も此等に劣らず潜在方向への退却が速い。之わ有益的使用も亦た必要的欲望と同様に毎日の慣行となつてゐるからであると同時に精神的な或わ其他の欲望の手段であるからである。が誘惑的使用になると、潜在方向への退却が緩慢であるばかりでなく、退却してからでさへ意識に残影を止めて、其中に忽然もしてゐて、しかも安逸への交替が起り

易いのである。

使用欲望の強度わ、必要的使用であれば、消費欲望と区別のないほど鈍角形に高調されるものであるが、有益的使用の強度わ犠牲線が高く上らず、誘惑的使用ともなれば、欲望曲線わ最も平調な鈍角形を呈する。それわ潜在方向への退却が緩慢なからでもあり、また潜在識域内に於ける発育も消滅も優長で弛緩であるからでもあると共に、強度の犠牲線が最も低く、多くの努力や犠牲がいるときわ、其欲望わ放棄されて、より犠牲の少ない他の誘惑的使用と交替するか、又わ安逸と交替されるからである。賭博とする者などわ、かなり危険を冒すから、強度の犠牲線わ高いかと思われようけれども、賭博者本人に取つてわ、張番などをさせ、絶対安全のつもりで楽しんでゐるので、強度の犠牲線わ高くない。此等醜行者等わ人前さへ憚り、人に見られるだけでも其欲望を放棄する位に、実わ強度の犠牲線わ低いのである。

必要的使用並に有益的使用にわ、潜在強度が殆んど不断に続いてゐると看取するに困難わあるまい。使用わ消費と異なり、犠牲貨物を最初に準備すれば、続いて長く欲望満足にえと充用し得られるものであることと、前述した。であるから使用にわ絶へず対象貨物を所持し保存してゐなければならず、所持や保存わ使用欲望が潜在識域に宿つてゐないと、怠慢がちなるものであるから、必要的或わ有益的使用わ潜在欲望の形で、不断な継続してゐることを容易に了解し得られるであらう。問題わ誘惑的使用に付てであるが、之に付いてわ興味ある観察が下される

娯楽の如き誘惑的使用わ、平素わ働いてゐて、時々気晴らしをすればよさそうに思はれる。けれども現実わ反対である。酒わ酒を呼び、劇場わ観客を引寄せる、といふ意味わ、娯楽の如き誘惑的欲望わ、退却した后でも潜在識域に残留する。従て仕事が済んで、身体に困ができると、其娯楽の欲望が潜在識域から頭を持ち上げ、心が其方へと行つてしまう。其時に欲望を統制して、読書又わ、他の高尚な娯楽に向ふならば、潜在識域に於ける悪い娯楽欲望の残存強度わ次第に衰弱するから、暇が出来ても心わ次第に其方へ向わなくなる。けれども暇ができたとき、有意義に欲望を統制することをせず、潜在意識から頭を持ち上げた悪い娯楽へ、心のまゝに意識を緊張さすならば、其娯楽が再び潜在識域へ退却した后に潜在識域に於ける滞在が濃厚となり、そうした具合に屢々同じ娯楽を繰り返へしてゐると一定の時間が来れば仕事も手に付かぬほどになるであらう。娯楽以外の誘惑的欲望に付いても、こうした事実が一般的に存在してゐて、人間生活に取り大きな影響あることである。従て欲望を統制するにわ、必要なもの、有益なもの、精神的なものを潜在識域に堅固に滞在せしめることを努め、誘惑的なものわ、時々の慰安としても、平素わ潜在識域に於ける其残根を留めさゝないように、また出来れば安逸や誘惑的欲望に向うことを、罪悪として不愉快に感ずるほどに、欲望の統制を鍛練しなければならぬ。之を精神修養といふのであるが、それわ社会的に有益なる諸多の欲望を積極的に潜在識域へ濃厚に把握することによつて、目的を達することができるであらう。

使用欲望も本を二次的であるが、精神的に自覚しない者わ誘惑的使用を人生の全部でもあるかのように誤解する人がある。そうして彼等わ金殿玉樓の中に安逸を貪り人生の目的を達したなどと、せゝこましく微笑してゐることがある。小さな優越感や、独りよがりの支配慾や、さてわ所有欲望などが発育を始め、本来手段の手段に過ぎないものや、慰安程度にしか意義のないものが、人生の中心目的に据り込み、無自覚であるも往々にして貴重な人生が、無意味な誘惑的欲望の奴隷になつてしまう。

〔3〕間接欲望と共通性

生産、交換、借用及び所有の間接欲望わ、人により相違する。といふよりも、此等の間接欲望わ、消費か使用かの手段として発生するものであるから、物質生活の個人的差異によつて、当然に相違を生ずるのである。例へば自給自足を主とする中農以下の者に取つてわ、生産欲望のみ盛であり、交換欲望の範囲わ狭いが、大農法によつて単一種類の大量生産をする農家、并に工業的労働者等に取つてわ、生活必需の殆んど凡ての貨物を自己の生産によらず、交換によつて得なければならぬから、其代償として貨物の生産欲望と共に、交換欲望の範囲も広く、交換わ非常に大なる問題となるのである。又も収入が少ない者わ借用せねばならぬ境遇に置かれるが、収入の多い者わ借用欲望など持ち合わさず、其代わり強い所有欲望を持つこともあらう。

間接欲望わ二次的であるが、所有欲望が習慣づけられると、潜在識域に

於ける其残存強度が固定し、之に精神的人生観の欠乏が加わるとき、所有の為の所有欲望が急激に白熱して、所有することしか、人生の目的とも満足とでもあるかのように誤解し、其が一次的本質的のものに変化されることもある。が、向接欲望わ本来二次的であり、従て交換にしろ信用にしろ、欲望が満されるとも、尚ち衰弱し或わ交替される性質のものである。

向接欲望の強度わ、それが消費や使用の本質的欲望の手段であるから、対応する所の消費や使用欲望の強度に随従するものであり、消費や使用の本質的欲望と離れて、単独に生産しが信用しか交換しかに伴いての欲望強度や、絶度曲線も右へ離いやうであるが、生産にしろ交換にしろ、信用にしろ何等かの特別な努力と犠牲を要し、従て犠牲線上に於ける此等向接欲望の高さも強ち一致するものでなく、特に交換と前提しての生産わ、一切の生活需要貨物も獲得する代償も生産するものであるが故に、顕著な鋭角形、或わ尖頭形さへも為すであらう、又或わ尖頭形さへも為すであらう、又も異なるを思ふしき、所有の為の所有欲望にわ独自の強度と強度曲線があるも想像し得るのである。

生産や、交換や、信用わ、消費と使用の手段であるから、欲望の統制に付いても、之に対応する本質的の消費や使用欲望の統制に従ふて、生産や交換や信用も本た統制される筈であるが、尚ち仮令二次的にしろ、生産も交換も信用も独立しも欲望とし得られるから、二次的であることを理由に、種々の性質も本質的の欲望へ返還することわ出来ない。特に欲望の統制に付いてわ、消費も使用の基礎的欲望に関するもの以外に生産や交換や信用や所有等に対する其強度が大なる問題がある。しかし其講究わ生活方式篇に譲ることゝしよう

六、能力の意義

前にも指摘した通り、物質生活に現われる人向性わ欲望と能力との二者である。物質生活に現われる人向性も、欲望と能力とに区分するわ、学向研究の便宜から来る人為であり、尚ほ詰めるも、其区分界線わ絶対しいか、顕著なものに付いて云へば、消費や使用わ欲望に当り、因体の労働や勤労わ能力に当る。

消費にしろ使用にしろ、只て欲望が満足されるにわ、労力と貨物の犠牲が必要である。それ故欲望といへば、又ず因体の労働や勤労を聯想し、また労働わ欲望に伴ふて起るものであるから、欲望も云ひ能力も云ふも、結局わ全一体の人向性を、異なる方面から観察したものに過ぎないであらう。実に其通りである。消費や使用を欲望と統称し、因体的或わ精神的努力を、能力と統称するも、全く学向の便宜に外ならぬ。だから区別わ人為であり、常に不十分を免がれぬが、学向研究わ斯かる不十分な基礎に立つて顕著な特性を指し出し、其向に理論を構成して意識以上の世界さへも説明して行くものである。出発点が不十分であるからこそ学向の慣値がある。出発の時から、一切万事明瞭になつてゐたら、学向しいふものを待たずに、宇宙人性の一切わ、鏡に映る自己の姿を見る如く判

明であつたであらう。けれども、我等に映る宇宙人生が、あまりに多く曇つてゐるので不十分ながらもえを分類し或わ綜合し、其間に発見される特異点し美同点を出発にして、複雑な学問が組織され、不明瞭な宇宙人生に、整然としたを説明を与へるようになるのである。

欲望と能力とわ、顕著な事例を取つて見れば、明瞭に区別し得る確かな人間性の異なる方面であるが、両者わ現実にも混乱してゐて、欲望と切離して能力を考へることわ出来ず、又た能力を切離して欲望のみの存在を識認することも困難である。両者わ緊密に結合し、全一体の人間的活動を為してゐる。而して欲望と能力とわ、種々な点で区別し得るようにも見へるが、其等の区別の標準も、実わ甚だ瞬昧である。例へば欲望わ動機となるもの、能力わ此動機から起る活動だと云わうとしても、欲望自体が既に旺盛な意識の活動であるから、単に活動の一点より、欲望と能力を区別することわ不可能となる。欲望わ燃へてゐる、最も静と思われる視的美観でさへ、一秒間に数百万回の外界振動に共鳴する神等自身の意識活動なのである。余りに多く活動する為め、却て静的と誤解されるほど激しく凡ての意識わ活動してゐるのである。

また欲望を動機として見れば、能力わ手段に当るものであるが、しかし欲望の中にも、他の欲望の手段となる二次的のものが多い。精神的欲望から云へば、一切の物質欲望わ、手段に過ぎないから、えも欲望と能力を分つ区別の特性とするに足りない。

かように考へると、欲望と能力とわ殆んど区別の付かないものゝやうに

も見へるが、しかし消費や使用わ欲望であり、生産や交換や借用や所有も、消費や使用の手段でわあるけれども、其に関する欲求自体わ、欲望として見ねばならぬ。そして消費や使用や、生産や、交換等の欲望を満足する為にわ努力と貨物の犠牲を要する。この努力わ欲望それ自体でなく、欲望の外にある人間的活動なのである。能力といふわ、この努力を指す。

欲望の満足にわ必ず努力を要する。この努力が能力なのである。しからば欲望と能力の区別にわ、何処に境界線を引けばよいか。

欲望とわ意向である。意向わ意識活動の焦点となるものである。此焦点から種々な考案が生れる。この考案わ工夫と称せられ、能力の中の知的なものである。工夫が遂げられたとき、其を実行しようと再び意向が生れ、この意向から肉体的労働、或わ勤労が発動する。意向わ欲望に当り、肉体的労働、或わ勤労わ努力即ち能力に当る。しかしえだけの説明でわ、機械的羅列であつて、まだ欲望と能力の意義を理解するに物足らぬであらう。

欲望とわ人間性が発揮された状態を想定して、其を実現しようと意識が緊張することである。人間性といふわ、屢々云ふ通り、人間の持つ性質又わ傾向であり、其性質が獲得され、其傾向が発揮されるとき、吾等わ愉快を覚へる。たとへ愉快とまで少かなくても、吾等わ何等かの満足を覚へるのである。其状態を顧慮するとき、やがて其に向ふて意識が緊張するのである。意識の緊張わ意識自体の活動であるが、この活動わまだ努力といふに足らぬ。意識が緊張するとき、知的工夫や労働等の能力が續々と躍動し始める。しかして能力といふわ、意識の緊張により、えを中心として人間

的エネルギーが集中することである。従て意識の緊張わ、意識自体の振動でわあるが、まだ人間的エネルギーが集中してゐない。意識の緊張が潜在意識を離れて現実の欲望となり、強度が進行するに連れて、人間的エネルギーわ続々と集中され、此に努力が起るのである。努力とわ肉体的働作又わ知的働作であり、働作とわ畢竟人間的エネルギーが外形に現われた状態なのである。之を能力と名けるわ、用語の範囲を拡張して、静的な工夫までも包含せしめようとする用意からである。ゆへに欲望を定義すれば、人間性が発揮された、状態を実現しようとする意識の緊張であり、能力を定義すれば、欲望すなわち意識の緊張に向ひ人間的エネルギーが集中して、肉体的又わ知的に働作することである。

此定義にも含まれてゐる如く、欲望といふも能力といふも、意識的のものであつて、本能或わ反射作用わ包含してをらぬ。本能或わ反射作用わ生理学上の問題であり、経済学でわ、人美の社会に於ける、物質生活を取扱ふから、社会生活が、本能的表現でない限り、凡て有意的欲望と働作を其対象とするのである。極端に云へば、本能或わ反射作用といふも、生理現象に過ぎない。従て経済学上でわ必要的欲望の出発点となる程度のものである。例へば生殖作用の如きわ、生理学上から云へば、本能であらうが、生殖本能に原ぐ恋愛的活動わ下等動物に於てわ反射的であらうけれども、人類に於てわ意識的働作である。飲食の如きも、本能にわ基くであらうが、其満足に向ふ消費欲望わ、決して無意識作用でない。本能といふ文字わ過去に於て多く使用されたが、実わ生理作用に過ぎないから、本能わ広く生

理作用といふ語の中に埋没され、本能などいふ文字わ消滅する時代もあらうと思ふ。無批判に作出されたる古い時代の文字の為に、有用な科学的概究が打ち切られたり、或わ誤解されたる例わ他にもあることであるから、本能といふ文字を買ひ被ぶらぬ注意が必要である。私わ本能といふ文字を決して使用せず、肉体的にわ生理作用、精神的にわ性質又わ傾向といふ科学一般の用語を使用することにしてゐる。

七　能力の種類

能力わ或る欲望に集中されたる人間的エネルギーの活動であつて、物質生活に関係する範囲に於て、之を肉体能力即ち労働し、知的肉体能力即ち勤労と、知識能力即ち工夫との三種に大別することができる。此区別わ能力の活動する形式に依るものであつて、比較的判然とした分類である。別に効果の点から、生産的能力と不生産的能力とに区分できないこともないが、物質生活に関係する範囲に於て、不生産的な能力わ考へ得ないから、かゝる区別わ無用と思ふ。世間で不生産的といふわ、遊戯や娯楽や政治や軍事等に振向けられる努力を指すのである。其他にも欲望を満足する為に直接必要な努力があり、或わ之をも不生産的能力といふことがある。しかし消費や使用の欲望を満足するに直接必要な努力わ、能力の中でも最も生産的なものと見ねばならぬ。なぜならば一切の生産わ欲望生活の手段であるから欲望生活自体わ生産以上の生産であらねばならぬからである。

疑ひもなく欲望生活へ直接に現われる能力わ、一次的生産であり、所謂生産に現われる能力わ、むしろ二次的の生産である。それゆへ欲望生活自体の努力を不生産的といふわ不都合である。例を以てえを説明すれば、農夫が米を耕作する労働わ生産である。米を市場へ運搬する労働も又た生産的である。白米屋が玄米を精白する労働も生産的であり、白米を需要家へ配達する労働わ不生産的でない。しからば主婦が白米を炊いで飯とする労働も立派な生産であらねばならぬ。最后に食卓を囲んで飯を食ふ努力わ、生産的であらうか、或わ不生産的であらうか、此努力こそ実わ第一の生産でなければならぬ。もし飯を食ふ努力が生産でなければ、運搬者や白米屋や配達人の労働も亦生産的と云われなくなる。此等の人々の労働が生産的と云われなければ、農夫が米を俵に入れる労働等も生産的でなくならう。マルクスわ商人や運送屋の労働を生産的でないとしたがるから、特に此等の労働が凡て生産的であることを云わんが為に、斯く例を設けて説明をする。実を云へば主婦が米を炊ぎ、最后に食卓に列んでえを食ふ労働わ、生産以上の一次的生産なのである。若し運送者や白米屋の労働が生産的でなければ、石炭堀や、漁夫等の労働も、全部が生産でない結論とならう。

物質生活に無関係な方面にわ、不生産的な種々の能力があるが、物質生活に関係する範囲でわ、一切の能力が生産的であるから、経済学上能力を分類して、生産的と不生産的と分ける必要わない。経済学の取扱ふ一切の能力わ、みな生産的であるのである。しかして生産的な能力を其活動形式に依つて分類し、肉体労働、知的肉体勤労、知的工夫に、三大別し、えに

種々な細分が加へられるのである。

(1) 労働

労働わ肉体の働作である。人間が肉体を持つ以上、其働作をも人間性の一種と見ねばならぬ。労働わ肉体人間の最も顕著な傾向であり、性質なのである。

肉体の存在わ凡ての動物に共通してゐて、凡ての動物わ其性質傾向として肉体の働作をする。だから植物と区分して動物とも称せられるのである。人間も動物の一種であるから、人間の労働も動物的働作の一種であるが、一般動物の意識わ少年期に於ける児童心理以下であつて、殆んど乳児期にも比すべき曖昧の状態にある為め、一般動物の働作わ、無意識的生理作用の現われと見て差支ないほどである。下等動物ともなれば、働作わ単純な反射作用としてしか現われず、一定の刺戟わ必ず一定の方向の反応働作を惹起するに過ぎないことが多い。例へば海老の触覚に触れると、必ず后方へ一直線に退却する類である。心理学者ゼームスわ此等の現象から推究して動物わ高等となるほど刺激に対する反応の方向が複雑となると言ふてゐる。

牛馬其他の高等動物の働作わ、単純な反射作用でわないけれども、彼等の働作を合目的な意識の統制に出るものと見るわ無理である。彼等の動作わ有意識的であらうけれども、全然生理的であつて、欲望の種類から云へば、消費に局限され、それも必要的消費の範囲内である。人間に於てわ、

必要的消費が満足される為にわ、種々な二次的欲望を生じ、労働其他の生産を以つて貨物を用意し、貨物の用意が間に合わぬときわ、交換や借用等をするが、牛馬其他の高等動物にあつてわ、目前にある飼糧を貪り食ふ等の単純な生理的動作をするに過ぎない。目前に飼糧がなければ、重に嗅覚に誘われて、近処から近処へと飼葉を探して彷徨するだけであり、彼等の意識わ乳児が乳に向ふ程度の潜在識域に於ける生理作用に比較されねばならぬ。

人間の労働も反射的或わ無意識域に於ける生理作用としても働くことがあるが、此程の働作わ欲望を中心に人間的エネルギーが集中して活動するものとわ観察されないから、経済学の取扱ふ労働といふことができぬ。此種反射的或わ生理的作用わ欲望以前のものであり、社会生活に無関係な純個人的のもので、また物質的犠牲を要することのないものである。例へば眼瞼の運動、起臥、放尿、害虫等の襲撃に対する反射的防禦、内臓運動、血管の収縮作用等わ、肉体的働作であるけれども、経済学の範囲外に在つて、労働といふ中へわ入らぬものである。

労働に似て非なものを対象として労働を定義すれば、労働わ物質欲望の満足を目的とする肉体働作といふことができる。凡ての能力わ或る物質欲望を中心に人間的エネルギーが集中して活動するものであるから、労働も亦た或る物質欲望を中心に肉体的エネルギーが集中して活動するものである。此事実を簡単に物質欲望の満足を目的とする肉体働作と云ふのである。従て物質欲望の満足を目的としない肉体働作わ労働でない。例へば遊戯わ

肉体働作が活動するものでわあるが、肉体働作それ自体が目的であり内容でもあつて、例へば舞踏し合唱する美わ、舞踏すること合唱することの自体が欲望であり満足であるから労働と云へないのである。競技に於てわ、単純な働作以外に優勝を目的とするが、優勝わ優越感より来るものであつて、物質欲望でないから、競技や戦争の美も労働といふことができない。競技の練習等も肉体動作でわあるが、肉体的能力の獲得が目的であつて、物質欲望を満足する手段としての働作でないから、また労働といふことができない。

労働わ肉体働作であるが、物質欲望を満足せんとする目的を有してゐるから、こうした意識上の欲望によつて統制されるものである。この統制わ生理的に云へば大脳の意識中枢からの命令として遠心的に神経繊維を通じて筋肉内に於ける神経末梢に伝わり、筋肉わ意識中枢の統制に従ふて欲望満足の為に働作することゝなる。従て労働わ肉体働作であるが、常に意識作用を伴ふ合目的活動であることを忘れてわならぬ。

労働わ物質生活を満足せんとする働作であるから、従て二種に区別される。前にも云へる通り欲望の満足にわ努力と犠牲を要するから、欲望を満足する労働に付いても、努力として現われる労働と、犠牲に現われる労働との二者がなければならぬ。努力として現われる労働わ、欲望満足に直接の必要がある肉体働作であつて、效事をすること、飲食をすること等の美であり、生産以上の生産に当るものである。

生産以上の生産と云ふものでわ比喩であつて、其意味が判明せぬであら

うから、假に此種の労働を欲望労働と名づけよう。しかして犠牲に現われる労働を生産労働と称しよう。但し凡ての労働わ欲望満足の為であり又た広義に云へば、みな生産的であるから、欲望労働及び生産労働といふ文字に拘泥すると誤解を生ずるが、名称に新熟語を作って無用な記憶力を浪費さすよりも、こうした意味を理解して貰う条件で、在来の名称で向上合わすが学問の通俗化ともなると思ふ。私わ箇家期に於ける哲学者等の運動の如く、科学の通俗化を主張し、最しい学術語など、抹殺せんことを要求するものである。欲望の満足と直接に関係する労働の犠牲と

ことであり、生産労働と云ふわ、狭義にいふ生産、即ち欲望満足の犠牲となる貨物を生産する労働のことである。でも欲望労働にもこうした区分わ承認されねばならぬから本書わ単に生産労働に付いて、此細別を説明するが、其わ同時に欲望労働へも当嵌まると承知されたい。

労働を熟練と不熟練とに分けるわ、もちろん其個人わ社会的の生産に従事するからで、社会を離れて観察するのでわないが、社会に於ける個人の側面から労働を観察するとき、個人に付いての観察からである、もし

労働に熟練労働と不熟練労働とが区別される。之に反し分業労働と共力労働も今日わ社会的作業に付いての観察なのである。分業労働と共力労働とを総称して共働と名ける。従て労働の細別を表すれば、左の通である。

労働
- 生産労働
  - 個人的観察
    - 熟練労働
    - 不熟練労働
  - 社会的観察
    - 分業労働
    - 共力労働
- 共働

(a) 熟練労働と不熟練労働。熟練しない労働でわ、熟練した労働にせよ、之には二様の観察がある。加何なる種類の労働の結果が悪い。俗に云ふ労働の能率が上らない。こうした観察が熟練労働と不熟練労働を区別する一の見方である。此見方によれば、例へば飲食事や食事の労働にしろ熟練しないと料理が不味く、飯が出来損ふ、箸やスコの持方も熟練しないと不作法を仕出かす。また生産労働に付いて云へば、土方や運搬人夫の仕事でも、熟練しないと体力が続かず、簡単なセメント担わの労働でさへ、シャブルの持方に方式があり、数日の練習をしなければ、セメントも砂利や砂が善く混合しない。しかし斯うした簡単な労働に付いても、熟練わ技術の点よりも、方法を知りスを筋肉が其に順れることもまた主となる。大阪の倉庫会社でわ、毎日米や砂糖と多勢の仲仕が指いて解船から倉庫へ搬入する。朝早くから暮方まで、石から石へと追いかけられて、走るように解船へかけた踏板を渡り倉庫へ入れば、高い梯子を上げなければならぬ、仕事わ簡単であって、米や砂糖の俵の上昇まで指い上

うて力さへあれば　誰でも出来るものである。或る時相撲がやつて来て仲仕の手伝をした。其相撲わ馬鹿力ある力自慢の者であつた。所が其日不幕れの内に尻五疋半　且つ喘息して云ふのに、十六七歳の見習仲仕が、小さい身体もして朝から晩までよくやる。あい俺わ叶わないし尻も割つしまつた。簡単な運搬労働でも　筋肉が熟練してゐる。であるから如何な労働でも、そ一日の作業へ勤め切れないものである。其労働に付いて能幸の上らない不熟練ホ相当に熟練を要し熟練せぬ間わ　其労働しかできないものである。

しかし経済学で普通に熟練労働と云ふわ　別な見方からである。仲仕の作業の中でも　稽いで走る方わ　力さへ馴れればよいのである。仕事わ毎日忙しいと決つてわをらぬ。十五六歳の見習仲仕などもあり、困なときもあり、苦しい時もあり、追々に熟練して二三ヶ月が経過するも、相撲を喫息さすなどになるか　最境の君看なら、一二週の忍耐で一人前の「肩」ができるそれも押し切れぬほど苦しい。そこで立たれぬほどである。

であらう。初日わ苦しい。翌朝わ膊も上つてやり通せば一週間もすると、筋肉わ其労働に熟練するものである。かようた短時間で一人前になる熟練労働わ、経済学で普通にいふ処の熟練労働と云ふわ長い期間の練習としなわないのである。経済学で普通に熟練労働と云ふわ長い期間の練習としなければ、労働の結果が丸さり上らない種類の労働であり、しかも練習中わ材料も空費したり　機械や道具も損じたり、出来ものが不具合で使ひ物にならなかつたり。そして長い期間の熟練もしなければ　決して一人前とならぬ種類の労働を特に熟練労働といふのである。之に比べて不熟練労働わ

単に能率が満足に挙らぬだけであれば、誰でも力さへあれば其日から出来ないことがない種類の労働である。従て熟練労働わ、見習中わ役に立たず　逆に材料や機械道具も損ずる位であるから、見習期間中わ労働に対する報酬が支拂われぬことが多くて反し不熟練労働でわ　仕事の初日から何程かの報酬が支拂われるものである。具体的に云へば、仲仕の運搬労働でも倉庫内で貨物の「揃」を作る様方の労働わ非常に熟練を要し、米でも砂糖でも、三俵或わ四俵五俵八俵も　倉庫の空地に売じて倉庫内を最も有効に利用する如く敷き並べ、其係ち二十数層積み上げるのであるから、熟練し又を相当た天才ある者でなければ、様方仲仕にわなれず　不熟練者の作つた様わ傾斜して崩れ、死傷者を出すような危険さへある。また鉄工でも旋盤師や仕上師なども熟練労働であり、印刷職工の労働も熟練労働に属する　上述の如く、熟練も不熟練にも二様の見方があり、一わ如何なる労働にせよ、或る人が其に熟練してある歩否やによつて、其人の労働も熟練し不熟練とに分け、他わ人に拘わらず、労働の種類によつて、特別に熟練しなければ出来ぬものと否とを分けるのである。従来制度や賃銀支拂の点に付いてわ、後者の観察が重要であるが、前者の見方も種々な場合に必要あるものである。例へば機械が器用になるに従ひ　少女などでも極く短い期間の練習により　一人前に作業のできるようになり、機械わ絶へず労働を単純化しつゝあるので、長期間の練習をしなければならぬ種類の熟練労働わ　芸術的なものを別とし、普通の生産に付いてわ次第に減少し行く傾がある事の観察が其である。

分業労働と共力労働　アダム・スミスわ国富論の最初に分業のことを論じてゐる。それほど分業と共力わ重要である。

経済学者わ往々分業の急事を拡張して、気候や地味による地方的生産の相違を国際的分業と称したり、人々が異なる生産事業に従事することを職業的分業と称したりする。かく分業スわ共力といふ言葉わ如何ように も拡張されて使用もし、解釈もされようが、けれども労働に付いての区別が本来の意義なのである。また分業と共力に付いてわ、その行われる条件や利害得失につき、種々な論が戦わされてあるが、それわ生活現象の論に譲り、此にわ労働を分業労働と共力労働に区分することにつき説明するに止める

分業といふわ、一の労働作業を多数人が分担することである。一個の結果を挙げる為の労働を一人でする代わりに多数人が分担してすることである。工産労働にしろ、欲望労働にしろ、作業にわ種々な順序がある。一人で凡ての作業順序をするわ非常に煩雑であるが其を数人で分担すれば、各種の作業順序に別々の人が従事することになるので、一人で凡ての作業順序を果すよりも、遥に労働の能率が上るものである。アダム・スミスの挙げた例によれば、ピンを製造するにも、一人で凡ての作業順序とすれば一日に二十本も出来ないであらうが、十人で分業すれば、一日に四万八千本も出来るそうである。

分業わ工場内の労働だけに限らない。前に掲げた運搬仲仕でも、運搬をする丁扇」の外に、船舶の中にわて肩へ貨物を載せるつやしない」をする

肩、積荷の数も調べるために「ばんぼう」を渡す肩、また倉庫の中で測をする肩等に分業してゐる。農夫の労働にしても、種籾などわ分業し、うなる肩、さくる肩、堆肥を運ぶ肩、堆肥を撒布する肩等に分業すると非常に都合がよいのである

また分業わ欲望労働に付いても行わわれる。大家族の炊事わ一人で出来ず数人によつて分担されるであらう。公衆食堂などに行けば、配膳にさへ多数の肩が分業してゐる。

分業労働に似て非なるものわ、共力労働である。共力労働とふわ、一の労働作業を多数人がわ過重の作業と数人で果すことである。一人でわ不可能でも、数人で力を合せて動かすにわ、一人でわ不可能でも、数人が力を合せると動く業である。例へば重い石を動かすにも一人で抱へるより、もつこう を使ふて、二人で担ふ方が終日の労働にも耐へて労働の能率が上るようにも、一人でわ長続きしないことをも、一人で出来ることも数人で力を合わして長時間の労働に耐へたりする類のものも共力労働といふのである。それゆへ共力と分業とわ、異なる作業方式のものである。

分業と同じく共力も亦た工場内でも行われる。製材工場で製材するにわ材木を押す肩と引く肩とが共力し、しかも呼吸まで合ふてゐなければ、我ままにすることへある。また共力わ欲望労働にも行われ、居住其他の使用生活わ、共力に依る労働能率を高める特長がある。分業にわ労働能率を高める特長があり、共力にわ一人で不可能なことも多数人によつて可能にする特長がある。こうした別々の特長を持つ分業と

共力を総称して、共働と名付ける。

共働といふわ、生産労働に付いて見れば或わ分業を行ひ、或わ共力を行ふて居る。

と云ふてあらう。従て分業と云ひ、一定の労働作業が完了されるにわ、分業も共力といふだけでわ、労働が合目的の統制ある作業であるに相違しない。分業と共力とが併せ行われてゐるかも知れない。

けでわ、作業順序を分解しての観察であり、全体としては、作業も観察すること。其作業わ多数人によつて共働さされてゐるも云わなければならぬ。社会に於ける労働の一般形態わ、分業もしくわ共力といふだけでわ不十分であり、えを共働し名けるに及んで、始めて実際を指示し得るのである。従て本書でわ、分業或わ共力もしいふより多く共働といふ文字を使用するであらう。

共働わ社会的労働の一般形式である。ゆへに労働わ、個人の単独労働も、社会に於ける共働に大別することが出来る。共働わ能率を高め、また個人の単独労働と雖、工場労働しか、漁業労働わ、わ生活現象編に譲るであらう。

労働わ肉体働働の実質により、自由労働とかしするこしかし列挙しまたえを業実内労働とか。

ができるが、こうした列挙的区別わ、経済学論の考究に価値の少ないことであるから省略する

(12) 勤労

人間の能力にわ肉体的と知識的との両能力とが、同時に一個の働作に現われることもあるが、肉体的なものを労働、知識的なものを工夫、ことにする。

そもそも(元来わ特徴によつて、元来わ比較的に判別しわしてあるが、それでも労働するとき常に多少わ知識の働きを伴かしてゐるもの、工夫するときも、肉体の労働が附随することもあるけれども労働の場合の知的作用わ、肉体労働に比較すれば非常に軽少であり、また工夫の場合に於ける肉体労働わ、知識の働きに比較して非常に軽少であるから、特徴より見て肉体労働と知的労働とに区別さ、するものも工夫とするものも労働とするのであるが、これも勤労にわ元来わ、生に知識の作用であつて、肉体の労働でも肉体の活動と雖へないものわ、全然肉体の活動も要しないことが多く、また知識の働作も要すれば、肉体の活動と見得る。だけでも指図わ、少なくも言語或わ身振を以て指図の内容をもたへるだけならば、指図の内容とたへる外に、指図にわ内容とたへる外に、指図の服従しない者に対する措置もせねばな

うめ　特に共働となれば　口先ばかりの指図よりも　率先して先駆的に模
種を示し指導せねばならぬから　一層多く肉体の働作を必要とする　指図
以外の勤労にわ　肉体の働作が主要な内容をなしてゐることわ　いふまで
もなく明瞭であらう。
勤労わ知的であると同時に肉体的であるから　労働と同様に畧々時間に
比例して能力の結果が現われる　此点が勤労と工夫を分つ大きな特徴である。
労働としても　時間ばかりによつて結果が決定されるものでない　熟練し
たる者と熟練せぬ者との能率にわ大差がある　しかし同一人に付いて云へ
ば　労働の結果わ大体時間に比例して増減する　正確に云へば　疲労した
ときも　疲労の充実した時にわ　同一人の労働結果にも相違があるが　適
分かぬ程度に労働すれば　まつ労働の結果わ特定人に付いて云へば　時間に
比例するといふことができる　此法則わ勤労に付いても大畧適用されるが
指図のやうな特別の勤労わ　強ち時間に比例して結果を計ることができ
ないやうである　それわ指図を要する出来事が時々にしか発生せぬから
時間に比例して指図の勤労をすることが不可能なからであらう　もし或人
が種々な事業に関係し　絶へず指図をしなければならぬ地位にあれば　略
時間に比例して多くの指揮命令が下されるであらう　戦の酣なるとき
ナポレオンや秀吉わ　睡眠さへもしなかつたのである。
勤労にも熟練と不熟練とを区別し得る　そうしを区別の説明わ　畧々労
働に付いてのものと同じであるから　えを省略する　また分業と共力の共

働も　勤労にも行われてゐる　事実の調査などにしても　多数の者が分擔
して行ひ　其を取纏めて事業管理の基礎とするであらうし　数量の計算も
じにも分業や共力わ普通に行われてゐて　読み上げ算などわ共力として一の
勤労に業を為すのである　勤労に関する分業や共力の区別にも　労働に付
いて述べたことが　同時に当嵌まるから　重複に再説しないであらう
勤労に付いてわ　働作の内容から種々な分業が可能である　官庁や会社
にわ勤労の内容によつて　また実際の必要から　従業者も種々な係に区分
配属さしてゐる　えわ勤労が働作の内容によりて区別し得られるからである
労働と異も　旋盤工とが仕上工とが　働作の内容によりて種々に区別し得る
ようしを区別わ単に作業の実際に必要であつて　経済学理にわ　別段の
影響がないことである。
けれども勤労を管理勤労と教育勤労に大別し　管理勤労を組織勤労と分
配勤労に再別することわ　経済学理の上に種々な必要を見るから　えに
付き簡単な説明をしなければならぬ
勤労を定義して　知的肉体働作といふだけでわ　内容が判らない　勤労
と理解するにわ　内容に触れなければならぬ　勤労の内容を統括すれば
管理と教育である。
管理といふわ経済に関する種々な生活を成立つて　且つ之を継続維持し
て行く一切の労力である　教育わ人間教育と職業教育に再別されるであら
ゆけれども　兎も角も人間を仕上げて　自己完成に導き　経済的にわ物質
生活の方式に付いての諸関係を理解さして　労働的にも物質生活の実際が

要とする働作は各人の特長を発揮して、他から之に従事しようとする意志と能力を持たせることも行いての一切の努力であるから、管理すべて区間内や工場内で行われることに止まらず、行政庁の内部でも、生活組合の間でも、学校内でも家庭でも行われる。教育も学校内だけに限らず、家庭でも、又人間であってもまた農園や工場内でも行われるものである。

教育に関する勤労は、人生に取り非常に必要であるが、経済学から独立した特殊の研究対象となっているから、経済学では重に管理勤労を考察する。しかし教育は社会における物質生活の諸関係を了解させることを基礎的の必要任務とするから、教育の重要な部分に経済学があるとも考えられるから、又同時に、経済生活の諸方式は人物によって運用されるから、教育は経済生活の必要な前提条件であることも了解しなければならぬ。

団体労働の全部が経済学上の労働でないと同じく、管理も右のような勤労の全部が経済学上の勤労でもない。社会における諸事業は物質生活に行わる。例へば精神生活に直接関係するものもあろう。之も管理する勤労を必要とするし、又管理の原則は、経済生活上のものも精神生活上のものも大差なく、略々共通しているであろうから、管理勤労は充ての生活形式の成立や維持に必要であるに拘らず、今まで経済学上でも精神上の学問でも、之を研究することを忘れていたのも、之は大きな欠陥である。従来に亘らぬ程度において、少なくも原則だけなりとも、管理勤労に関する研究を今後の経済学はせねばならぬ。

管理勤労は内容の上から、組織勤労と分配勤労とに細分することもできる。

生活に関する諸形式は、形から見れば組織であり、目的から見れば欲望の満足であるから、一方に組織に関する管理があり、他方に目的に関する管理がなければならぬ。経済上の目的に関する管理とは、社会の物質生活を充足するにあるから、生活方式内に於ける人々に、必要な貨物を分配する勤労でなければならぬ。それ故、管理勤労は組織労力と分配労力に両分されるのである。

経済生活の組織を見るには、それが消費や使用の直接生活に関するにしろ、或は生産や交換等の間接生活に関するにしろ、まづ何等かの考案をしなければならぬ。しかし考案それ自体は、純粋の知識作用であって、後述する大物作の範囲に入り、ここで云う考案された知識を現実に行うには、生活環境に特有な自然や人情に応じ、具体的な計画をせねばならぬ。此の計画は或る一人の作成するものもあろうし、また団体の幹部又はそれに加わる人々の協議によるものもあろう。しかして計画は指図として関係者へ強制されることもあるし、或は関係者の協議により提案されて決議となって実行されることもあろう。管理勤労は具体的の計画を関係者に承認させることに始まり、関係者の一定の計画を完全に承認すれば、其生活形式は実現に近づくものである。

組織勤労には計画実の承認を求め、之を決定する種々な勤労がある。之に団の創出、従業者の募集、事業の分担等に関する勤労の外に、資金や貨能へ生活方式に関する議論を説明し、或は反対者を説服し制御する等の維持に関する勤労を要とする。此等を総称して組織勤労と名付ける。

生活方式も人類の物質生活の必要から成立して維持されるものである。

[illegible]自然に欲望生活の為にあるが、又わ其過程としての生産其他の間接欲
望に関するものであり、家族又わ友人間の共同生活わ、直接欲望を満足す
る方式であり、農園又わ工場わ生産に関する共働方式である。普通わ気付
かずにいるかも知れないが、家族や友人間の共同生活に於ても関係者間へ
衣食住の公平な分配をしてゐる。そして農園又わ工場の共働生産もなれば
一層複雑な生産物の分配を要し、それにわ共働の生産物を糾合して、其代
償を関係者へ分配することもあれば、生産物その物を関係者へ分配する
ものがある。共同生活或わ共働生産に於ける此種の努力も、分配勤労も
けれ。

分配勤労わ単に日用品や生産物を分ける働作だけでなく、分ける為にわ
生産物の総量を計算して記録する等の種々な勤労を必要としまた生産物
を分するにわ、販路を探し代金を取立てる等、これまた複雑な勤労を要
する。しかして分配の結果わ明細に調査記録して、関係者へ報告しなければ
ならぬ。こうしたる一切の努力を分配勤労と称し、複雑なこと必要の程度
わ、決して組織勤労に譲らぬものである。

組織勤労や分配勤労に関する諸性質わ種々の機会に述べることもあらう
此にわ単に勤労の分類に必要な説明をするに止める。

(3) 工夫

関係的労働でも、知識作用の伴ふ勤労でも、決して物質生活のみの特有
でわない。関係能力を雑へない、よしえを雑へても微少であり主に知識能

力の活動である工夫わ、実わ学問の研究や藝術の創作などの精神生活に関
する重要な作業である。けれども物質生活に付いても、工夫わ可なり大切
な役割を分擔してゐて、今迄の経済学がこれを看過し、労働ばかりを重く見
て、勤労さへも軽んじてゐるに拘わらず、工夫わ経済生活にも大きな役割
を擔任してゐる。

生産にわ労働が其要件を為してゐる。が生産の要件わ、労働の一元でない
学問の立場としてわ、事実を有りのまゝに観察することをしなければ
ならぬ。事実を無視して、議論や主張に都合のよいようにも、学問を単純
化するわ、独断であつて科学者の態度でない。生産に関する自己の主張を
証明するに都合のよいようにも、生産の要素として普通に承認されるに
地と資本と労力の三者の中から労力のみを抽出して、これを生産價値唯一の
作出要素と見るわ、科学を歪めて自己の議論に役立たそうとする独断である。

独断者わ一層深刻に、労力の中からさへ、勤労を省き工夫を無視し、
体労働のみを價値作出の要素といふ。しかも労働を更に更に独断的に単純
化して、一切の個人的相違や内容の相違を無視し、均等なもの、単純に時
間によつて計算されるものを教へる。しかして彼等わ、こうしたる態度のみ
を科学的と強弁する。一大嘘を教へて方大実を伝ふ自諺の通り、大衆わ
や彼等の嘘表に捲き込まれ勝ちである。

科学の開拓者等わ羅馬法王の絶対権力を突出す。まも大衆の迷信を解学
することを任務としたも、規範経済学も、斯した室夫な任務を背負ふこれ

過ぎないが、現在の社会生活制度の上で特別な利益を附与されてゐる上、夫も発明とし便宜両者を区別することにもよう。従て発明に付いてわ、生活現象に上活を論じ於て特別利益の附与を論ずる必要わあるが、能力の性質を分かず不質論に於てわ考案に付き述べた以外に特に発明に関し説く必要わないのである。

先理上の手続から云へば、発明わ技術的であるから、技術的素養を積んだ者でなければ発明は不可能であるとしかし技術家わ往々にして何が必要であるかを知らない。之を知る者わ実際の消費者等に生産労働者である。能力は必要わ発明の母と云ふ。必要を知れば、やがて発明の考案となる。私の友人で大電気会社の技師をしてゐる者が、技術者わ社会のことに暗く、なにが実際に必要であるかゞ判明しない。何が必要であるかゞ判明すれば、之を考案することわ容易であるから、其を知らして呉れと私に申されたことがある。私わ之を知るわ一般消費者と現実の労働者であると答へた。一般消費者わ因用品に付き缺乏を訴へてゐる。缺乏を満たすわ最も大きな必要であるのである。汽車や汽船や電信電話等の大発明わ一般消費者の欲望を満す必要から生れたものであるし又た生産作業に関する種々な発明わ、実際の労働者が作業上の不便を改良した所に出発してゐる。大造船所の技師が語つた所にも技術上の考案に窮すると、彼わ大阪の小さな町工場へ視察に出掛けるそうである。そうすると、実際の必要から種々な考案が施されてゐると発見する。其が動機となつて自分の思ふ考案も仕遂げられるそうである。事実町工場にわ新しい絶多の考案が必要

に駆られて施されてをり、之を理論付ければ立派な博士論文の材料となる程のものが、到る処にあるそうである。此等わ発明が一人の力でなく、大衆的に完成されることを裏書し発明を発表して法律上の恩典を受ける者わ一人であつても発明に関係する功労者わ多数である知らしてゐる。

八 能力の共通性

能力とわ欲望意識の緊張を中心とする人間的エネルギーの活動である。某他わ欲望能力と生産能力とがあり、其活動内容から云へば、労働と勤労として夫々に区別されることわ、之を述べた。しかして此等各種類の能力にわ夫々の特殊な性質があるが、また各種の能力に共通する性質もあるのである。此に之を調査しよう。

第一 能力の発現わ二次的である。

能力わ欲望を満足する為の動作であるから、欲望満足の為に存在するが段々としての意識活動であることわ、屢々説明した処である。従て遊戯とわ異なり意識活動自体が生活の喜びとなるものでなく、生活の喜びとなる何等かの欲望を目的として、其手段に人間的エネルギーが活動することを能力動作と云ふのである。

第二 能力の適度な活動わ生理的に必要である。

動かずに生食することを富貴の特権とせ得へる者がないでもない。但し経済学者が最少の労費で最大の結果を得ると説くと、結局の理想わ働かずに最大の結果を得ることであると聞く者が多い。

出来ないであらう。

第三、経済生活に於ける能力の発現には苦痛が伴ふ

過度な能力の働作は生理的であるが、生理的といふことは、無苦痛を意味せぬ。又肉体に於ても苦痛と云ふのは、肉体的の疲労や倦怠を指すとは限らない。我等が苦痛といひ、愉快といふ中には、多分に主観的要素を含んでゐる。しかも此主観的要素に比較すれば肉体的の疲労といふやうな客観的要素は少量である。

遊戯は苦痛と思はない。けれども遊戯にも疲労が伴ふものである。疲労や健康を害する点から云へば、勉強や労働よりも遊戯の方が多いのである。種々遊戯は食ふが早いにしろ、胃腸へ物を詰め込んで無駄に消化器を過労さしてしまふやうな健康を障害することが多い。或る生理学者の意見では、学生が大いに勉強して、勉強の為に健康を害するといふことはない。我等は健康を害する程に勉強することはできないのである。学生が健康を害するのは勉強以外の遊戯や不摂生からであるといふ。其言は同時に生産作業にも適用せられ、健康を害する程に、我等は労働し勤労し、又は工夫することはできないのである。若し労働や勤労の為に健康を害したとすれば、睡眠不足と営養不良や、努力以外に何等かの不摂生が伴ふたのであらう。

或る電車の運転手から聞いた実話である。好景気時代に東京市電気局で運転手が不足し希望者には時間制で無交替の連続乗務を許したことがある。彼の友人は身体頑健であつた為め、殆んど宿明け休養せず、幾日も連続乗務し、多額の収入があつたが、其収入は酒色に費つて、不足な睡眠時

間を一層不足にしても、彼の友人は一年余りに死んでしまつたさうである。

勤労者としての私自身の体験を云へば大正六年大阪三菱倉庫大爆発の際私は関係者として一切の残務整理を引受け、一年間に亘つて無休暇の勤労をした。爆発当時の数ヶ月は宿へも帰らず、不眠不休であり、其后も毎日十数時間の無理な勤労を続けた。私以外の主な関係者は神経衰弱にかかり私は殆んど毎年蓄膿したが幸に健康を損じなかつた。私は疲労を感ずると之を僅少な時間の隙があるも、寸間睡眠をすることが出来る。諸同志が訪ねて来ても、要領が分ると来客を前に置いて、下作法に居眠をしてしまふのである。或る僧侶が無縁爆死者の骨を埋葬して呉れ、其意味から無縁者の骨を埋葬するから費用として多額な金を出せと幾回もしつこく私を訪問して来た。私が其を拒絶するも彼は何時でも容易に帰らない。私は来客を前に置いて、何時も居睡をしたと過労してゐるし、私の習慣でしあるから、其居睡は自然的であつたが、強欲僧侶は呆れて遂に断念し、それから来なくなつたと云ふやうなこともある。

大正九年以来、消費組合運動を開始した私は、非常に多忙な勤労を続けた。午前五時から聯盟本部の共同仕入品を、各組合へ荷馬車数台で送り出す準備をし、十時頃やつと朝食をとして、休む暇もなく帳簿を整理し、現米の仕入れや銀行へ入金などに行き、其儘夜にかけて各組合を廻り、種々な問題の相談相手となりながら、毎日の集金をし、又宣伝をした。労働者の消費組合では、昼間は工場で働いてゐるから、夜間でなければ幹部はの私は二十箇所の組合を、日割を決めて訪問してゐると年中無休暇であり、特

に日曜日や祝日の集会に出席して宣伝や講演に忙しく　毎日未明から夜わ
十二時を過ぎ　一時となりし就寝できぬ迄に忙しい三六年の生活を続け
たが　その結果わ労働や勉学にまで支障を来すので　電車の中で
わづかの時間にも巧妙に居睡りができるようになつた。　私わ酒も煙草も呑まず　化しけ此には忙しいばかりで
すれば　此体験のみでなく　消費組合の多数幹部に共通もまた前
述の二年間にだける私共の無理な体験をそのまゝ語つてゐるう
ち　他方面の過中で此れへみわるも丁度ば下痢生の結果が元来の心臓病を
作まの過中で此れへみわるも丁度ば下痢生の結果が元来の心臓病を
会社の宿直室で宿直日番が代脳麻痺を
記しておるこゝもみある　此れ
であるが　労働過合の幹部さしもおを若い労働エの知人が元気に就寝した翌朝
突如脳麻痺で死んでおをこゝもある　此等に見比べし　心臓病者わ勤
労せず安眠しておゝ死ねことがあろう　作業庭中で死ぬまりも迄にるいを知ふ
また頑丈な学生が　運動競技場の洗腸室で死んだ例わ珍らしくない
ある　過度な勤作わ　生産労働に発見さるよりも　より多く過労に発見さ
過労のために死亡者が多い　雪中登山の報道者わ毎年多数にある。　でも

過労も苦痛もせず　反対に生活的で健康にも王命にも害のない労働を言痛
とする。　であるから苦痛も病状の分岐点わ　疲労でなく過労である
主観的な気持でわみるまい。
小児の動向に反対して　落しもの
分も撰わて泣き出す　小児とともに
に反対して筋肉運動水邪魔さ
れるであろう　私次何時も体験する
事にしても　数人で同じ場所に出
に相違みある　鎌を持つて竹を刈
し一同で竹刈をするにしても
から　人々により元に向く把形が異ふ　鎌にも大小あり　柄にも長短
る　こうした微妙な点でも　各人の動向を穿し　元の向くか把みである
事の持取がよい　反対に動向と
快も苦痛の分岐点わ　動向の
元の向く方面わ一でない　次に
集も神んで労働させられる　死に
り　或わ期待以上の状態に陥する
長時間の労働をさせられる
である　二次的といふわ　欲望の
動作や其を達する手段なので

手段わ必要でわあるが　喜び自体でわない

手段が直接であり、短時間で欲望充満の如き程わこれに反し登山や

の中に埋没されて苦痛を覚へない　過労でも　其過労が登山の目的と近接してゐるから　病ひと苦痛を訴へ

労働でなく遊戯でなつてゐる　生産労働や勤労でさへ　報酬が勤定日にわ

苦痛と覚へないものである　其わ目的が

数時間の短い労働であれば　無報酬

痛に近い　仮令一日十数時間の年中無休の労働でも人生の目的を遂げ

に不可避に必要な手段である限へは　苦しみを苦しみと感じないものである

の語を報じた希臘四十七士わ　生死を

ばたゝえに反し自主的に従事した

てゐるに過ぎない　働きたくないのと　止を得ず働

第四、苦痛わ労作の時間が短けれ

さゝるし加速度に増加する

苦痛わ主観的であり　勤向に反対する

間の勤向未満なら　小児でも泣き出さない

進するものである　勤作わ目的を達する手段であるから　目的の実現を目

前にチラつけば無苦痛に近く　手段の向上的で　手段の手段もいゝよりも

目的の実現が違いもさゝれ　後見して苦痛を増加し気の向い向わ勤作を続り

待ち合いで途中で気の変わるものである　大体から云へば　苦痛わ時間の

吐例し　勤作の時間が短ければ苦痛わ少なく　時間が増すに従ふて苦痛も

増すようにも観察されようけれども、仔細に調査すれば、苦痛も作業時間わ絶対に正比例するものでなく、時間以外に苦痛を加減する種々な事情がある日である。例へば通路を歩むにも、平坦地を行くよりも、山道を上るに苦痛が多く、力学的に計算すれば水平に動くも　急斜地を上るもでわエネルギーの消耗が二十倍も相違するのである。

しかし或る目的のうちの手段としては、能率曲線にも現われる通い疲労度に比例し、又た各時間別の苦痛わ署々相等しいであらう。けれども疲労度に達するとき、能率わ漸進的に減退し、又も苦痛わ加速度で増すから、休息を必要とすることになる。休息すれば再び努力を恢復し能率のよい作業がお続けられるであらう。

苦痛も同じく作業の結果わ　作業時間と密接な関係があり、工夫と除け　作業と作業時間の関係わ　実わ作業自体の苦痛や能率に関する法則であるに過ぎないから　作業結果が計算されるものであるから　作業時間の関係をも、一の法則とせねばならぬようである。時間もいふ抽象した存在物でわ　我等わ意識することができず、時間わ単独作業の継続する状態であるから、作業と時間の関係わ　作業結果と、其次幸に関する法則であるに過ぎないから　作業の結果が目に見へるように作業を省察するしき迄に発見するであらう。従てわ作業と苦痛等の関係も考察するに止める。

作業者としては、作業結果と、其次要さよく理解せしめ、また短時間で作業の結果が目に見へるように作業に区切を付け、退労せぬ前に休息してわ労力を繰返へすことが、大事

業も成し遂げる秘訣である。大事業わ休み休みでなけ出来ないと同時に或等能率を挙げても作業が平均に続かなければ 結局目的わ達せられない。平均に持続して作業する処に、割合に無苦痛で大事業が成就されるものである。大事業になるほど手段の手段が多いから、よく目的と必要意識を判明さしないと 動向が反対に働き、結果に対する認識の不足から、作業時間の割合に多くの苦痛がでるものである。此事わ労働に付いても、勤労に付いても 又た工夫に付いても 凡て同一であって 苦痛わ時間よりも主観的に生じ 時間に比例するにしても 加速度に増加することを了解しなければならぬ

第五 緊張わ苦痛を忘れさし、又た作業の能率を増大にする。

能力の働作にわ苦痛が伴ひ 其苦痛わ作業時間の延長によって加速度に昂進するものである。けれども作業目的の判明な意識わ苦痛を減少するであらう。特に作業目的の意識から 共働して作業することと物質生活上の必要条件であると発見すれば、緊張が起って、長時間の激しい労働も苦痛と感じないであらう。まして其働作が社会的にわ自分の責任であり 精神的にわ自己完成の必要な鍛錬であり、又た人類愛の精神傾向から、不可避的に発現する良心と理想の指示であるを覚へるとき 意識わ緊張して、苦痛に直面すれば一層大なる努力心を奮発せしめるであらう。支那禅宗の開祖達磨に師事せんとした二祖神光わ 雪中戸外に立つこと一昼夜、達磨から許されないので、最後に左の腕を折って、血の流れる片腕を達磨の面前に差し付けたと云ふ逸話がある。緊張わ大なる苦痛をも忘れしめるであらう

事実を信られたい

普通の場合に付いて、簡単に緊張と苦痛の関係を云へば 緊張わ苦痛を忘れしめ又た労働の能率を増大にする。けれども作業時間が過度に延伸されるも、緊張しようとしても 緊張が困難となり。緊張の程度わ加速度的に減退するであらう。前項に説いた時間と苦痛の関係を顧慮して之を公式的に云へば 作業の能率わ作業時間と緊張度合の相乗によって計られるといふことができよう。

第六 能力わ繰返へすことにより熟練する

熟練労働に付いて述べた通り、同じ働作を繰返へすときわ、追々と熟練するものである。勤労に付いても同様であって 小学校時代から習字の稽古などするわ、文字を書くことに熟練しよう為である。算盤の稽古も数年其き專門の職業にしてゐると 頭の中へ算盤が浮び上り 如何に大きな数の加減乗除でも暗算で出来るようになる。其実例に貯金局で毎年行われる算盤競技会を見れば 速筆女子の妙技が人間業とわ受取れぬほど熟練してゐるに驚嘆しよう。

熟練すれば 一を聞いて十を悟ることが出来る。紙背へ眼光が通り出す会社の支配人など 多年の社員生活をして事務に精通熟練してゐると、決して盲判など押すことがなくなり 一見して帳簿や文書の不備な点を覚知し得るものである。兵法家や戦略家にわ 特別に斯うした堪能があり 新聞記者にわ第四感覚が発達するなどと云われる位に類推力が鋭敏となって来る。手品師の妙技など魔法とも受取られよう。剣道の達人など、熟練労

働の頂上に達したものであり、また早寐早起にしても多少の熟練をしなければ眠られず又を目覚めないものであるが熟練すると、時計の如く確に一定の時間に眠くなり、一定の時間に目覚めるものである。

熟練わ習慣を作り、習慣わ労働でも勤労でも、無意識作用であるかのやうに、未熟練者にわ判断力と決心を要し、苦痛であることが、熟練者にわ本能作用でもあるかのように平易に行われ、経済生活に取り熟練の價値わ非常に大なるものである。従て能力わ繰返へすことにより熟練することわ人類の物質生活を向上せしめ、また幸福にする基本法則となるのである。

わも、能力活動の順序、即ち段取により、作業能率わ大差を来す。能力活動の順序といふわ、作業働作の段取である。段取の順序が悪るければ作業の能率が上らず、段取の順序が善ければ、作業の能率が上るものである。作業段取の良否わ、また苦痛にも関係し、段取が良ければ動作の苦痛が少なく、段取が悪るければ無用に苦痛を増すものである。従て段取わ熟練に次いで経済生活に大関係ある能力の法則である。

大阪にわ幾千人の仲仕がゐるが、如何な種類の荷役に対しても、最良な段取を指図し得る古話役わ五本の指を屈するほどしかないと云われてゐる。段取を指図するにわ、作業と作業の道具并に貨物の性質に精通すると同時に、各人の能力と気持を即座に見分けることを要し、同時に仕事度胸がなければならぬ。豊臣秀吉も柳正成も実に段取の名人であり、仲仕をさしたら立派な古話役となつたであらう。段取わ大きく云へば軍略であり、小さく云へば仕事の古話である。軍略と段取とに大小の差異わあるが、呼吸わ

同一なのである。

軍略家にわ度胸がなければならぬが、作業の古話役にも仕事度胸がなければならぬ仕事度胸といふわ、仕事を恐れずえを飲み込んで成るべく少数の人員で、一定の時間に仕事を完了さす意気込みをいふ。仕事が多くて困難だとか、人手が足りぬとか、時間が短いとか、仕事を恐れてしまへば段取わ出来ず、作業に着手することさへ不可能であらう。恰も軍略家が小数の手兵を携げて大軍を迎へ撃つ度胸が、仕事の段取にもいるのである。

ナポレオンわ不能の文字を削らうとしたが、客観的に不能なことわ度胸がよくても可能とわならない。度胸とわ主観的可能を客観的可能に一致せしめることである。仕事の分量と時間と人数を見て、最も巧妙な段取をし緊張した作業をすれば遣切れると覚悟が付けば、即坐に作業に着手する。もし結局人数が足らぬと思へば、仕事の緩急に応じて其一部を後廻しとし、或わ人数の不足を補充し、又わ仕事に着手して置いてから、人数の補充を考慮するといふのが、仕事度胸である。

段取がよければ苦痛を減じ、又作業が緊張する。未熟練者も熟練者に狭まつて能力以上の仕事ができる。勇将の下に弱卒なしとわ、段取の上手な親方の下に、マゴ〳〵する者のないことをも形容する。

段取がよければ、追駆け仕事となる。水にも溜り水と、一直線に落下する水とがある。仕事の段取が悪るければ、溜り水の如く渋滞し、段取が良ければ、落下する水の如く、追駆けて仕事が運ぶものである。

追駆け仕事にわ、仕事を区分し、各区分に過不足のない人数を配置せね

ばならぬ　熟練の必要な処へわ熟練者、熟練のいらぬ処へわ未熟練者を
置ける。意地の善い人と意地の悪い人も、加減して配置せねばならぬ。
うすれば鍛冶屋の若い徒弟がハンマーを振るに遠心力や反動を利用して、
重いハンマーを終日振り廻わし得るように、分量の多い作業が、反動と気
勢で成遂げられるのである。

段取わ多人數で作業するとき、最も重要な意義があるが、一人で仕事す
るにも、段取の巧拙わ作業能率に大差を生ずるものである。素人と黒人わ
技術の相違もあらうが、それよりも段取に巧拙があるのである。

碁打の上手、下手わ碁石を打つ音にも相違があらうけれども、そんな技術
上の相違よりも、石を並べる段取の巧拙による。石を並べることわ一種の
段取なのである。上手な碁打わ十手も二十手も先のことが見へるように、
上手な指物師わ素人にわ廻りくどいことをしてゐると見へるほど、十手も
二十手も先を考へ、順々に段取を運んで、最后に一時に数十の机でも腰掛
でも作り上げる。が素人わ直接に一板の板を削り四本の足を切り、一個づ
つ机や腰掛を作るから、早いようであて、数十個の机や腰掛を作ることなる
と、長い日数を要するが、事物の指物師わ設計図を見て、与へられた材料
に応じて木取をする。まづ指金で必要な枚数の板を切る為墨を付ける。そ
れから切り次いで削る。脚の材料も其通りで、鑿で穴を堀り、横木なども揃
へて、最后に一遍に組立をするといふように、凡てが計画的で、結局の作
業を十にも二十にも区切つて、一人の身体を時間的に分業して使ふ。それが
即ち作業の段取であり、其巧拙わ能率に非常な差異を生ぜしめ、素人と黒

人とも区別することとなる。

年期さへ入れれば削る技術わ大差なく熟練するであらうが段取の巧拙わ
往々にして天才でなければ呑み込めぬこともあり、又旧式の職人わ、他人
に段取を知られることを厭い、秘密にして隠したものである。宮大工など
わ自分の仕事を秘し、木組にしても他人に見られぬよう、仕事の帰へりに
わ仕掛けの仕事の上に布などかけて隠すものである。もし凡ての人が自己
の段取を公開して何人にもえを教へ、しかも天才的な段取の上手な者が、自
然に中心となることができれば、未熟練者も熟練者に近い作業能率を発揮
して、経済生活に大なる幸福を齎らすであらう。

第八、自然及び機械器具類の利用わ能力の効果を増大にする。

能力活動の働作わ、欲望満足の為に集中された人間的エネルギーの運動
であり人間的エネルギーわ、物理上のエネルギーと共通してゐるから、自
然と機械を利用して、能力活動の効果を増大にし得るわ当然である。文化
といふわ人間の代りに機械家畜等の自然力を働かし作業能率を多大にして
物質生活を幸福にすることを意味する。

自然力や機械力が人間的エネルギーに代つて働作の結果を増大にして呉
れるわ説明の必要がない迄に判明である。自然力や機械力の外にも設備自
身が能力の効果を増大にすることを忘れてわならぬ。この事わ使用欲望に
付いて述べたのであるが、使用欲望わ能力活動の能率を高めると主眼とす
る。ベンにしろ机にしろ、能力活動の能率を高めることわ多大であり、又
た燈火によつて夜や未明の時間が利用され、紙があつて他人の経験をも利

用することができます。冬の寒い日に冷い鉄をしてあてわ、讀書や家僞と書く能率が上らないので、私わ夫して炭火を俟約しないで、時間を最も有效に使はうとする。その時炭火わ私の作業能率も高めて呉れることになるのである。

人手が多くて收約農法を行ふにしても鉄や鎌わ物理的エネルギーでわない。使用欲望の対象物が、加何に多く作業の能率を高めるかわ、此等の例によつても疑ひなく判明であらう。足に鉄や下駄を履けばこそ、長途の道が歩まれる、素足でわ生番人の如く足の皮が厚くならない限り、矽利道わ歩かれないのである。

自然や機械が働作の效果を増大にすることわ非常に意義深い経済学上の法則であり、其價値わ勉強や殴取にも優るであらう。之も正当に理解する労働價値説も崩壊する、人間わ大きい、人間労働と價値の唯一起源となる存在であることわ、経済学上にも忘れてわならぬ。之を走却するとき、人間の労働の内容のみが價値を作出するなどし、自然の如く足の旨漬のお利的独断論が起び出すであらう。

わ九、共働わ能力の效果も増大にする。

分業も共力も純粋して共働といひ、共業及び集力労働に付いて述べた通であると多大にするものであることわ、分業の場合にわ、共働することわ、事に労働に付いても、又工夫に付いても、能力の效果も大にするから、能力に共通する普遍的性質としても見なければならぬ。熟練に付いても、異わ労働を区別する一個の見方であると同時に、各種の能力に存在してあることを意味する。共働に付いても、其が労働や動労の行わるる作業形式であると同時に、作業能率を増大にする結果の共通性を有つものである。

分業にしろ共力にしろ、元て共働するにわ、担当の役割を決めなければならぬ、作業を区分して指当を決わることわ殴取である。ゆへに共働にわ殴取が不可避に結合される。でわ共働と又た作業能率の増大わ、幾分まで殴取の效果であらうか。

戦争するにも歩騎砲工輜重の各兵科が共働しなければならぬ、長い戦線わ多数の聯隊にようて守備も攻撃も分指されてある。第一線の后方にわ後備隊も置かれる。こうした共働の働作とし、矢法即ち軍略とわ区別し得るであらう。軍略が即ち殴取であり、軍略とわ又も将士の決死的努力にもよるも、しかし戦勝の原因わ軍略にもよりのである。両者の果割合を決定することわ不可能である。殴取と共働が加何ほどの割合で作業能率を増大したかに付いても、殆んど判別わできないのである。また強いて区別の必要わないのである。

法であり　又共働わ殴取を成立たしめる前提条件である。

わ十　共働わ作業の苦痛を減少すると同時に、共働わ作業を緊張せしめるに有效な手段